神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

| | |
|---|---|
| **論題** | 神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代撚糸文期土器群<br>―林國治氏旧蔵の横浜市十王堂免遺跡採集資料― |
| **著者** | 千葉　毅 |
| **掲載誌** | 神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 43 号 |
| ISSN | 0910-9730 |
| **刊行年月** | 2016 年（平成 28 年）12 月 |
| **判型** | A4（210mm × 297mm） |

【資料紹介】

# 神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代撚糸文期土器群
## ― 林國治氏旧蔵の横浜市十王堂免遺跡採集資料 ―

千葉　毅

【要旨】
神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市十王堂免遺跡採集縄文土器の報告を行なった。この資料は戦前戦後にかけて横浜市域周辺で考古資料を採集していた林國治氏の旧蔵資料である。
土器群の主体となる時期は縄文時代撚糸文期後半であり、当該期の遺跡としては多量の土器が採集されている。採集された土器片の数は、撚糸文期前半の土器群が八十六点、大浦山式土器が二六〇点、東山式土器が二十二点、無文土器が二八六点、早期後半の土器群が一〇点、草創期隆線文期の可能性がある土器が五点となる。
これまでにも指摘されてきた切れ目状の補修孔についてのほか、器面調整具の痕跡、口縁部の黒色化した土器、土器の大きさについて若干の考察を行なった。

【キーワード】
十王堂免遺跡　赤穂原遺跡　縄文土器　撚糸文土器
大浦山式土器　無文土器　林國治

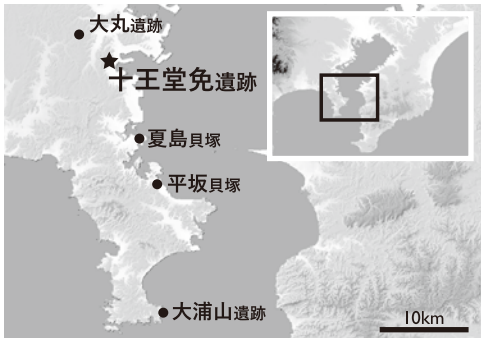
## はじめに

神奈川県立歴史博物館では、その前身となる神奈川県立博物館の一九六七年の設立以来、県内を中心とした考古資料の収集に努めてきた。現在、当館ではそれらの整理作業を進めており、整理が進んだ資料から順次報告を行なっている。
本稿では、横浜市十王堂免遺跡採集の縄文土器の報告を行なう。これらは林國治氏により一九五〇年代後半に採集された資料で、一九六六年に当館へ収蔵された。

## 一　林國治氏による資料採集の経緯と遺跡の概要

### （1）撚糸文土器研究と林國治氏の採集活動

林國治氏は戦前戦後にかけて、横浜市域を中心に考古資料の採集を精力的に行なっていた在野の考古学研究者である(1)。
一九四〇年代～五〇年代の考古学界では、縄文土器の起源をめぐる議論が盛んに行なわれており、その最古の段階に位置づけられると考えられていた撚糸文土器の探求が進められていた。なかでも明治大学の杉原荘介氏、芹沢長介氏らや横須賀考古学会の赤星直忠氏、岡本勇氏らは神奈川県域での発掘調査を多く実施し、横浜市南部から三浦半島周辺は撚糸文土器研究の重要なフィールドとなっていた（杉原・芹沢一九五七、芹沢一九五七、岡本一九六〇など）。そのような中で林氏は横浜市十王堂免遺跡で採集した土器に撚糸文土器の含まれることを知り、それ以降、本遺跡での採集を精力的に行なうことになったのである。
十王堂免遺跡は、現在の横浜市磯子区汐見台に存在した遺跡である（第1図）。撚糸文期の遺物を多く出土する遺跡であったが、開発のために一



第１図　十王堂免遺跡の位置

九六〇年代前半には消滅してしまった。そのため、今日では林氏の採集した資料群は十王堂免遺跡の内容を知るために欠くことの出来ないものとなっている。

林氏は後年に回想録をいくつか著しており、十王堂免遺跡についての記述も認められる。重要な記述であるため、やや長くなるが引用しておきたい。(2)

「二十九年四月八日に始(ママ)めてこの遺跡に赴いた。場所は起伏の多い台地で、その台地の一部の中央が畑で、西より北は急斜面が段々畑となり、東南は斜面が雑木林、その下方田圃に続く低地は畑であり、中央畑の北側は細い道が一本通って、畑と急斜面の雑木林とを境している。東南側も同じく四～五十センチの道が一筋通っている。中央の畑をかって開墾した折に出土した土器、石器を投棄したと考えられる、二次的堆積の処が北側雑木林の一部にある。（中略）三十二年十月の始めに赴いたときは、東南斜面雑木林の中に入った。（中略）山芋を掘った穴が二個ならんで口を開いている。ボーリング棒を持っていたので、一ツの穴の内壁を突いて見ると、小さな土器片が落ちていった。とり上げて見ると口辺部で、口唇が稍肥厚して、撚糸文は密に縦走しており、トジ穴といわれる穴も一個開いている。（中略）これは縄文初頭の夏島式土器であったのである。（中略）そして幾日かの後、即ち十月十日に山芋の穴を中心に試掘した。出土したのは無文土器片と共に横走撚糸文土器だった。（中略）明治大学講師・芹沢長介氏を遺跡へ案内して、大学で発掘したいとの話を伺がい（中略）三十三年六月二十八、二十九、三十の三日間、芹沢長介氏によって発掘調査が行なわれ、大勢の学生が発掘に参加した。（中略）十王堂免は隣接の磯子区森町赤穂原、磯子区間渡りと共に、ニュータウン磯子団地として造成工事が行なわれ、高い処はブルドーザーで深く削り押し崩され、低い処は盛り上り、そして鉄筋コンクリートのアパートが数十棟建ちならんだ。そのため、早期、中期の遺跡が四箇所破壊や文字通り煙滅してしまった。そして町名も三者帰一して磯子区汐見台となった。」（林一九六七）

「三十三年すぎる頃から、十王堂免、平台、大塚、赤穂原、同経塚山、磯子町間渡り等の在遺跡の広地域がニュータウン磯子団地としての造成工事が十王堂免、平台から始められた。遺跡の煙滅、土器、石器等資料の滅失を惜しみ、毎週の日曜日雨の降る日も工事場所に赴いて土器片、礫器等の採集に努めた。採集した資料は頗ぶる多数であった。」（林一九七七）

「昭和三十三年六月二十八日、調査者を芹沢長介氏、多数の学生が参加して発掘が開始された。場所は森町赤穂原の最西北端、私が昭和三十二年秋、試掘によって大浦山式、平坂式の土器片数十個を採集したところである。」（林一九七九）

これらの記述を参照すると、林氏は一九五四年四月八日に初めて十王堂免遺跡を訪れて以来、継続的に本遺跡を踏査し、一九五〇年代後半には開発にさらされた本遺跡において丹念に遺物の採集を行なっていたことが分かる。また、そうして得られた資料を実見した明治大学の芹沢長介氏が現地の発掘調査を希望し、実際に一九五八年に調査が実施されている。芹沢氏による発掘調査の報告書は未刊だが、一九六二年刊行の『日本考古学年報』に若干の記述があり、それによると芹沢氏が林氏採集資料を実見したのは一九五八年三月のようである（芹沢一九六二）。

第１表　主な撚糸文土器研究と林國治氏の動向

| | | |
|---|---|---|
| 1941 | 白崎高保が1936年に稲荷台遺跡で発見した撚糸文土器を発表。 | |
| 1942～1948 | 白崎高保・江坂輝彌・矢島清作・吉田格らによって撚糸文土器の研究が進展。 | |
| 1949 | 5月～6月 平坂貝塚調査（芹沢長介・杉原荘介・岡本勇ら） | 2月 大浦山遺跡調査［試掘］（赤星直忠・岡本勇ら） |
| 1950 | 2月～4月 夏島貝塚調査［1次］（杉原荘介・芹沢長介ら） | |
| 1951 | 11月～1952年1月 大丸遺跡調査（芹沢長介ら） | |
| 1952 | | |
| 1953 | 平坂貝塚報告（岡本勇） | |
| 1954 | 林國治による十王堂免遺跡資料採集 | |
| 1955 | 6月 夏島貝塚調査［2次］（杉原荘介・芹沢長介ら） | |
| 1956 | | |
| 1957 | 大丸遺跡報告（芹沢長介）<br>夏島貝塚報告（杉原荘介・芹沢長介） | |
| 1958 | **3月 芹沢長介が林國治採集資料を見て発掘を希望**<br>**6月 赤穂原遺跡調査（芹沢長介ら）**<br>紅取遺跡群、ゴルフ場・ニュータウン建設開始 | 6月 大浦山遺跡調査（横須賀市博物館） |
| 1959 | | |
| 1960 | 大浦山遺跡報告（岡本勇） | |
| 1961 | | |
| 1961~1962 | 十王堂免遺跡、ゴルフ場・ニュータウン建設のためほぼ壊滅 | |
| 1966 | 林採集資料が神奈川県立博物館（準備室）に収蔵される | |

先述のように、当時の考古学界では、最古の縄文土器としての撚糸文土器の探求が盛んに行なわれていた。林氏が十王堂免遺跡を踏査、撚糸文土器を採集していた時期はまさにそのような時期にあたっている（第1表）。

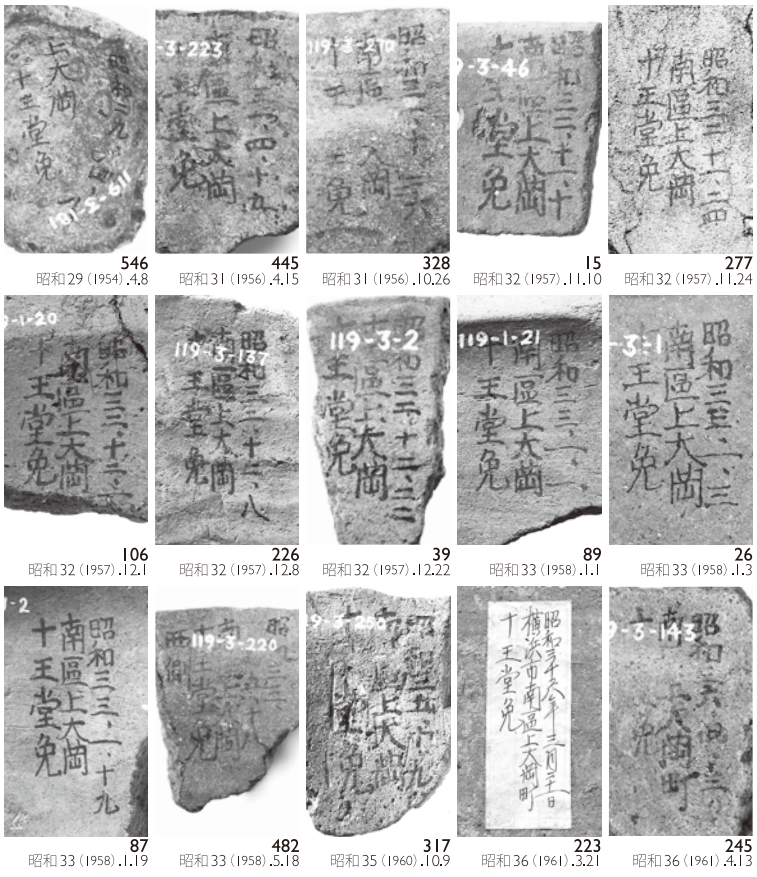
林氏は大学等での考古学の専門的教育を受けておらず、在野にあって基本的に独学で研究を行なっていたが、学界の最新の動向にも目を向けて活動していたことが窺われる。

林氏の採集資料は一九六六年に当館に収蔵された。それらの中には、林氏により採集年月日、採集場所が墨書で注記されているものが多く存在する（第2図）。十王堂免の地名とともに記された日付の中で最も古いものは林氏が初めて本遺跡を訪れたと述べている一九五四年四月八日付けものであり、最も新しいものは一九六一年四月十三日付けである。本地域の造成の主目的であった磯子団地建設の工事が起工されたのは一九六一年一月二十八日であるから[3]、工事が開始されてから数ヶ月の間は現地踏査を継続していたようである。

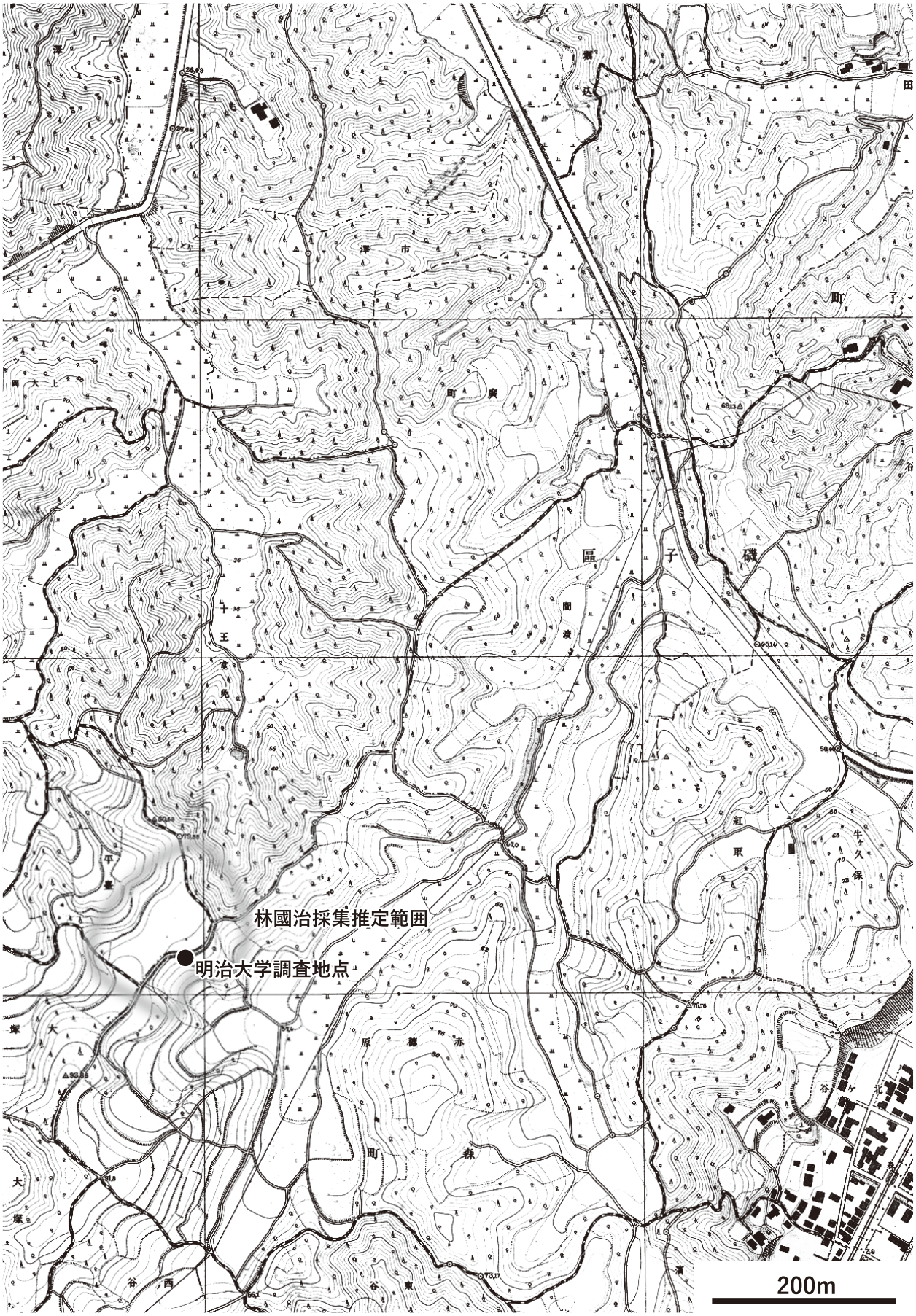
## （2）遺跡の位置および林氏の採集地点

十王堂免遺跡周辺は一九六〇年代以降の開発に伴う造成工事のため、大幅に地形が改変されている。遺跡範囲の行政区画も造成前は横浜市南区上大岡町十王堂免、平台、磯子区森町赤穂原にわたっていたようだが、一九六三年六月の整理により一帯は磯子区汐見台となった。

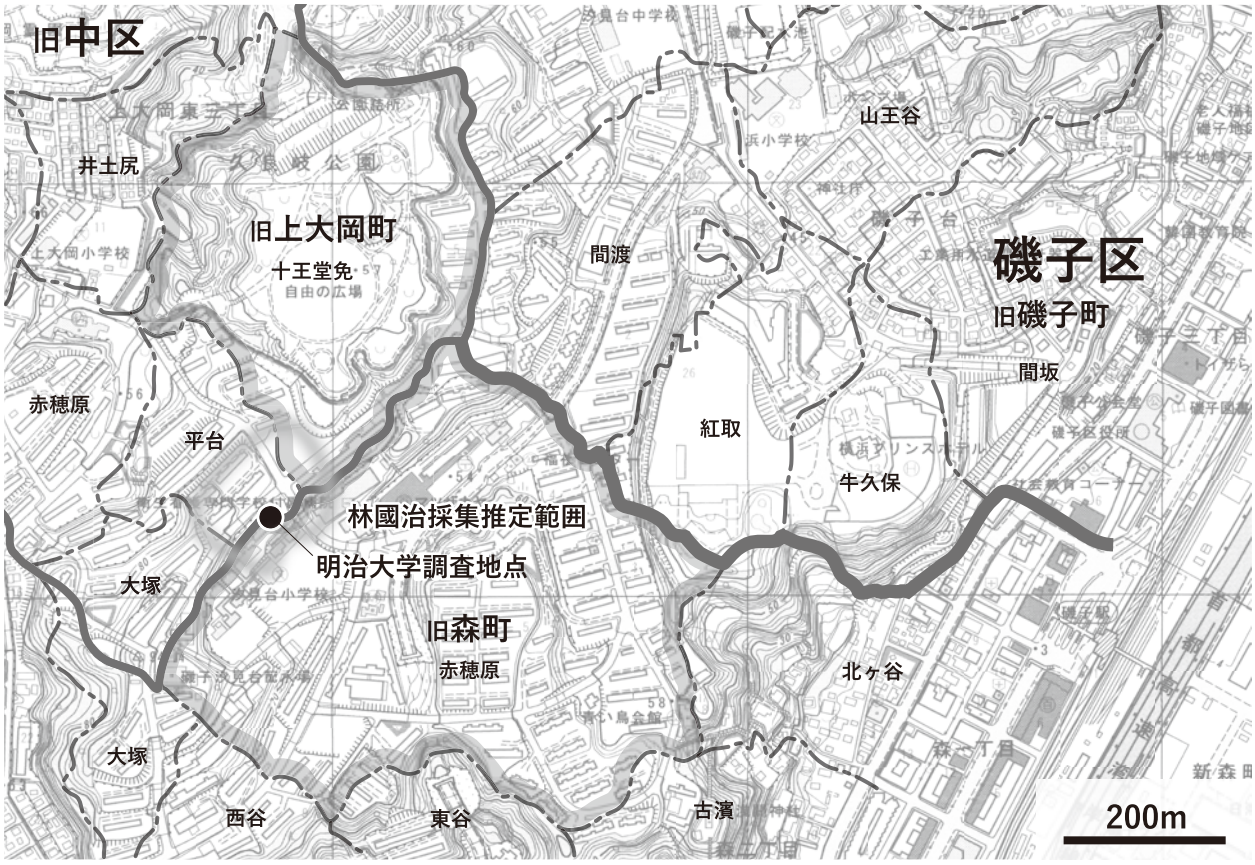
遺跡がほぼ消滅してしまった今日となっては、遺跡の正確な範囲を求めることは困難だが、林氏の採集地点は氏の記述と造成が行なわれる以前の地形図から、おおよその位置を推測することが出来る（第3図）。先に引用したように十王堂免遺跡に関する氏の記述は複数存在するが、一




第２図　林氏による土器片への注記




第３図　十王堂免遺跡周辺の地形と林氏採集推定範囲および明治大学調査地点
横浜市 1/3000 地形図「磯子」昭和 8 年（横浜開港資料館所蔵）より作成

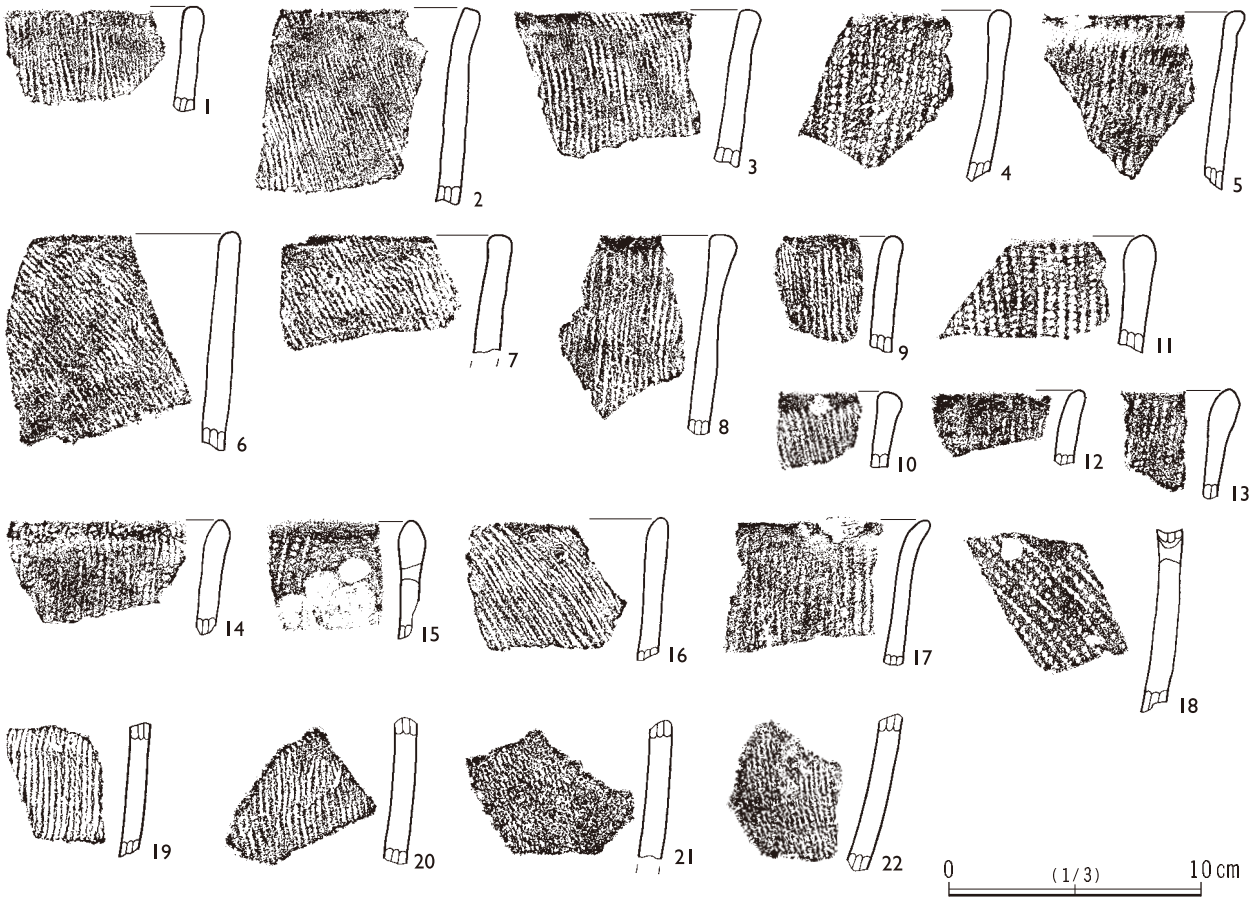


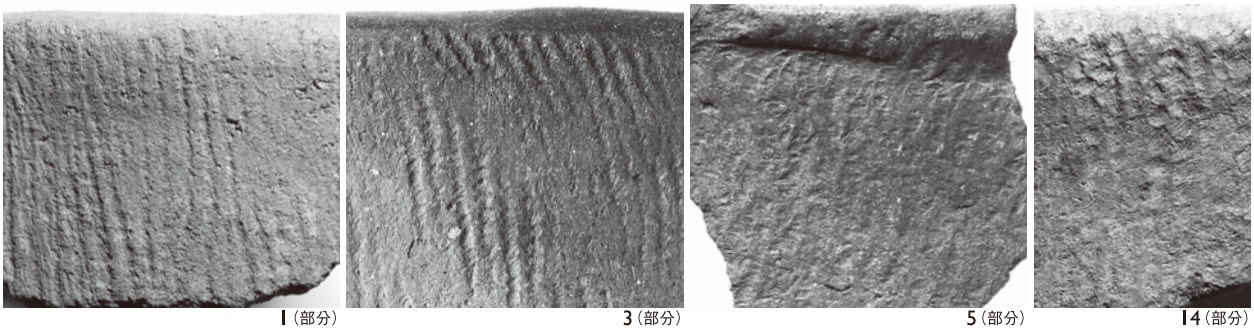

第４図　十王堂免遺跡周辺の現在の地形と林氏採集推定範囲明治大学調査地点
国土地理院 1/10,000 地形図「上大岡」平成 16 年に、昭和８年の地形図からトレースした境界を重ねて作成

九六七年の記述が最も具体的で参考になる。ただ、氏の「台地の一部の中央が畑」で「西より北は急斜面が段々畑となり、東南は斜面が雑木林、その下方田圃に続く低地は畑」という表現が該当しそうなのは地形図の十王堂免の範囲内には見当たらず、付近では平台の東南部にある平坦地がそれに当たりそうである。一方で、氏の採集資料には「平台」や「森町赤穂原」「森町赤穂原経塚山」といった注記も一定数存在することから、これらの地区名を使い分けていたようである[4]。そう考えると、林氏のこれらの地区の認識と行政区画としての字との間には微妙なズレがあった可能性もあろう。いずれにしても、林氏の記述と地形図を参照する限り、林氏のいう「十王堂免」は地形図での平台および森町赤穂原の一部を含んでいると考えてよいだろう。なお、赤穂原という地名は森町の他に上大岡町にも存在するが（平台の西に隣接、第４図）、林氏の注記はいずれも「森町赤穂原」と表記されており、上大岡町赤穂原のものは見当たらない。

### （3）明治大学調査地点―「赤穂原遺跡」―との関係

明治大学の芹沢長介氏は一九五八年三月に林氏の採集資料を実見し本遺跡の発掘調査を希望、六月に発掘調査を実施している。調査概要は、一九五八年度の『日本考古学年報』に「横浜市赤穂原遺跡」として記されている（芹沢一九六二）。それによると、所在地は「磯子区森町赤穂原」で「標高は約八〇ｍ」「磯子の海岸から直線距離にして約八〇〇ｍ」「南東にむく斜面の一端に、包含層が露出している」とのことである。また明治大学に保管されている当時の調査記録によると、調査地点は現在の汐見台小学校の敷地内に該当するという[5]。これらは林氏の記述にある「東南斜面雑木林」や「森町赤穂原の最西北端」という表記とも矛盾しない。




第５図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（1）（当館蔵）

これらのことから明治大学の調査地点は林氏の「十王堂免」としていた範囲に含まれると考えてよいだろう（第３・４図）。

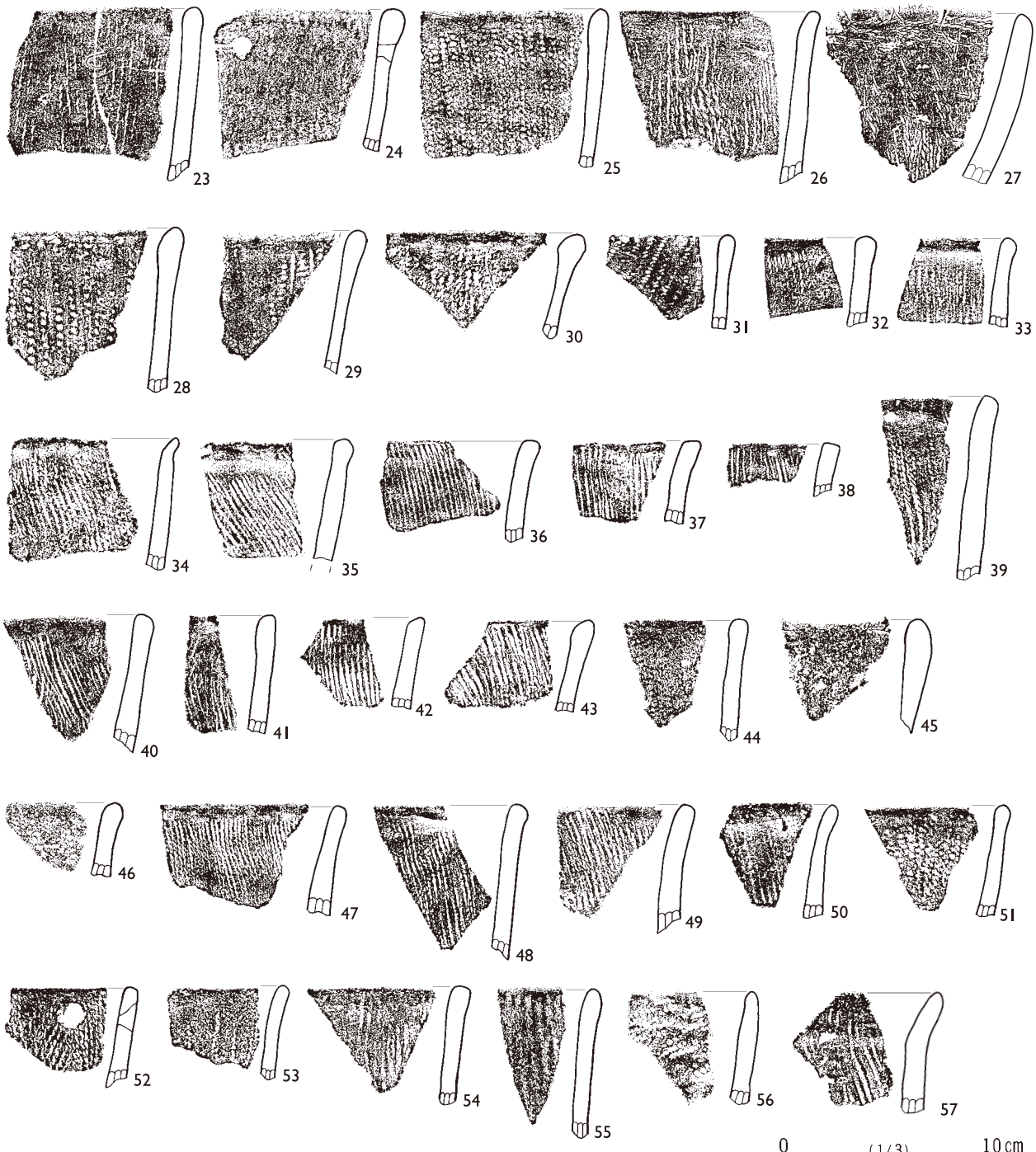
明治大学の調査以降、芹沢氏の記述が引用され「赤穂原遺跡」と呼称されることが多いが（神奈川県史編纂室編一九七九など）、本稿では林氏にならい十王堂免遺跡としておく。

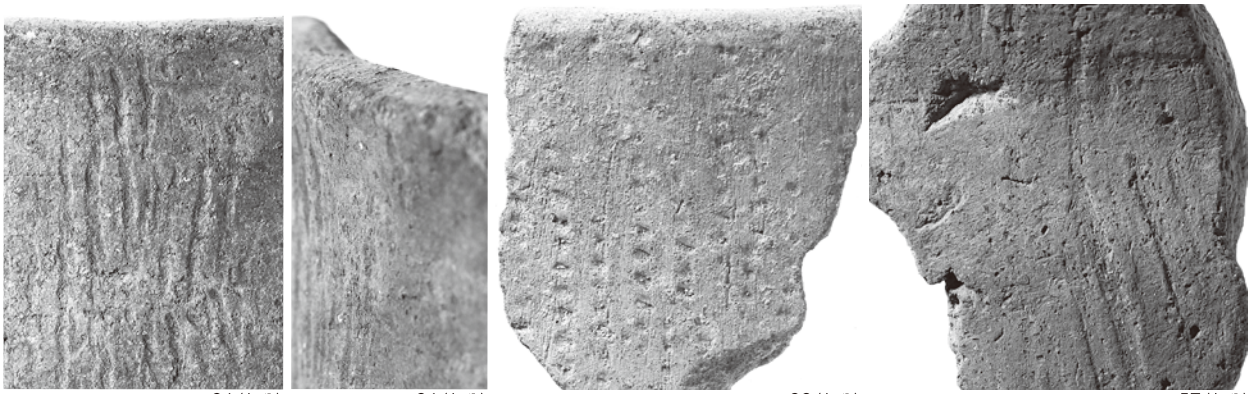
なお、明治大学の調査の際には、表土から加曽利E式土器、その下層から勝坂式土器、阿玉台式土器が多数、その下方の黒色土層から「典型的な大浦山式土器」が多数、さらにその下層からは「夏島式と考えられる破片」が少数出土したらしい（芹沢一九六二）。

## 二　林氏採集土器群について―観察所見―

本章では林氏が採集した土器群の観察所見を記載していく。林氏の収集した資料はいずれも表面採集品であるため、層位的な検討や分布の傾向等を検討するための情報は欠落している。ここでは主に型式学的な分類により記述していく。

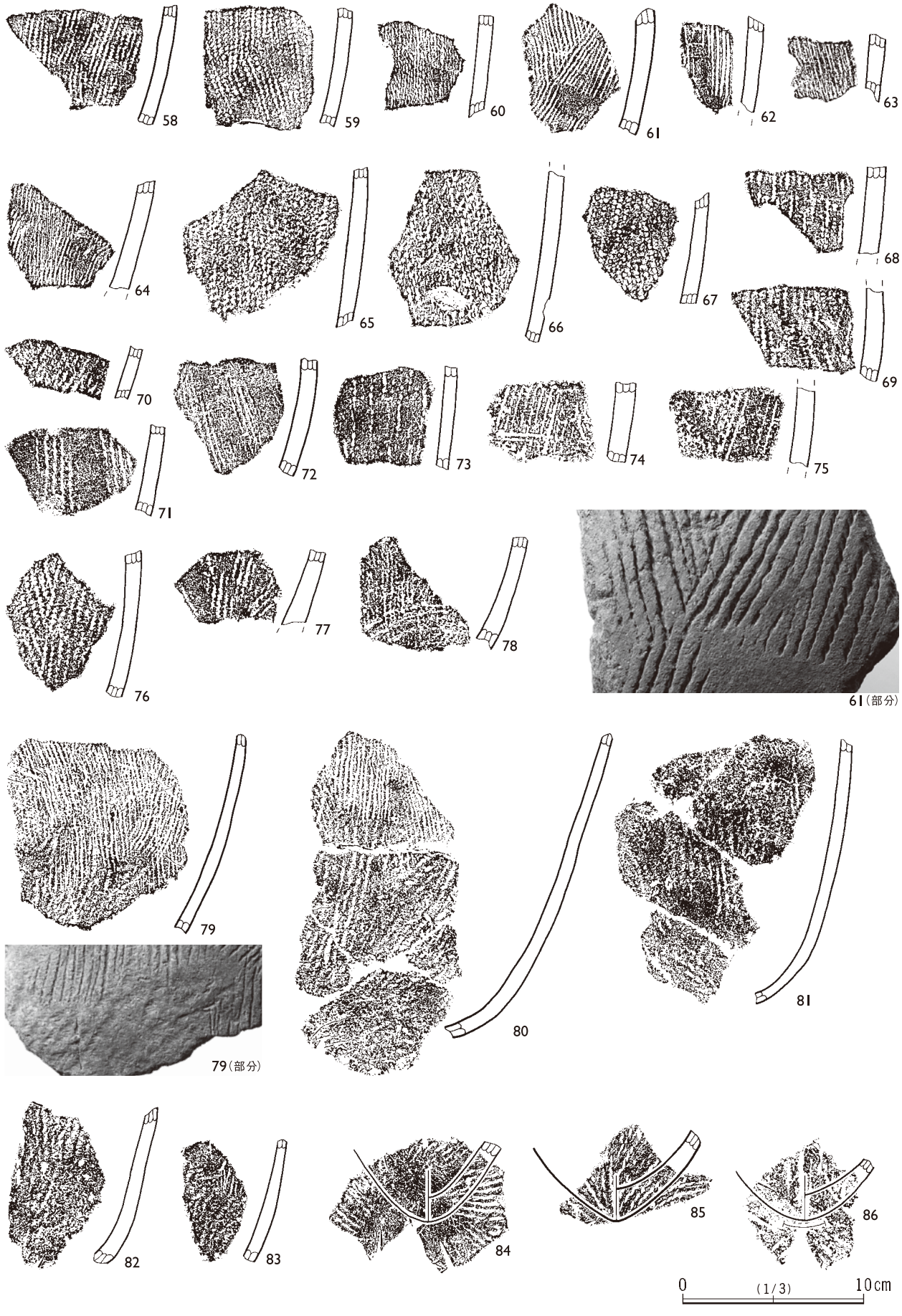
土器群の主体は撚糸文土器である。その他に早期後半、中期中葉～後葉の土器がある。押型文土器は含まれない。なお、中期土器については本稿では紙面、作業上の制約から割



26（部分）　26（部分）　28（部分）　57（部分）

第６図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（2）（当館蔵）




第７図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（3）（当館蔵）

愛した。

林氏の採集土器は、中期土器を除くと六六九点、重量にして約四十二・六kgに及ぶ。本稿ではこのうち細片等を除く五八三点を報告する(6)。掲載資料には通し番号を付した。重量、器面調整等については観察表に記載した。なお、以下「林氏資料」とした場合には、当館に収蔵されている林氏による十王堂免遺跡採集資料を示すものとする。

## (1) 夏島式（第5図、第2表）

1～22は夏島式である。縦位あるいは斜位に撚糸文および縄文が施されるもので、撚糸文の条間が狭く、施文がやや深いものを一括した。1～17は口縁部破片で、17が緩く外反する他は直立する口縁となる。断面は丸棒状のものが多いが、2、3は口唇が面取りされ角頭状となる。5、10、15等は口唇部が肥厚する。施文原体は、3がRL?、5、11、18がRLの縄文となる他は撚糸文が用いられる。撚糸文の撚りはRとLがおおよそ半々となる。

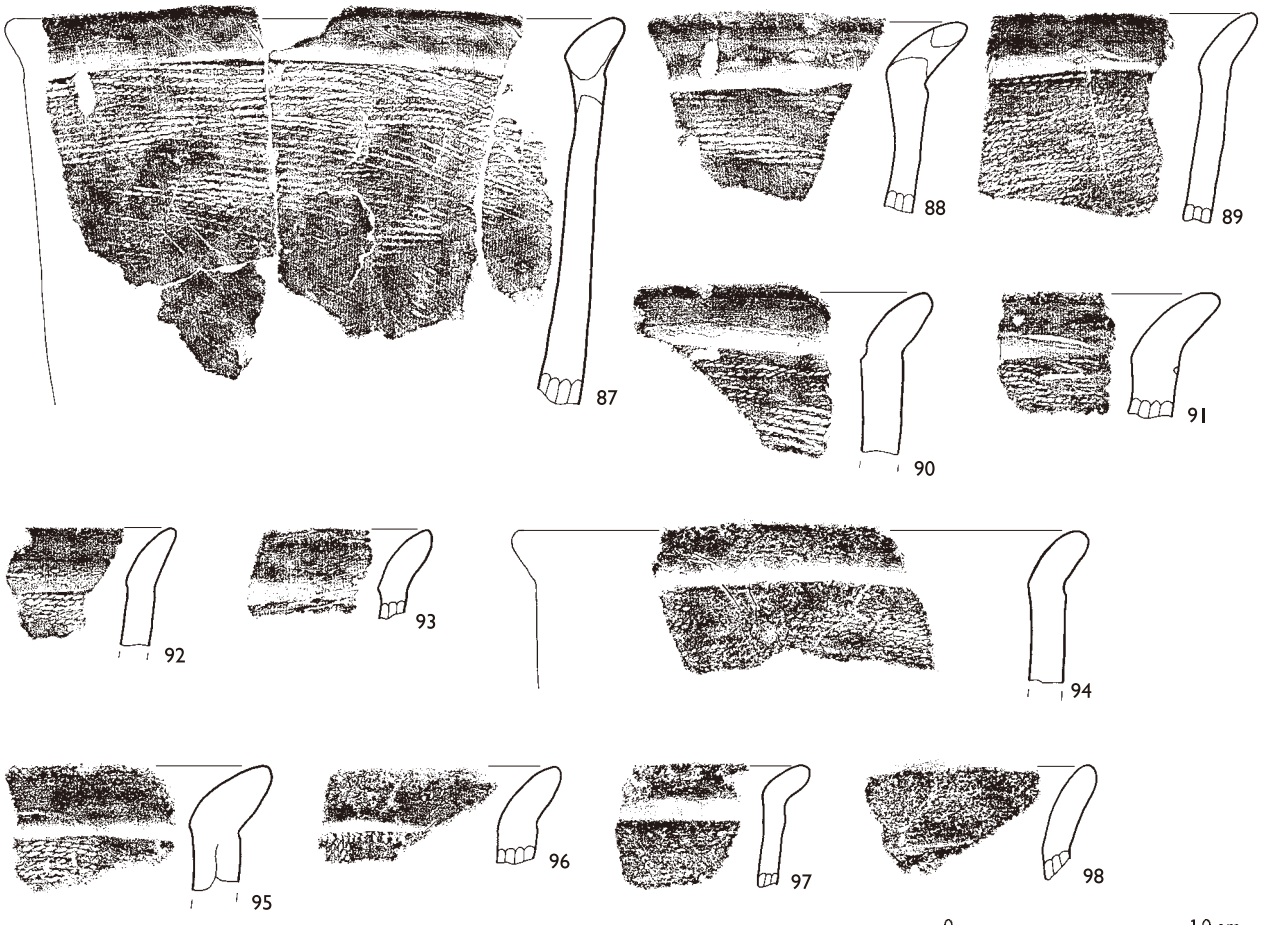
## (2) 稲荷台式（第6・7図、第2表）

23～86は稲荷台式である。縦位あるいは斜位に撚糸文および縄文が施されるもので、夏島式に比べ撚糸文の条間がやや広がり、施文も浅くなる。また、撚糸文、縄文の撚りが不均質で粗く、施文単位も乱雑なものが多くなる。口縁は弱く外反するものが多い。断面は丸棒状のものが多いが、37、38は角頭状となる。26にもわずかに平坦面が作出されている。24、28～30等のように口唇部が肥厚するものもある。原体には撚糸文が用いられるものがほとんどである。27では、口縁部直下は横位に、それ以下は縦位の施文となる。56には縄文RLが施文される。施文は乱雑で、器面には凹凸が目立つ。57は絡条体条痕文が施される。口縁がやや外反し内面には稜が作出される点から後述の大浦山式である可能性も考えられるが、口縁部付近での縦位施文という点から稲荷台式とした。

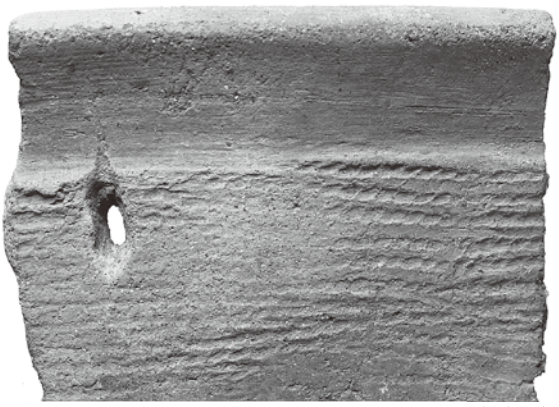
79～83は焼成や胎土等の類似性から同一

第２表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表（夏島式・稲荷台式）

| 番号 | 注記番号 | 重量(g) | 施文具 | 器面調整（内面） |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 119-3-035 | 28 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 2 | 119-3-047 | 57 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 3 | 119-3-008 | 56 | RL? | ナデ |
| 4 | 119-3-009 | 39 | 撚糸R | ミガキ（横） |
| 5 | 119-3-032 | 34 | RL | 不明瞭 |
| 6 | 119-3-004 | 73 | 撚糸R? | 擦痕（横） |
| 7 | 119-3-013 | 43 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 8 | 119-3-017 | 34 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 9 | 119-3-042 | 16 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 10 | 119-3-030 | 11 | 撚糸L? | 擦痕（横） |
| 11 | 119-3-024 | 35 | RL | ミガキ（横） |
| 12 | — | 12 | 撚糸R | 擦痕（横） |
| 13 | 119-3-028 | 13 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 14 | 119-3-010 | 29 | 撚糸R? | ナデ |
| 15 | 119-3-046 | 22 | 撚糸L? | ナデ |
| 16 | 119-3-022 | 33 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 17 | 119-3-005 | 31 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 18 | 119-3-044 | 35 | RL | ナデ |
| 19 | 119-3-105 | 22 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 20 | 119-3-134 | 25 | 撚糸R? | 不明瞭 |
| 21 | — | 31 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 22 | — | 27 | 撚糸L | ナデ |
| 23 | 119-3-045 | 86 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 24 | 119-3-048 | 65 | 撚糸L? | 擦痕（横） |
| 25 | 119-3-007 | 71 | 撚糸R? | ナデ |
| 26 | 119-3-001 | 75 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 27 | 119-3-050 | 81 | 撚糸L | ナデ |
| 28 | 119-3-014 | 61 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 29 | 119-3-031 | 28 | RL? | 擦痕（横） |
| 30 | 119-3-036 | 29 | 撚糸L | ケズリ状の擦痕（横） |
| 31 | 119-3-012 | 16 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 32 | 119-3-018 | 19 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 33 | 119-3-040 | 19 | 撚糸L | ミガキ |
| 34 | 119-3-006 | 39 | 撚糸R | ナデ |
| 35 | 119-3-011 | 36 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 36 | 119-3-016 | 25 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 37 | 119-3-019 | 18 | 撚糸R? | ナデ |
| 38 | — | 11 | 撚糸R | 擦痕（横） |
| 39 | 119-3-002 | 34 | 撚糸R | 擦痕（横） |
| 40 | 119-3-021 | 32 | 撚糸R | 擦痕（横） |
| 41 | 119-3-041 | 15 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 42 | 119-3-039 | 16 | 撚糸R? | ナデ |
| 43 | 119-3-015 | 24 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 44 | 119-3-025 | 19 | 撚糸不明 | 不明瞭 |
| 45 | 119-3-392 | 26 | 不明 | 擦痕（横） |
| 46 | — | 15 | 撚糸L | ナデ |
| 47 | 119-3-003 | 40 | 撚糸L | ナデ |
| 48 | 119-3-029 | 30 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 49 | 119-3-020 | 26 | 撚糸R | 擦痕（横） |
| 50 | 119-3-023 | 17 | 撚糸R? | 不明瞭 |
| 51 | 119-3-043 | 21 | 撚糸R? | 擦痕（横・斜） |
| 52 | 119-3-034 | 22 | 撚糸R | 擦痕（横） |
| 53 | 119-3-033 | 17 | 撚糸L? | 不明瞭 |
| 54 | 119-3-027 | 24 | 撚糸L? | 擦痕（横） |
| 55 | 119-3-038 | 22 | 撚糸不明 | 擦痕（横） |
| 56 | 119-3-076 | 24 | RL | 不明瞭、凹凸あり |
| 57 | 119-3-311 | 30 | 絡条体 | 擦痕（横） |
| 58 | 119-3-118 | 42 | RL | ナデ |
| 59 | 119-3-112 | 48 | 撚糸L | 擦痕（縦） |
| 60 | — | 24 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 61 | 119-3-103 | 46 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 62 | — | 15 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 63 | — | 15 | 撚糸L | ナデ |
| 64 | — | 34 | 撚糸R? | 不明瞭 |
| 65 | 119-3-121 | 67 | 撚糸R | ナデ |
| 66 | 119-3-152 | 69 | 撚糸R? | 不明瞭 |
| 67 | 119-3-107 | 31 | RL? | ケズリ（縦）→ミガキ |
| 68 | — | 32 | 撚糸R? | ナデ |
| 69 | 119-3-131 | 40 | RL? | ナデ |
| 70 | — | 13 | 撚糸L | ナデ |
| 71 | — | 33 | 撚糸L | ナデ |
| 72 | 119-3-136 | 43 | 撚糸L | 不明瞭 |
| 73 | — | 35 | 撚糸L | 擦痕（横） |
| 74 | — | 29 | 撚糸不明 | 不明瞭 |
| 75 | — | 30 | 撚糸不明 | 不明瞭 |
| 76 | — | 41 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 77 | — | 31 | 撚糸R | 不明瞭 |
| 78 | — | 35 | 撚糸L | ナデ |
| 79 | 119-3-097A | 91 | 撚糸R・RL | ケズリ状の擦痕（横・斜） |
| 80 | 119-3-097B | 139 | 撚糸R・RL | ケズリ状の擦痕（横・斜） |
| 81 | 119-3-097C | 105 | 撚糸R・RL | ケズリ状の擦痕（横・斜） |
| 82 | 119-3-097D | 40 | 撚糸R・RL | ケズリ状の擦痕（横・斜） |
| 83 | 119-3-097E | 16 | 撚糸R・RL | ケズリ状の擦痕（横・斜） |
| 84 | 119-1-120 | 73 | 撚糸R | 不明 |
| 85 | 119-3-153 | 48 | 撚糸R | ナデ |
| 86 | 119-3-187 | 31 | 不明 | ナデ |

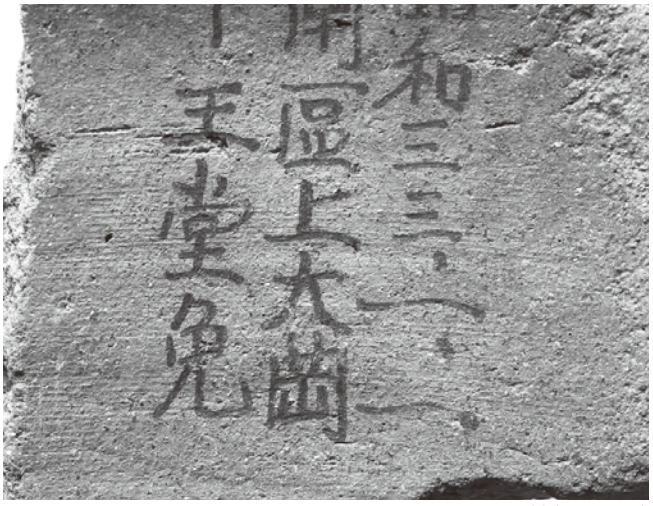


87



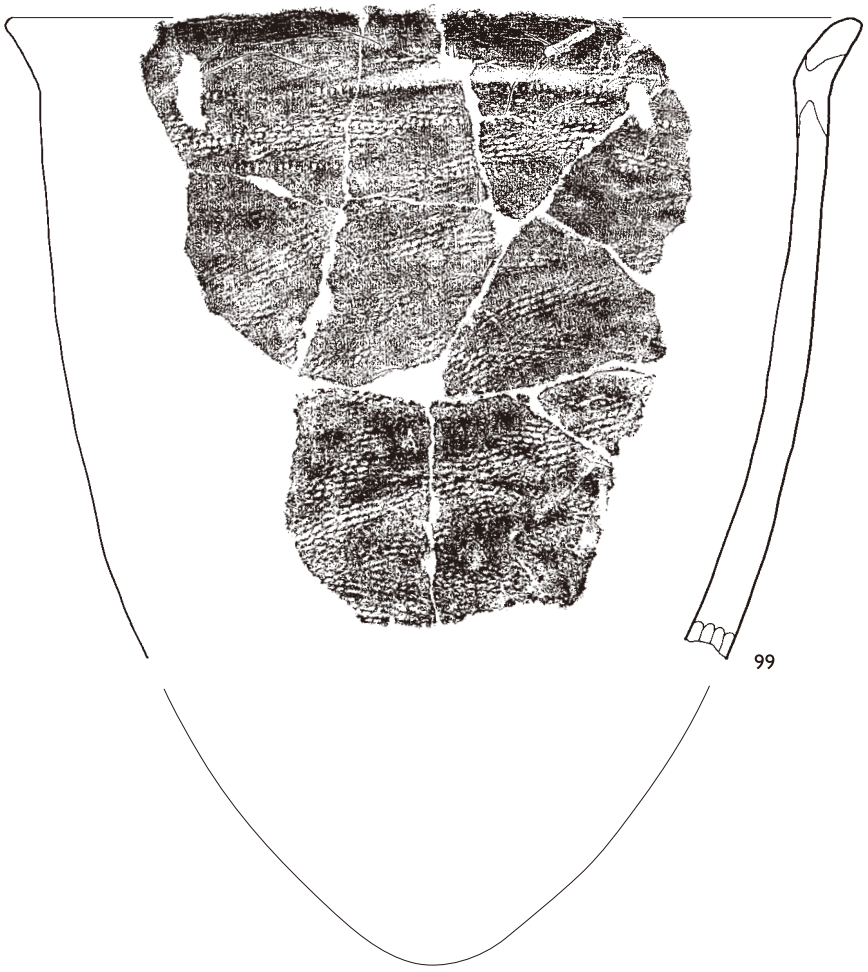
87（部分）

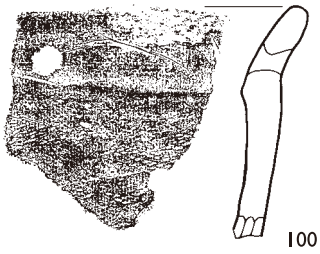
88（部分）

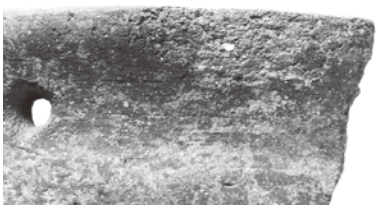


89（内面・部分）

第８図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（4）（当館蔵）

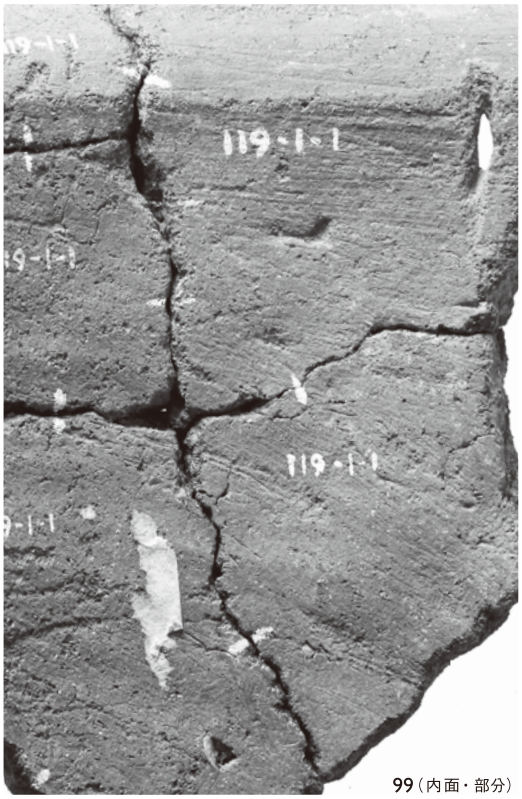




100（部分）

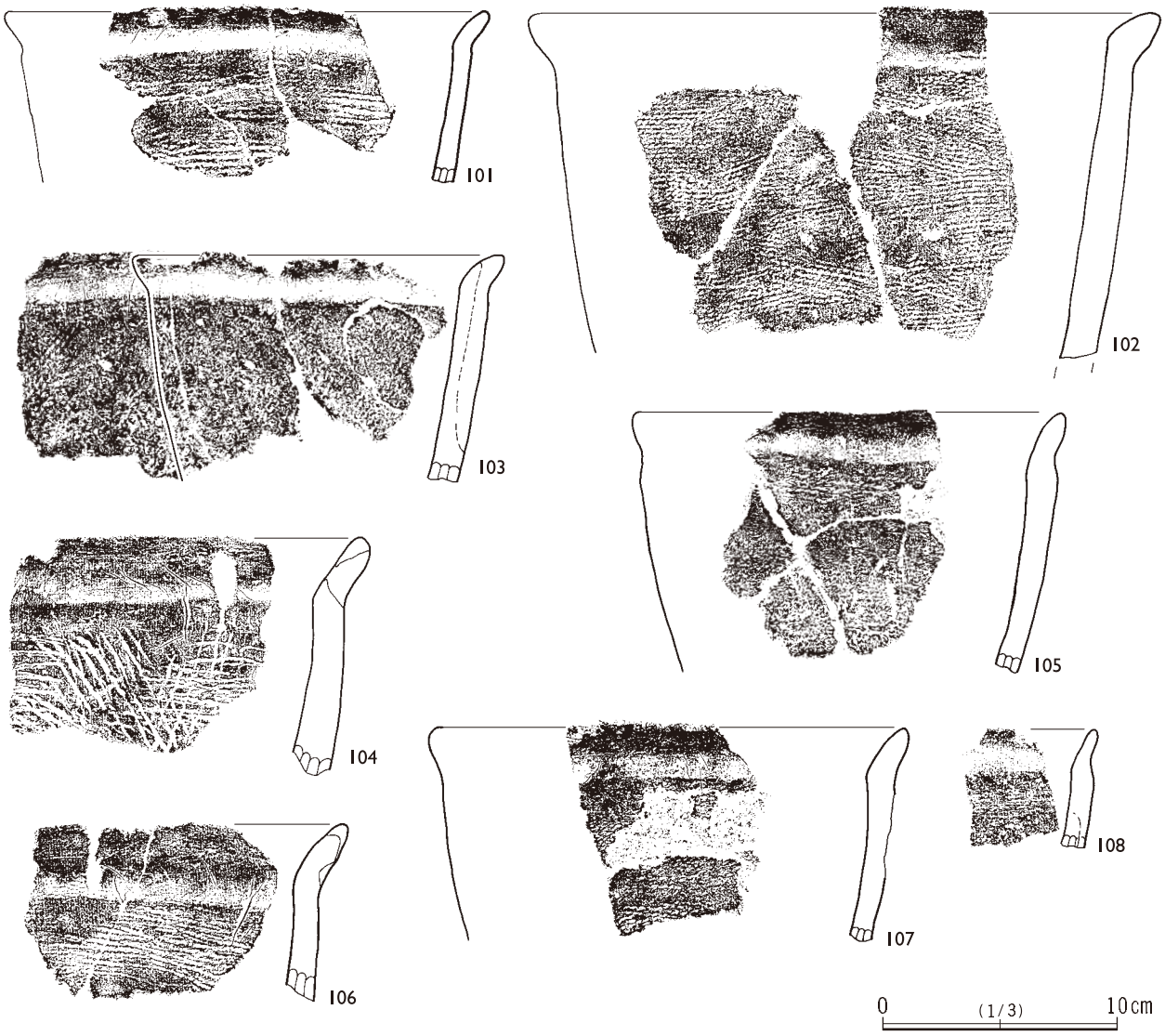
0 (1/3) 10cm

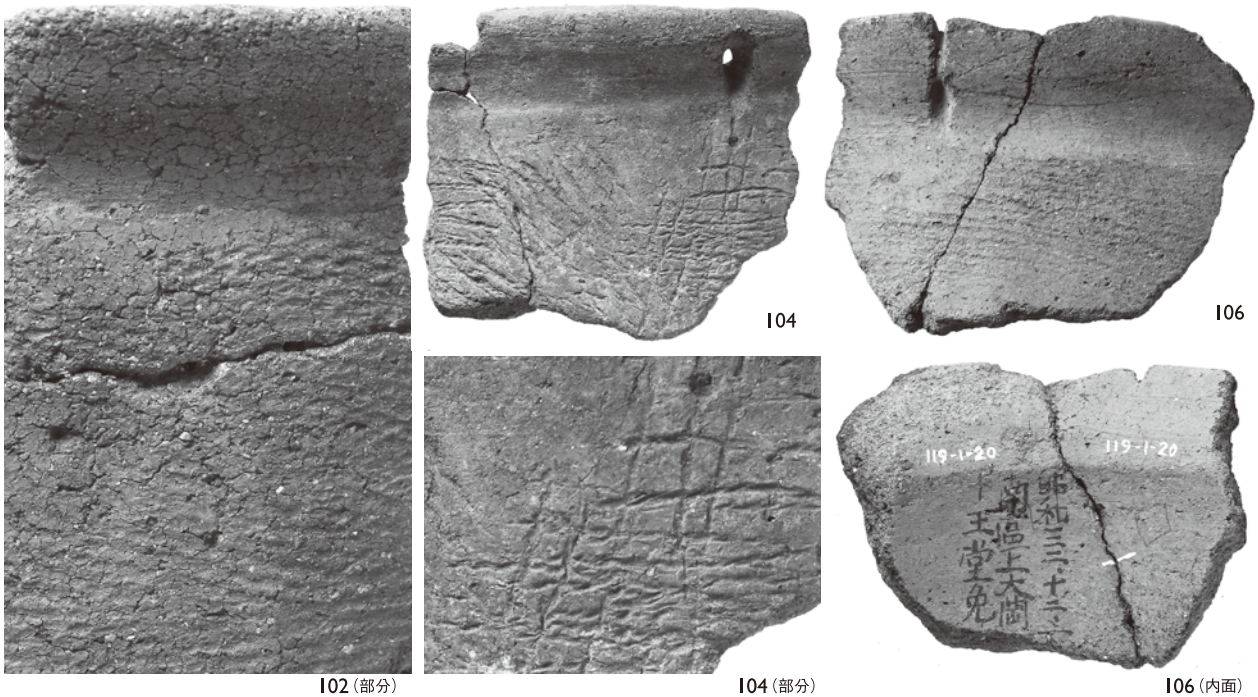
99（部分）



99（内面・部分）

第９図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（5）（当館蔵）




102（部分）　104（部分）　106（内面）

第 10 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（6）（当館蔵）

個体と考えられる。一個体に撚糸文と縄文の両者が施文される事例で、あまり類例がない。胴部下半の破片と思われる。下方に縄文Rが施文された後、上方に撚糸文Rが施される。他の土器片に比べ器壁が薄く、焼成もやや異なる。早期後半等の他時期の所産である可能性も考えられるが、撚糸文の様相が他の稲荷台式土器と類似する点等から本時期とした。

84～86は底部破片である。いずれも底部際まで縦位の撚糸文が施される。先端部の内面はわずかに肥厚する。

### （3）大浦山式（第8～20図、第3～5表）

87～276は横位に撚糸文が施されるもので大浦山式に比定される。大浦山式にはいくつかの分類案、編年案が示されているが（岡本一九六〇、宮崎一九八一、原田一九八九、石井一九九一、戸田一九九五、原田二〇〇八など）、未だ共通理解には至っていないようである。本稿では新しい分類案を示すことはせず、これらの成果を参照しつつ記述していく。

大浦山式の口縁部形態に大きく二つの種類があることは当初から指摘されている通りである（岡本一九六〇）。一つは口縁部下に屈曲をもつもので、岡本勇氏により「大浦山式a類」とされた一群、もう一方は屈曲をもたず直立するもので「大浦山式b類」とされた一群である。本稿でもこれにならい呼称する。林氏資料においては前者は五十九点、後者は八〇点確認できた。いずれも平縁で波状口縁や突起等はない。

厚めの器壁、赤褐色を帯びた胎土に白色の砂粒が目立つ点等はこれまでに指摘されてきた通りである。また岡本氏が「軽髪（けいしょう）」とした胎土―「脆く」「火山灰を思わせるような粘着性に乏しい」土―が用いられる例も散見される。これらには器壁に発泡痕のような一㎜程度の小穴が多数認められることが多い。

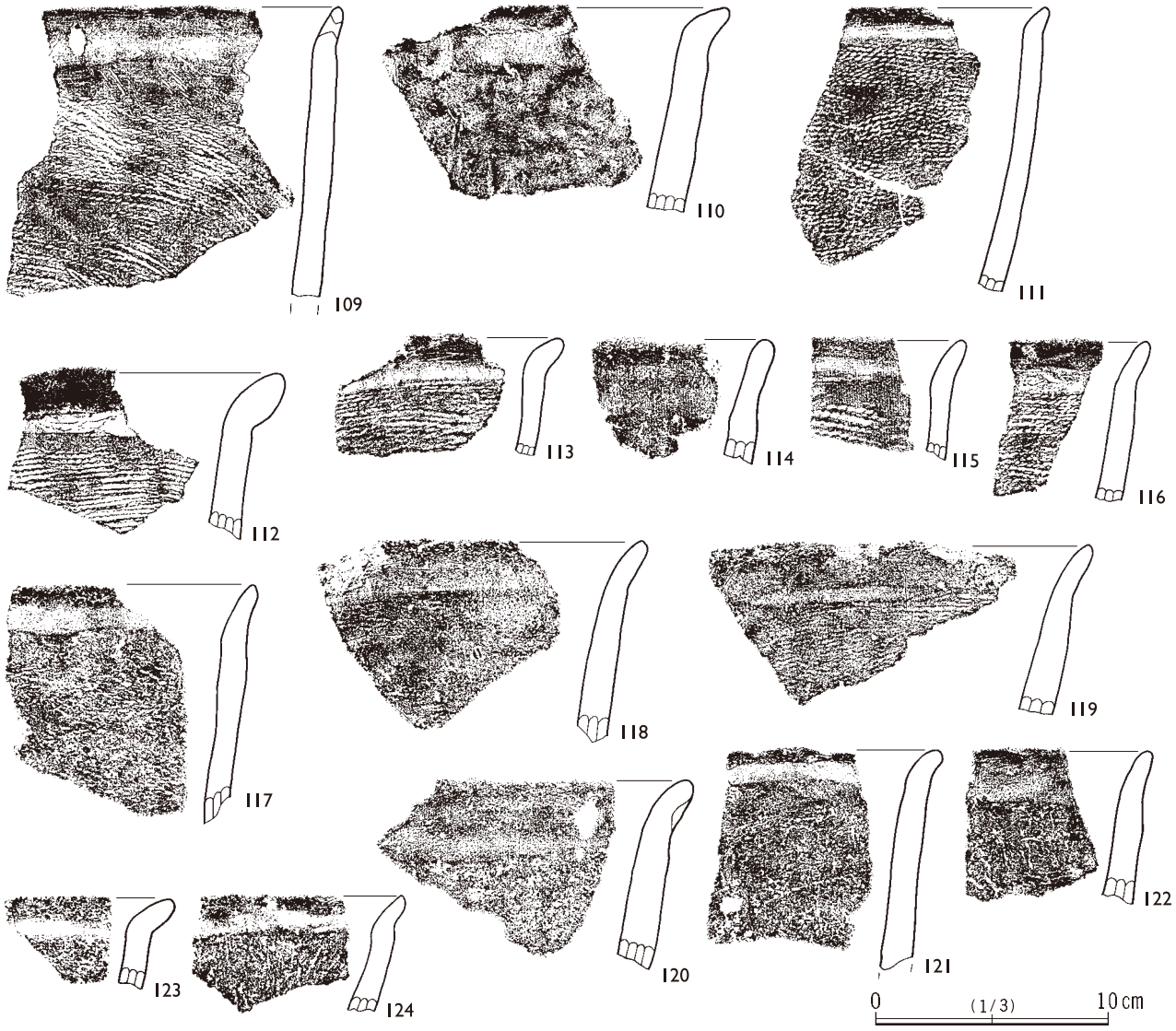
#### a．口縁部に屈曲をもつもの―大浦山式a類―

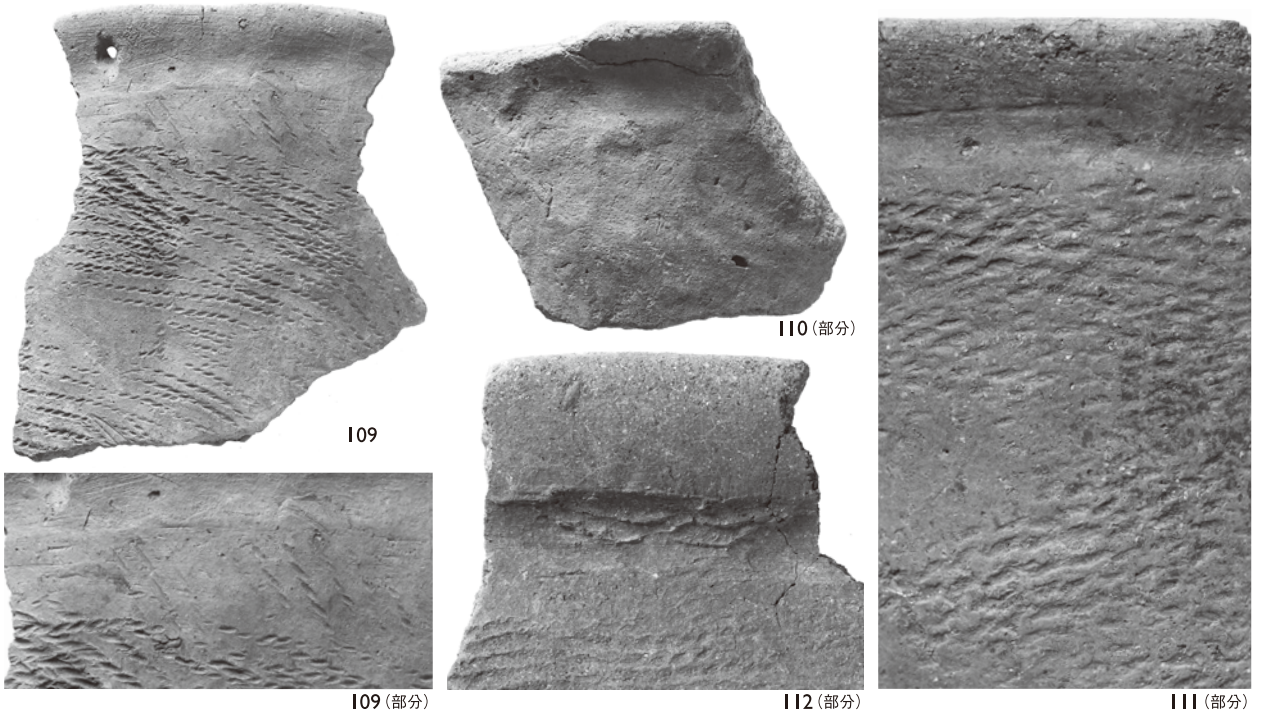
87～145は口縁部に屈曲をもつもので「大浦山式a類」と呼称される一群である。原田昌幸氏（一九八九）が指摘するように屈曲部の形態にはいくつかのヴァリエーションがあり、段状となるもの（87～97など、原田氏の「形態③」に概ね該当する）、凹線状となるもの（100～122など、原田氏の「形態②」に概ね該当する）、緩いカーブとなるもの（125～145など、原田氏の「形態①」に概ね該当する）に大別できる。ただ、これらの差は漸位的であり、一個体内でも部位により形態が異なることもある。99では、破片の左方の屈曲は緩いカーブになっているが、右方では段状になる。

口縁部から屈曲部までは無文となる。無文部の幅は一～三㎝程度で、二～三㎝程度になるものが多い。器面には横位の調整痕が観察される（87、99などの写真参照）。

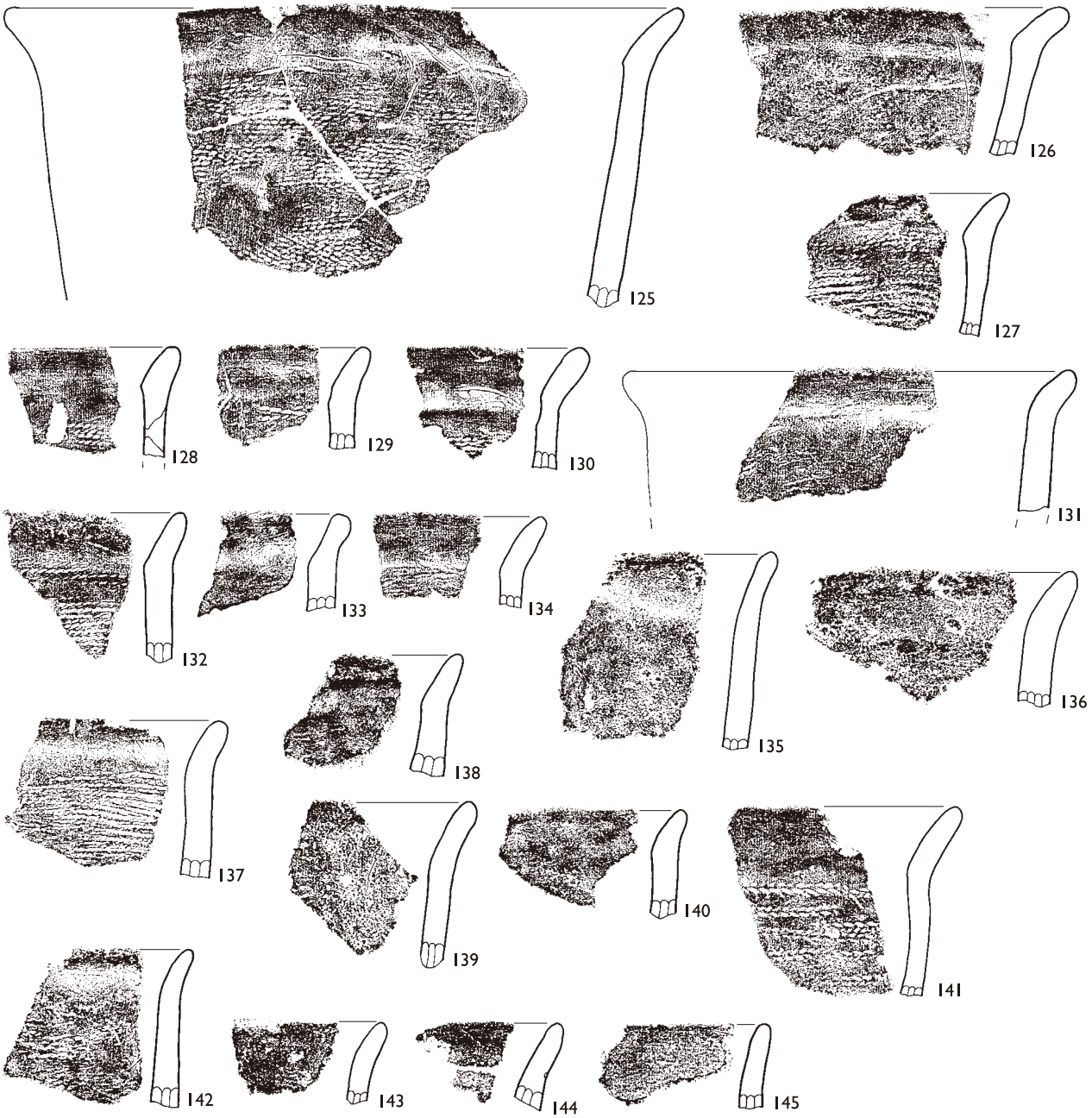
屈曲部内面形態にも、稜が作出されるもの（87～97、99～108など）、緩いカーブとなるもの（98、118～122など）があり漸位的な変化が見られる。傾向としては外面の屈曲部が段状になるものは内面にも明確な稜が作出されるものが多く、外面が凹線状、緩いカーブになるものは内面も緩いカーブになるものが多いようである。

外面の屈曲部以下には撚糸文が横位に施文される。原体は撚糸Rがほとんどを占める。条間隔は一～二㎜程度のものが多いが、四～五㎜程度とやや広いもの（104、106、109など）も認められる。施文範囲は屈曲部以下の全面に及ぶが、87のように屈曲部下一〇㎝程度に施文され、それ以下は疎らとなる例もある。施文の密度はあまり高くなく、無文部も多く残される。圧痕は深く、節の明瞭なものが多い。また、原体の回転方向は横位であるが、施文単位の一つ一つは弧状となるものが多く、口縁部

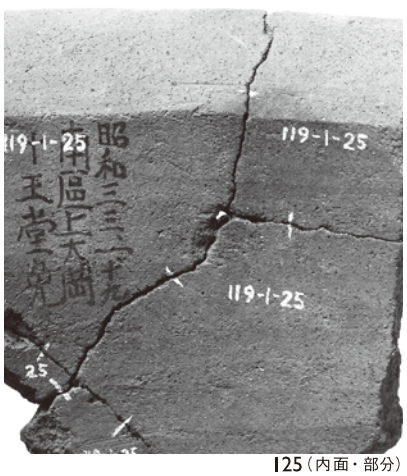



第 11 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（7）（当館蔵）



125（部分）



125（内面・部分）

141（部分）

第 12 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（8）（当館蔵）

から胴部上半においては弧は上を向くことが多い。これは施文する際、正位の土器に向き合い施文したことを示している可能性がある。撚糸文は屈曲部の端から施文されるものが多いが、屈曲部の調整痕を観察すると、調整により盛り上がった粘土が撚糸文を押し潰している箇所が確認できることから（87の写真参照）、撚糸文を施文した後に屈曲部の調整を行なっていることが分かる。屈曲部以下の器面についても同様で、撚糸文が一部磨り消し状になったり、節の縁が潰れている箇所が散見できる。また撚糸文が施文されていない箇所も平滑に撫でられることが多い。これらのことから、撚糸文を施文した後に器面全体が弱く撫でられていると考えられる。この平滑な撫で調整の技法は大浦山式にみられる特徴の一つで（87、99、111などの写真参照）、これにより器面には独特の平滑なツヤが認められることが多い[7]。調整の単位や方向は不明瞭である。またこの平滑面の厚さは非常に薄く、使用や埋没により容易に剥離してしまうようである。このような調整痕が残る技法については実験的な方法も含め今後の検討が必要であるが、器面を撫でる際に僅かに水分を含ませた状態で行なっていることなどが想像される。

99は撚糸文に加え、横位に連続する節状の点列が屈曲部下方に施文される。撚糸原体を回転させずに押捺した絡条体圧痕であろう。撚糸文の後に施文されている。96の屈曲部に見られる点列も絡状体圧痕の可能性がある。絡条体圧痕をもつ土器片は大浦山遺跡でも出土している（岡本一九六〇）。器面には白色の付着物が目立つ。104は撚糸文が横位、斜位に施文される。残存部が少なく全体の構成は不明だが、鋸歯状の施文となる可能性もある。撚糸文の鋸歯状施文は大浦山式にはみられない要素で、近隣では花輪台式の一部に横位、縦位、斜位を組み合わせた施文が確認できる（千葉県南外輪戸遺跡例など、中西・中野一九八五）。本資料は器形や胎土等の特徴から大浦山式土器と考えておくが、文様施文の技法は関東地方東部の要素の影響を受けている可能性も指摘しておきたい。109にも屈曲部下に縦位の撚糸施文がわずかに認められるが、施文は弱く疎らであり、偶発的な痕跡の可能性もある。141は一段の縄文RとLを一組として押捺施文されるもので、同様の手法による施文は胴部破片（250、251）にも確認できる。類例は横浜市山田大塚遺跡（横浜市埋蔵文化財センター編一九九〇）や藤沢市片瀬山遺跡（宮畑北遺跡発掘調査団編一九九四）に存在し、石井寛氏は「大浦山Ⅰ式土器ａ類」に至る前段階で横位が主体となる施文方向などから過渡期的様相を示すものと捉えている（石井一九九一）。戸田哲也氏はこれを「花輪台Ⅰ式と共通する文様手法」とした上で、石井氏と同様に「横位多段施文の一段の縄という点においては大浦山Ⅰ式の横走撚糸文の初源的文様と憶測することも可能」だと指摘している（戸田一九九五）。

なお、屈曲する口縁部をもつものの中には、胴部が無文となるものも一定数存在するが（110、120～123など）、器形や屈曲部の作出、胎土等の類似性から大浦山式の一部分として扱っておく。ただその中で110は器壁がやや厚く、胎土も白色味を帯びている。器面には凹凸が顕著で他の土器群とはやや異なる様相を示している。

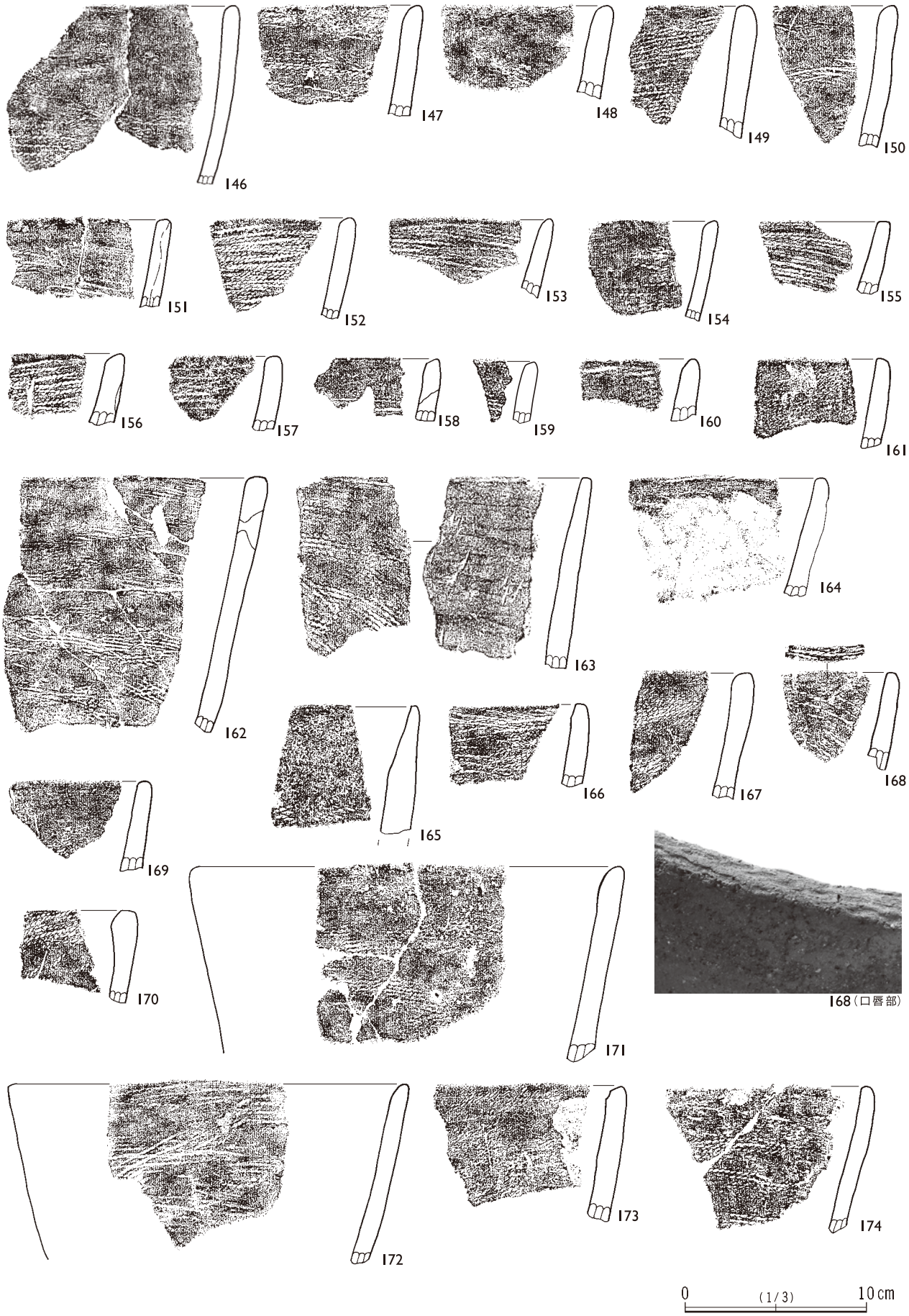
内面調整についても、全面が平滑に撫でられるものが多いが、擦痕が観察されるものもある。88は刷毛状の擦痕が横位に、99ではやや粗い擦痕が胴部上半では横位に、中位では斜位に認められる（写真参照）。98、105、107などの胎土はやや「軽鬆」である。また、補修孔をもつ破片が多く存在するが、これについては後述する。

**ｂ．口縁部が直立するもの―大浦山式ｂ類―**

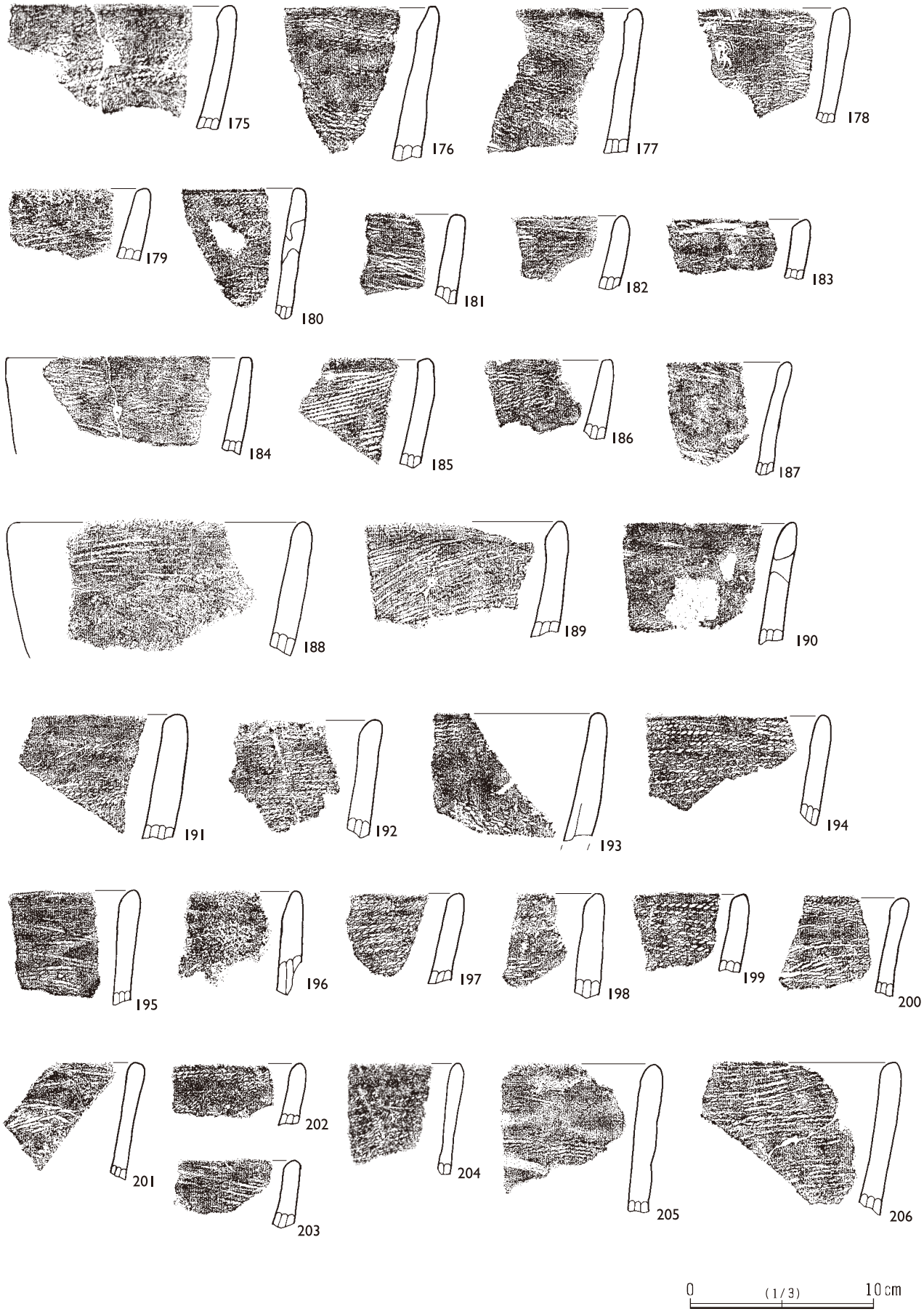
146～222は口縁部が直立するもので「大浦山式ｂ類」と呼称される一群

## 第３表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表（大浦山式ａ類）

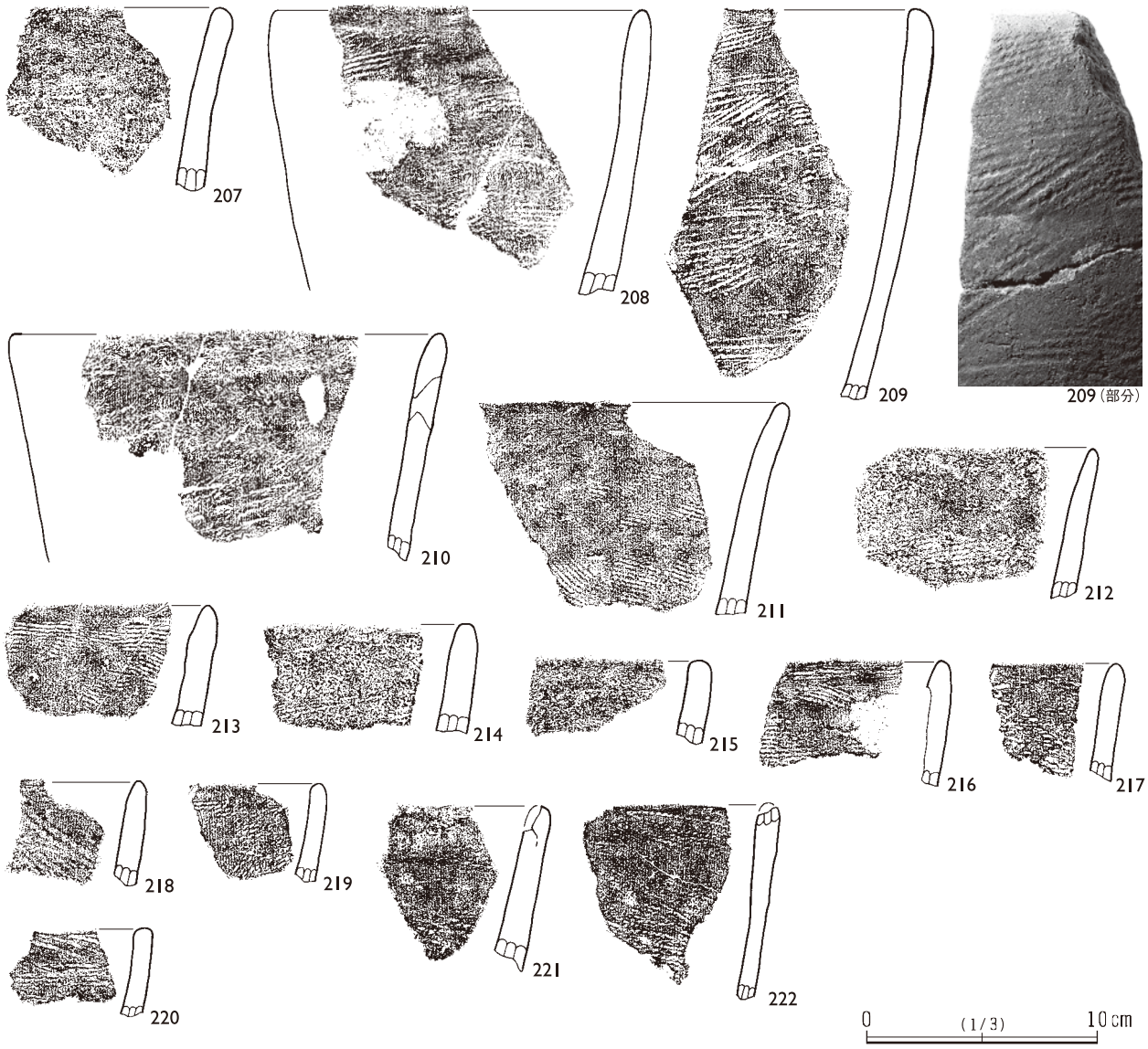
| 番号 | 注記番号 | 重量（g） | 施文具 | 器面調整（外面） | | 器面調整（内面） | | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口縁～屈曲部 | 屈曲部以下 | 口縁～屈曲部 | 屈曲部以下 | |
| 87 | 119-1-002 | 524 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横・斜） | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 88 | 119-1-005 | 120 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 不明 | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 89 | 119-1-021 | 107 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 90 | 119-1-032 | 98 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 平滑なナデ | |
| 91 | 119-1-016 | 62 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ナデ | |
| 92 | 119-1-026 | 25 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 不明 | 不明 | |
| 93 | 119-3-060 | 27 | — | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 擦痕（横） | |
| 94 | 119-1-019 | 123 | 撚糸R | 擦痕（横?） | 平滑なナデ? | 擦痕（横） | 擦痕（横）？・調整具痕跡？ | 屈曲部にも一部撚糸文施文される。 |
| 95 | 119-1-042 | 86 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 全体に摩滅 |
| 96 | 119-1-044 | 41 | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 屈曲部直下に絡状体圧痕あり。 |
| 97 | 119-1-027 | 36 | 撚糸R？ | 擦痕（横） | 不明 | 不明 | 不明 | |
| 98 | 119-3-224 | 34 | — | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 全体に摩滅 |
| 99 | 119-1-001 | 896 | 撚糸R | 擦痕（横） | ナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横・斜・胴部下半は縦） | 数か所に絡状体圧痕あり。 |
| 100 | 119-1-009 | 126 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 不明 | |
| 101 | 119-1-013 | 108 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | やや平滑なナデ | やや平滑なナデ・調整具痕跡？ | 撚糸文は一部擦り消える。 |
| 102 | 119-1-014 | 371 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 全体に器面荒れ。 |
| 103 | 119-1-028 | 305 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ナデ | 全体に器面荒れ。撚糸斜位施文? |
| 104 | 119-1-033 | 211 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 粗い擦痕（横・斜） | 鋸歯状の撚糸文?→横位の撚糸文 |
| 105 | 119-1-003 | 147 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ケズリ→ナデ | |
| 106 | 119-1-020 | 131 | 撚糸R | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | |
| 107 | 119-1-040 | 93 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ケズリ→ナデ | 器面の一部剥落。 |
| 108 | 119-3-085 | 25 | — | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 粗い擦痕（横） | 全体に摩滅 |
| 109 | 119-1-041 | 197 | 撚糸R | 擦痕（横） | 擦痕（横・斜） | 擦痕（横） | 擦痕（横・斜） | 屈曲部下にわずかに縦回転の撚糸文あり。<br>破片下方端には沈線の端部?あり。<br>胎土、色調が他の土器とやや異なっており<br>全体に堅緻な印象。 |
| 110 | 119-1-012 | 181 | — | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | ケズリ状擦痕（横・斜） | 大浦山式a類の断面形態?。器面厚く凹凸顕著。 |
| 111 | 119-1-015 | 105 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 不明 | 不明 | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 112 | 119-1-034 | 82 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ナデ | 屈曲部凹線上には原体圧痕が見える。 |
| 113 | 119-1-010 | 53 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 施文はごく浅い。 |
| 114 | 119-3-082 | 37 | — | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ナデ | |
| 115 | 119-1-031 | 31 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横） | |
| 116 | 119-1-007 | 35 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 擦痕（横） | |
| 117 | 119-1-038 | 121 | 撚糸R？ | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 粗い擦痕（横・斜） | |
| 118 | 119-1-035 | 118 | 撚糸R？ | 擦痕（横） | ナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 施文はごく浅い。 |
| 119 | 119-1-030 | 113 | 撚糸R？ | 擦痕（横） | 不明 | 不明 | 不明 | 全体に摩滅。 |
| 120 | 119-1-022 | 111 | — | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | |
| 121 | 119-1-043 | 105 | — | 擦痕（横） | ケズリ→ナデ | 擦痕（横） | ケズリ→ナデ？ | |
| 122 | 119-1-045 | 57 | — | 擦痕（横） | 不明 | 不明 | 不明 | 一部に撚糸文のようにも見えるが、不明瞭。 |
| 123 | 119-1-024 | 28 | — | 不明 | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 全体に摩滅。 |
| 124 | 119-1-047 | 45 | — | | | | | |
| 125 | 119-1-025 | 354 | 撚糸R | 擦痕（横・斜） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | ナデ（横） | 内面のナデ単位明瞭。撚糸文は一部擦り消える。 |
| 126 | 119-1-006 | 136 | — | 擦痕（横） | 不明 | 不明 | 不明 | 一部に撚糸文のような痕跡見えるが、不明瞭。 |
| 127 | 119-1-023 | 60 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | ナデ・調整具痕跡？ | |
| 128 | 119-1-008 | 40 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | ナデ（横） | |
| 129 | 119-3-073 | 34 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | ナデ | |
| 130 | 119-1-037 | 41 | 撚糸R | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | ナデ | 内面のナデ単位明瞭。 |
| 131 | 119-1-011 | 109 | 撚糸R？ | 擦痕（横） | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 施文はごく浅い。 |
| 132 | 119-1-029 | 51 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | |
| 133 | 119-1-046 | 36 | — | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | |
| 134 | 119-1-036 | 31 | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | |
| 135 | 119-1-039 | 86 | — | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | ケズリ→ナデ? | |
| 136 | 119-3-063 | 86 | — | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 一部に撚糸文のような痕跡見えるが、不明瞭。 |
| 137 | 119-1-018 | 83 | 撚糸R | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 擦痕（横・斜） | |
| 138 | 119-3-091 | 51 | — | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 不明 | |
| 139 | 119-3-310 | 42 | — | ケズリ状擦痕（斜） | ケズリ状擦痕（斜） | 擦痕（斜） | 擦痕（斜） | |
| 140 | 119-1-004 | 39 | — | 擦痕（横） | 擦痕（横） | 擦痕（横） | ケズリ状擦痕（横・斜） | 大浦山式a類の断面形態?。器面は凹凸あり。 |
| 141 | 119-1-017 | 77 | 撚糸R・撚糸L | 擦痕（横） | 不明 | 擦痕（横） | 不明 | 横位の組紐状絡状体圧痕。 |
| 142 | 119-1-084 | 59 | 撚糸R？ | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 全体に摩滅。 |
| 143 | — | 19 | — | 擦痕（横） | — | 不明 | 不明 | 全体に摩滅。 |
| 144 | 119-3-365 | 15 | 不明 | 擦痕（横） | — | 擦痕（横） | — | |
| 145 | 119-3-077 | 25 | — | 擦痕（横） | — | 擦痕（横） | — | |




第 13 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（9）（当館蔵）




第 14 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（10）（当館蔵）

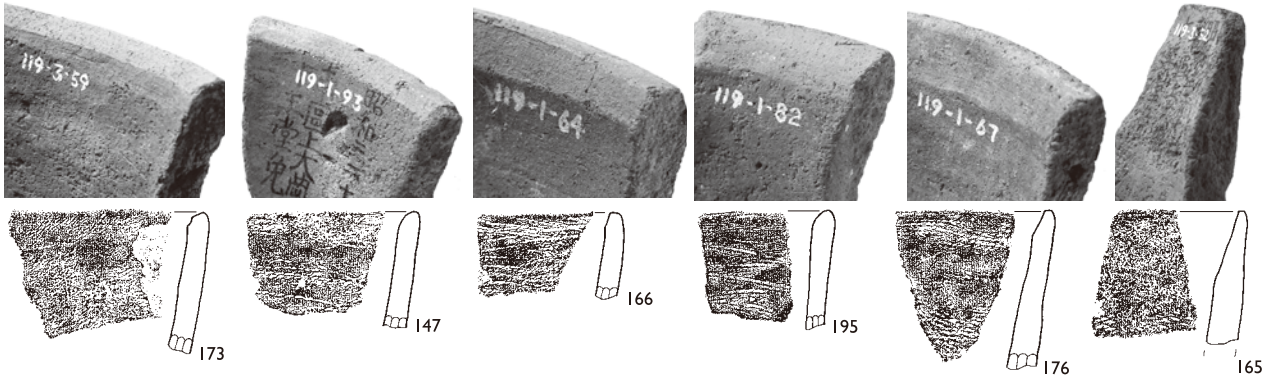



第15図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（11）（当館蔵）

である。口縁部形態以外の特徴―撚糸文やその施文範囲、胎土、焼成、色調、混和材、内外面の器面調整、補修孔など―は概ねａ類と共通する。撚糸文は口唇直下から施文されるものが多いが、口唇部下の一cm弱を無文とするものもある（176、177など）。193は口唇部直下では横位の施文、二cm程の無文部を挟み下方は斜位施文となる。

口縁は緩く内湾あるいは直立するものが多く、外反するものは少ない。口唇部断面は、僅かに内削ぎ傾向の丸棒状となるものが多いが、面取りされ角頭状になるものも少数存在し（155、184など）、168では面取りされた口唇部にも横位の撚糸文が施文されている。原田氏も同様の傾向を指摘しており、「ほぼ円頭状のもの」「やや内削ぎ状で、断面がやや尖頭状を呈するもの」「口唇部上端に、狭小な平坦面が作られるもの」の三形態に分類している。また、口縁部内面に稜が作出されるものも散見される（第16図）。稜は角頭状口唇の内側の縁が下方へ移行することで生じたと考えられるかも知れない。ａ類にみられた内面に稜をもつ一群との関連も示唆される。内面調整についても基本的にはａ類と同様だが、163の内面には調整具の痕跡が残る（後述）。205、213の器面は調整のためか凹凸が目立つ。

なお、ｂ類には横位の撚糸文以外の施文―ａ類




第16図　大浦山式土器b類のうち口縁部内面に稜がみられる土器群

にみられたような横位と斜位の組合せ、絡条体圧痕、原体横位押捺など―は認められなかったが、このこととa・b類の違いに関係があるのかは即断できない。

「軽鬆」な胎土をもつものはa類に比べ少なく、207、210、219に認められる。

**c．胴部および底部**

223～251は胴部、252～276は底部の破片である。土器片の諸特徴はa、b類と基本的に同様で、いずれに属するかは判別できない。撚糸文の施文方向は胴部下半から底部へ近づくにつれ横位から斜位となり、ほとんど縦位になるものも存在する（243、252など）。また施文単位の一つ一つが口縁部付近では上を向く弧状となるものが多いと指摘したが、胴下半から底部では下を向く弧状になることが多く、施文の際の身体動作を考える上で注意される。

施文には撚糸文のほか、絡条体圧痕（245～247、272）、横位押捺施文（250、251）に加え、縦位の条線のあるもの（248、249、273、274）がある。絡条体圧痕は、これまでに知られていた例では破片が小さかったこともあり、文様要素としてではなく偶発的な原体接触の結果として捉えられてきた（岡本一九六〇、原田一九八九）。しかし、本遺跡例では複数の条が平行して押捺されており、条の長さも揃っている。これらは偶発で生じたとは思われず、一つの文様要素として認めてもよいだろう。花輪台式や、いわゆる「金堀式」（篠原一九七七）との関係も無視できない。250はRとLの原体を組み合わせて押捺施文されるが、251では二条のRを組み合せている。縦位の条線をもつものは大浦山遺跡にも類例があるが、岡本氏は「文様として意識的に施されたものではないだろう」としている（岡本一九六〇）。原田昌幸氏もこれらの土器に着目し、周辺他型式に手法上の類似するものを挙げるが「大浦山式土器で、モチーフが明確な沈線文併用個体の報告はない」とし、積極的な解釈は控えている（原田一九八九）。大浦山遺跡例では条線は平行する二本からなっており、岡本氏は撚糸原体の一端が偶然に器面に接触したことにより生じた痕跡と考えているが、本遺跡例では条線は四本程度で、やや様相は異なる。

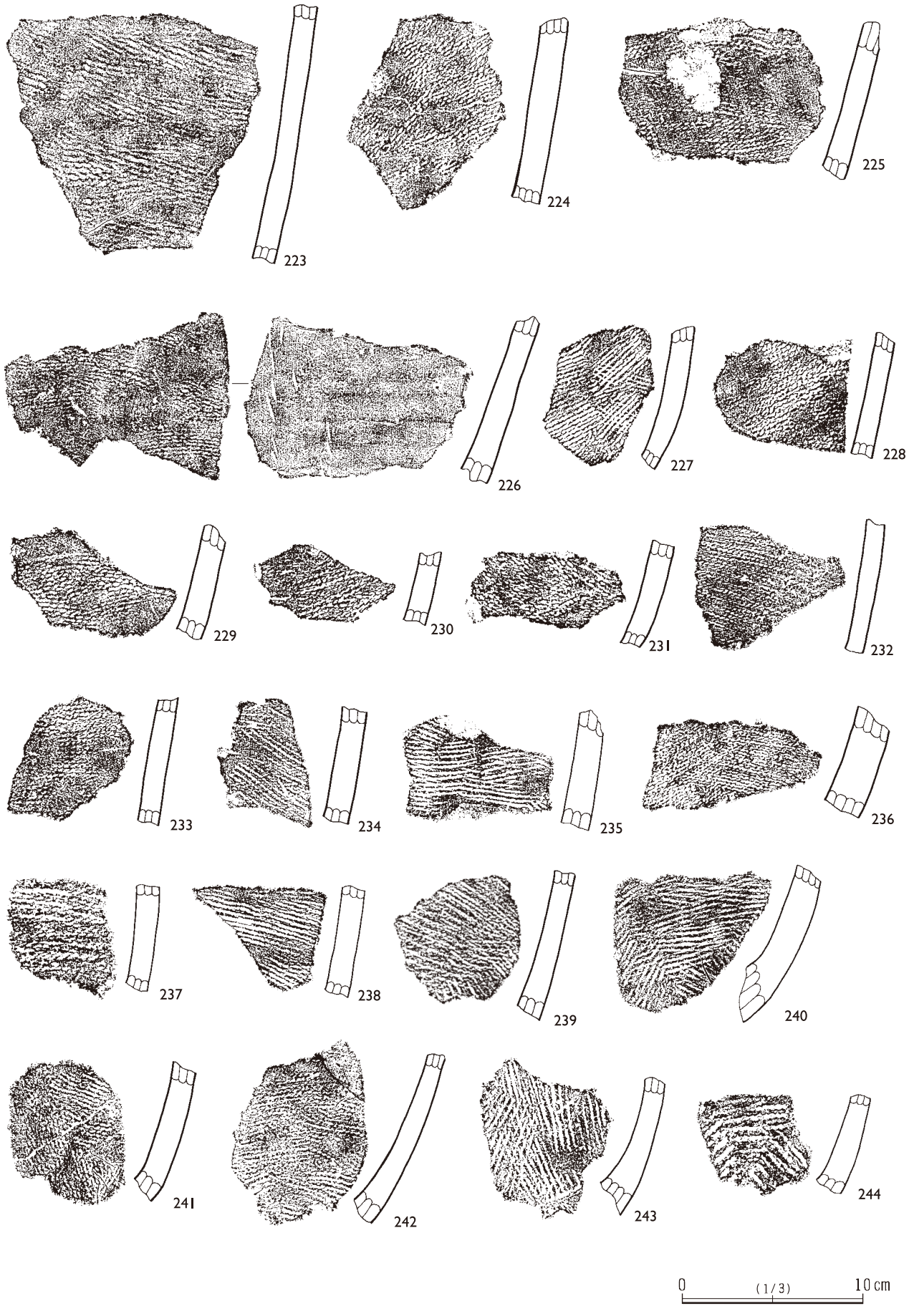
底部はやや尖り気味の丸底となるものが多い。先端部の内面は胴部器壁の倍近くの厚さに肥厚するものが多く、大浦山式の特徴の一つといえる。一方で259や268のようにあまり肥厚しないものもある。土器の大きさにも関連しよう。

撚糸の施文は、底部に近づくほど施文単位が小さくなり、先端部を取り巻くように施文することで、先端は菱形状や多角形状の施文になる（253、254、257など）。

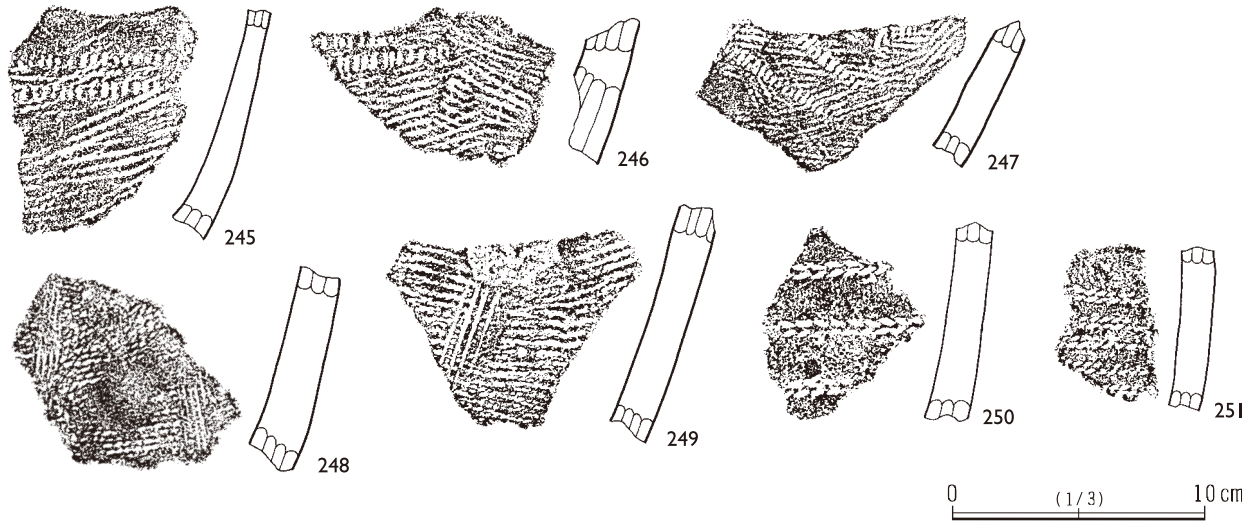
275、276は施文の方向や胎土等で他の土器群とは様相が異なっている。275は撚糸文が底部先端まで縦位に施されており、大浦山式以前の所産とも

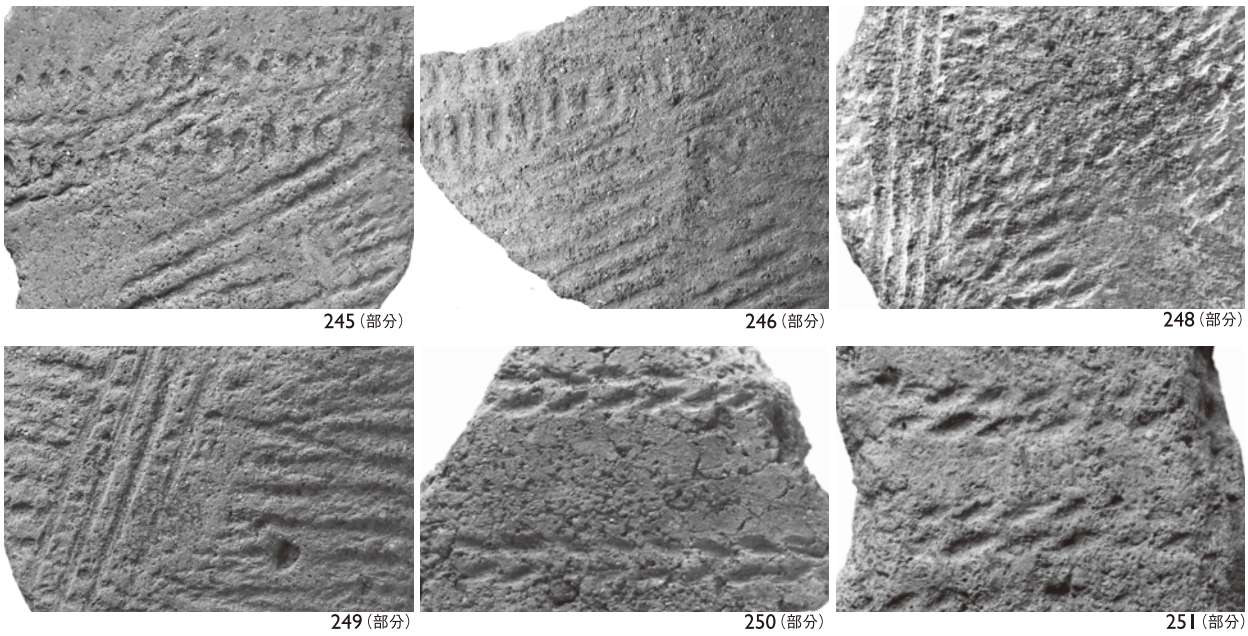
## 第４表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表（大浦山式ｂ類）

| 番号 | 注記番号 | 重量(g) | 施文具 | 口唇部断面形態 | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 146 | 119-1-090 | 123 | 撚糸R | 面取り・内傾 | ケズリ→ナデ | ケズリ?→ナデ | 口縁部下6cmほどは無文となる。 |
| 147 | 119-1-093 | 64 | 撚糸R | 面取り・内傾・段あり | ナデ（横） | ナデ（横） | |
| 148 | 119-1-069 | 65 | 撚糸R? | 面取り・内傾・段あり | ナデ | ナデ | 口縁から15mmほど下方は水平に弱く凹む |
| 149 | 119-1-083 | 53 | 撚糸R | 面取り・内傾 | ナデ（横） | ナデ（横） | |
| 150 | 119-1-049 | 54 | 撚糸R | 面取り・内傾 | 平滑なナデ（横） | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | |
| 151 | 119-1-102 | 52 | 撚糸R | 面取り・内傾 | 不明 | ナデ（横） | |
| 152 | 119-1-063 | 41 | 撚糸R | 面取り・内傾 | 不明 | ナデ（横） | |
| 153 | 119-3-055 | 36 | 撚糸R | 面取り・内傾 | 不明 | 不明 | |
| 154 | 119-3-093 | 34 | 撚糸R | 面取り・内傾 | 平滑なナデ（縦？） | 不明 | |
| 155 | 119-3-051 | 30 | 撚糸R | 面取り・内傾 | 平滑なナデ | 不明 | |
| 156 | 119-3-057 | 29 | 撚糸R | 面取り・内傾 | ナデ（横） | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | |
| 157 | 119-3-079 | 24 | 撚糸R? | 面取り・内傾 | 不明 | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | |
| 158 | 119-3-095 | 21 | 撚糸R | 面取り・内傾・弱く段あり | 平滑なナデ（縦） | 擦痕（横） | |
| 159 | — | 8 | 撚糸R | 面取り・内傾・弱く段あり | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 160 | 119-3-088 | 25 | 撚糸R? | 内削ぎ | ナデ | ナデ | 全体に摩滅 |
| 161 | 119-3-384 | 35 | 撚糸R | 面取り・外傾 | 平滑なナデ | ナデ | 施文はごく弱い |
| 162 | 119-1-091 | 250 | 撚糸R | 面取り | 平滑なナデ | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | |
| 163 | 119-1-101 | 109 | 撚糸R | 面取り | ナデ | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡 | 内面の調整具アタリ明瞭 |
| 164 | 119-1-056 | 73 | 撚糸R | 面取り | 不明 | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | 外面の大部分は剥落 |
| 165 | 119-3-052 | 70 | 撚糸R | 面取り・幅広の段あり | ナデ | ナデ | |
| 166 | 119-1-064 | 41 | 撚糸R | 面取り・やや幅広の段あり | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 167 | 119-1-062 | 41 | 撚糸R | 面取り | ケズリ→ナデ（縦横） | ナデ（横） | |
| 168 | 119-3-086 | 32 | 撚糸R | 面取り | 不明 | ナデ（横） | 口唇にも撚糸施文 |
| 169 | 119-3-090 | 35 | 撚糸R? | 面取り | 平滑なナデ（横） | ナデ（横） | |
| 170 | 119-1-074 | 31 | 撚糸R | 面取り・肥厚・弱く段あり | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 171 | 119-1-070 | 230 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | ナデ（横） | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | 全体に摩滅。内面調整の横方向の単位明瞭 |
| 172 | 119-1-050 | 130 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | 平滑なナデ | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | 撚糸の施文方向は、水平→斜位となる |
| 173 | 119-3-059 | 100 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾・弱く段あり | ケズリ→ナデ | ケズリ→ナデ | |
| 174 | 119-1-052 | 97 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | ケズリ→ナデ | ケズリ→ナデ | |
| 175 | 119-1-061 | 96 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾・弱く段あり | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 176 | 119-1-067 | 81 | 撚糸R | わずかに面取り・やや幅広の段あり | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 177 | 119-1-086 | 70 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | 平滑なナデ | ナデ | |
| 178 | 119-1-080 | 54 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | 平滑なナデ | 擦痕（横）・調整具アタリ痕跡? | |
| 179 | 119-3-072 | 39 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | 不明 | ナデ（横） | |
| 180 | 119-1-058 | 40 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | 平滑なナデ | ナデ（横） | 補修孔（やりかけ）を切って、別の補修孔あり |
| 181 | 119-3-075 | 27 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 182 | 119-3-071 | 27 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾 | ナデ（横） | ナデ（横） | 施文は弱い |
| 183 | 119-3-089 | 29 | 撚糸R | わずかに面取り・内傾・弱く段あり | ケズリ→ナデ | ナデ（横） | |
| 184 | 119-1-078 | 65 | 撚糸R | わずかに面取り | ナデ | 不明 | |
| 185 | 119-3-092 | 40 | 撚糸R | わずかに面取り | ナデ | 不明 | 全体に摩滅 |
| 186 | 119-3-065 | 31 | 撚糸R? | わずかに面取り | ナデ（縦？） | 擦痕（横） | |
| 187 | 119-3-083 | 31 | 撚糸R? | わずかに面取り | 平滑なナデ | ナデ | |
| 188 | 119-1-072 | 124 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | ナデ | 全体に摩滅 |
| 189 | 119-1-094 | 84 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | ナデ | |
| 190 | 119-1-048 | 75 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 191 | 119-1-089 | 74 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 擦痕（横） | ナデ（横） | |
| 192 | 119-1-051 | 59 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 不明 | 擦痕（横） | |
| 193 | 119-1-085 | 57 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | 擦痕（横） | 口縁直下は水平、下方は斜位の撚糸施文 |
| 194 | 119-1-066 | 54 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | 平滑なナデ | |
| 195 | 119-1-082 | 48 | 撚糸R | 丸棒状・内傾・やや幅広の弱い段あり | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 196 | 119-3-056 | 44 | 撚糸R? | 丸棒状・内傾 | 不明 | ナデ（横） | 全体に摩滅 |
| 197 | 119-1-055 | 30 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 不明 | ナデ（横） | |
| 198 | 119-3-066 | 32 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | 擦痕（横） | |
| 199 | 119-3-058 | 33 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 200 | 119-3-062 | 31 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 平滑なナデ | ナデ（横） | |
| 201 | 119-3-081 | 27 | 撚糸R? | 丸棒状・内傾 | ナデ | ナデ（横） | |
| 202 | 119-3-096 | 28 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | ナデ（横） | 擦痕（横） | |
| 203 | 119-3-084 | 23 | 撚糸R | 丸棒状・内傾・弱く段あり | 擦痕（横） | ナデ | 施文は弱い |
| 204 | 119-3-078 | 25 | 撚糸R | 丸棒状・内傾 | 不明 | 擦痕（横） | |
| 205 | 119-1-087 | 73 | 撚糸R | 丸棒状・段あり | ナデ | ナデ（横）・調整具アタリ痕跡? | 器面調整のためか、外面は弱く凹凸がある |
| 206 | 119-1-075 | 92 | 撚糸R | 丸棒状・弱く段あり | 平滑なナデ（横） | ナデ（横） | 口唇直下から施文 |
| 207 | 119-1-071 | 71 | 撚糸R? | 丸棒状・外傾 | 不明 | 不明 | 全体に摩滅 |
| 208 | 119-1-053 | 153 | 撚糸R | 丸棒状 | ナデ（横） | ナデ（横） | |
| 209 | 119-1-060 | 151 | 撚糸R | 丸棒状 | 平滑なナデ | ナデ（横） | 撚糸の施文方向は、水平→斜位となる |
| 210 | 119-1-088 | 146 | 撚糸R | 丸棒状 | ナデ | ナデ | |
| 211 | 119-1-073 | 137 | 不明瞭 | 丸棒状 | | | 施文は浅く、一単位は小さい |
| 212 | 119-1-059 | 74 | 撚糸R | 丸棒状 | 不明 | 不明 | 全体に摩滅 |
| 213 | 119-1-079 | 64 | 撚糸R | 丸棒状 | ナデ | ナデ（横） | 器面調整のためか、外面は弱く凹凸がある |
| 214 | 119-3-291 | 59 | 撚糸R | 丸棒状 | 不明 | 不明 | |
| 215 | 119-3-061 | 32 | 撚糸R? | 丸棒状 | 不明 | 不明 | 全体に摩滅 |
| 216 | 119-3-053 | 29 | 撚糸R | 丸棒状 | ナデ（横） | ナデ（横） | 内面の大部分は剥落 |
| 217 | 119-3-074 | 25 | 撚糸R? | 丸棒状 | 平滑なナデ | ケズリ?→ナデ（ナデ） | |
| 218 | 119-3-372 | 22 | 撚糸R? | 丸棒状 | ナデ | 不明 | 全体に摩滅 |
| 219 | — | 18 | 撚糸R | 丸棒状 | ナデ（縦？） | 擦痕（横） | |
| 220 | 119-3-068 | 19 | 撚糸R? | 丸棒状 | 不明 | ナデ（横） | 口唇は磨かれる |
| 221 | 119-3-070 | 49 | 撚糸R | 不明 | 平滑なナデ | ナデ | |
| 222 | 119-1-065 | 51 | 撚糸R | 不明 | 平滑なナデ | ナデ（横） | |




第 17 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（12）（当館蔵）




第 18 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（13）（当館蔵）

考えられるが、底部付近の顕著な肥厚は夏島式や稲荷台式とするには躊躇される。破片左上部には斜位の撚糸文もわずかに確認できることから大浦山式の範疇で捉えておきたい。276も縦位施文だが、いずれの条も先端を中心に放射状となっており一条ずつの押捺施文であることが分かる。にわかに大浦山式とはし難いが、275と同様に底部の顕著な肥厚は大浦山式以前とも考えづらい。ただ、275、276ともに胎土が緻密で焼成も堅緻であり他の大浦山式土器とは異なっている。

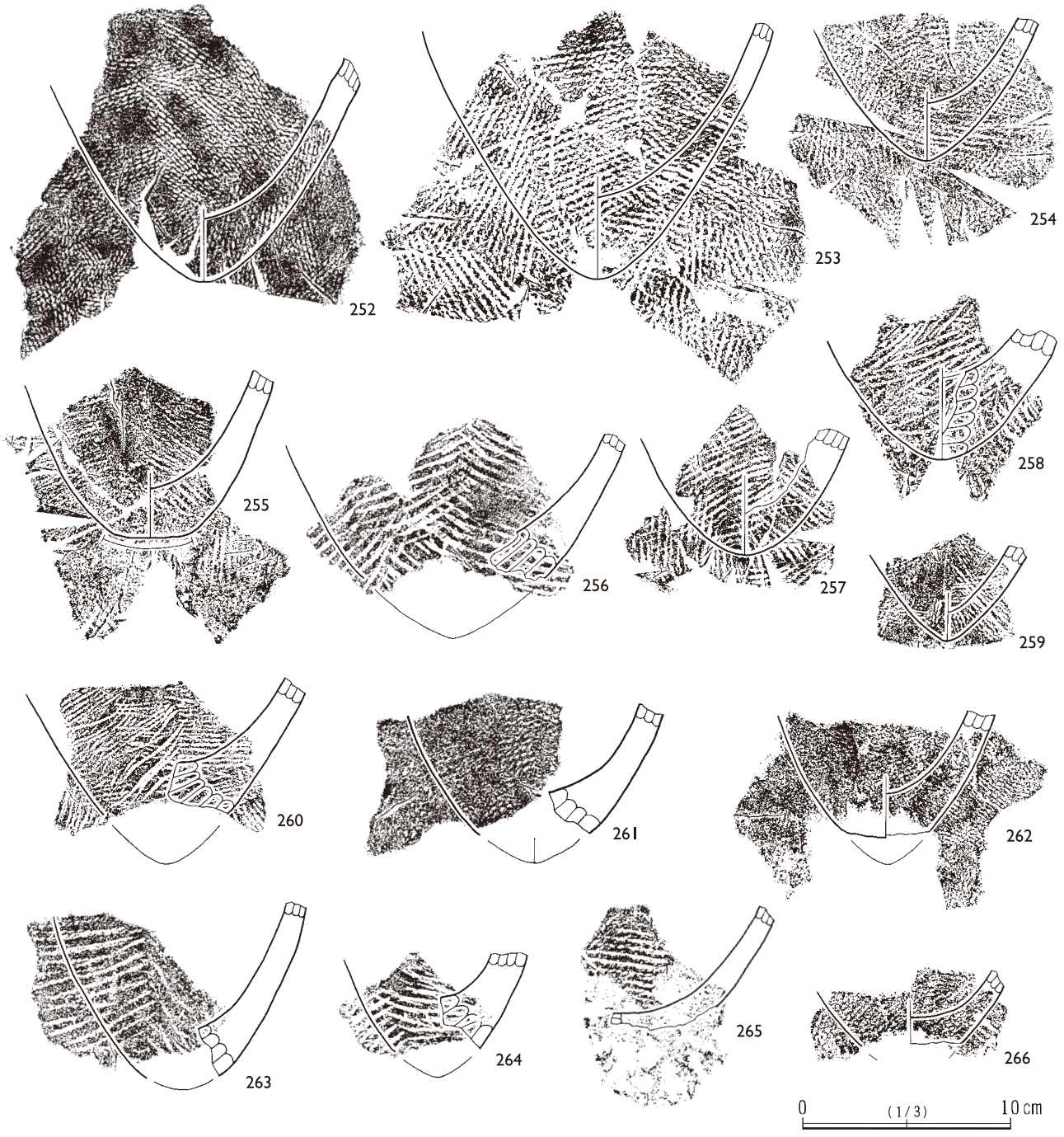
底部に明瞭な使用痕を残すものは少なく、107、258、268などの先端が磨り減っている以外は胴部や口縁部の表面との遺存状態の違いはほとんど認められない。

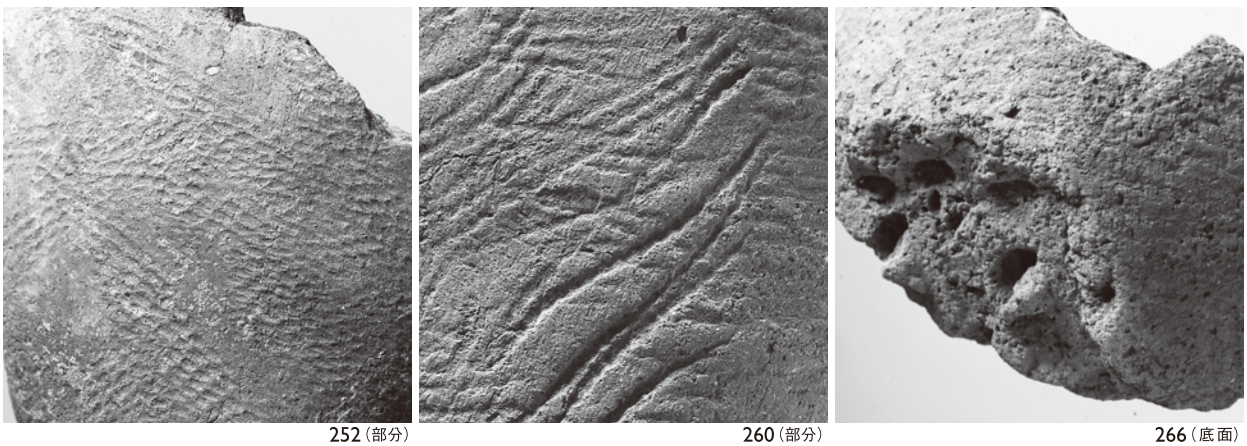
266は先端部が剥落しているが、その破断面には指頭状、爪状の刺突が認められる（写真参照）。土器製作時における底部先端の粘土接着の強化を図ったものであろう。同様の痕跡は264、265にも認められる。

「軽鬆」な胎土は、胴部破片では243、237、底部破片では266、269に認められる。

### （4）東山式（第21図、第6表）

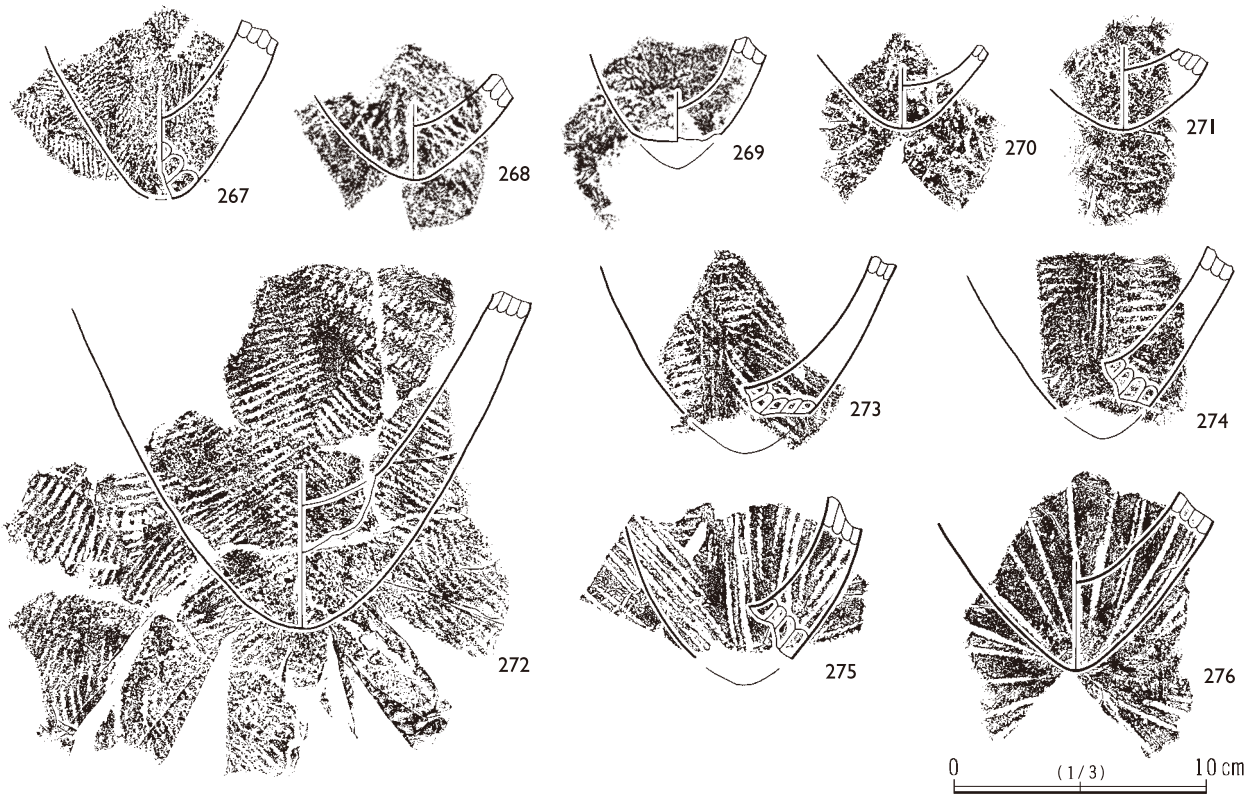
277～297は、口縁部直下に一条の沈線が巡り、それ以下は無文となる一群で、いわゆる東山式と呼



252（部分）　260（部分）　266（底面）

第 19 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（14）（当館蔵）



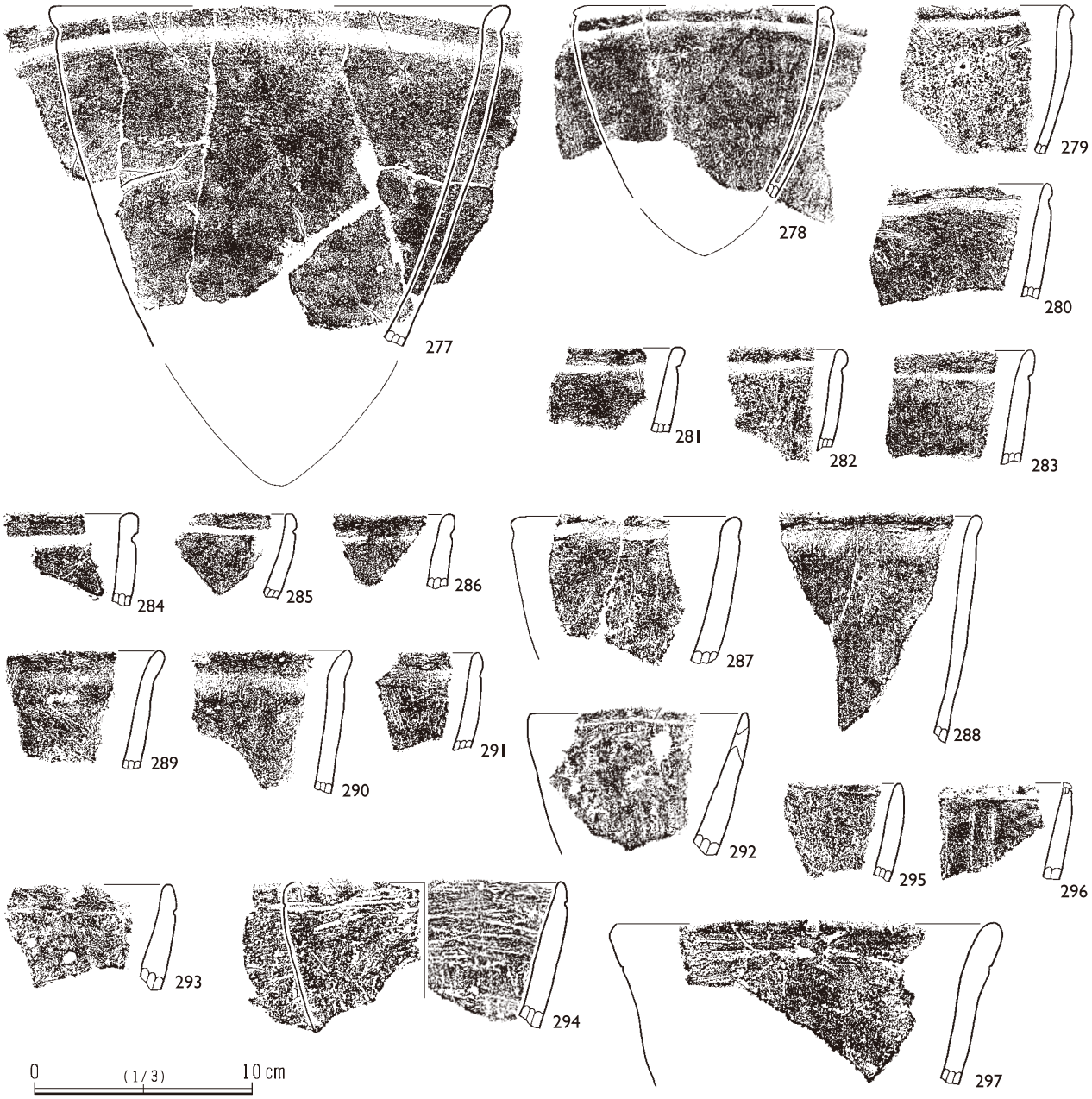
第 20 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（15）（当館蔵）

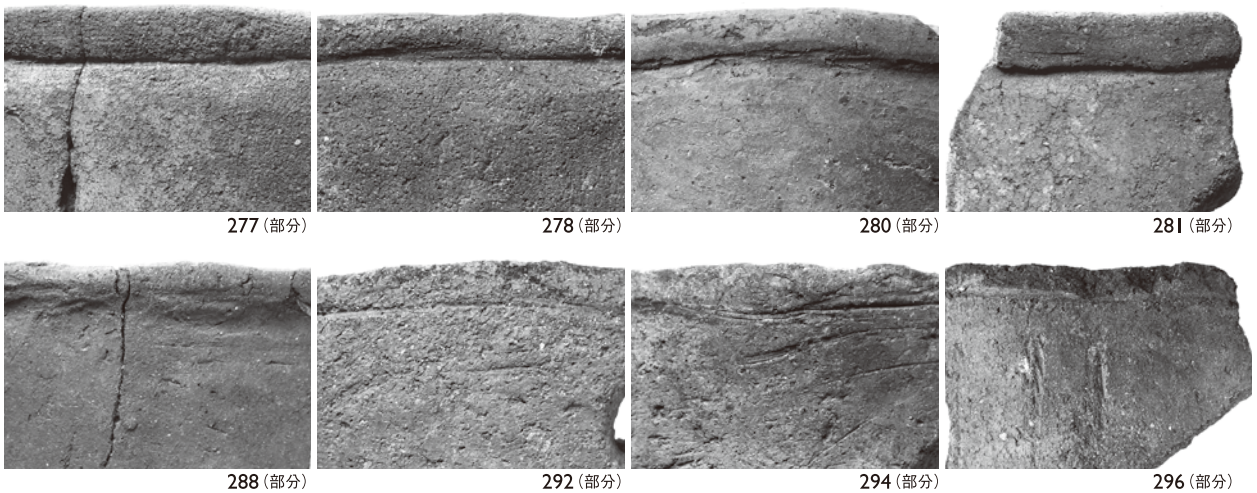
称されるものである（原田一九八六）。原田氏は主に沈線描出技法、口唇断面形状とその整形手法を「手抜きの方向性」から分類し東山式の変遷を整理している。それによると、沈線描出技法には、明瞭な単沈線によるもの、断面U字状で比較的太く明確な沈線によるもの、五～六㎝単位の細く浅い短沈線の連続となるものがあり、極めて漸位的な変化が認められる。また口唇部断面形状の概括的な変化として「上面が円頭状から僅かに平坦面として意識される段階」、「外側に肥厚した口唇部上面が、確実な平坦面として意識される段階」、「口唇上面に加え、口唇直下の外面をも平坦面化し、断面がより整った角頭状になる段階」と整理している。また、角頭状断面となる段階には「むしろ尖頭状を呈する資料も存在する」。

林氏資料の中にも、段状となるもの（277～279、281など）、沈線、凹線となるものがあり、口唇部から沈線までの幅にも差が認められる。口縁部は緩く内湾するものが多い。口唇部断面は丸棒状となるが、外削ぎ状に弱く尖るものも散見される（280、291、292、294など）。原田氏の指摘し

## 第５表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表（大浦山式　胴部・底部）

| 番号 | 注記番号 | 重量(g) | 施文具 | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 223 | 119-3-138 | 290 | 撚糸L? | ナデ | ナデ（横） | 施文は浅い。内面の調整単位明瞭。 |
| 224 | 119-3-141 | 166 | 撚糸R | ナデ | ナデ？ | 横位・縦位の撚糸施文。 |
| 225 | 119-3-142 | 149 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 226 | 119-3-137 | 222 | 撚糸R | ナデ | ナデ（横）・調整具痕跡明瞭 | 施文はごく浅い。内面の調整単位明瞭。 |
| 227 | 119-3-099 | 60 | 撚糸R | ナデ | 不明 | |
| 228 | 119-3-104 | 77 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 229 | 119-3-108 | 98 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | |
| 230 | 119-3-115 | 48 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | |
| 231 | 119-3-119 | 66 | 撚糸R | ナデ | ナデ（横） | |
| 232 | 119-3-128 | 66 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | |
| 233 | 119-3-129 | 64 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 撚糸は一部擦り消し状になる。 |
| 234 | 119-3-135 | 60 | 撚糸R | 擦痕（横） | 擦痕（横・縦） | |
| 235 | 119-3-149 | 92 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 横位（凹）の撚糸施文。 |
| 236 | 119-3-151 | 113 | 撚糸R | ナデ？ | ナデ | 横位・斜位の撚糸施文。 |
| 237 | — | 63 | 撚糸R | ナデ？ | ナデ | |
| 238 | — | 61 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | |
| 239 | 119-3-148 | 83 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | |
| 240 | 119-3-160 | 124 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 横位（凹）の撚糸施文。 |
| 241 | 119-3-166 | 95 | 撚糸R | 平滑なナデ | 不明瞭 | 横位・斜位の撚糸施文。 |
| 242 | 119-3-162 | 105 | 撚糸R | ナデ | ナデ | |
| 243 | 119-3-161 | 85 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 底部付近破片。 |
| 244 | — | 50 | 撚糸R | 平滑なナデ | 不明瞭 | 底部付近破片。 |
| 245 | 119-3-143 | 101 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 撚糸文→絡状体圧痕。 |
| 246 | 119-3-144 | 101 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 撚糸文→絡状体圧痕。 |
| 247 | 119-3-147 | 87 | 撚糸R | ナデ | ナデ・一部条痕状擦痕 | 撚糸文→斜位の絡状体圧痕。 |
| 248 | 119-3-159 | 131 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 横位の撚糸文→縦位の櫛歯状沈線。 |
| 249 | 119-3-164 | 131 | 撚糸R | ナデ | ナデ（横） | 横位（凹）の撚糸文→縦位の櫛歯状沈線。 |
| 250 | — | 67 | 撚糸R・撚糸L | ナデ | ナデ（横・斜） | 横位の組紐状絡状体圧痕。 |
| 251 | — | 39 | 撚糸R・撚糸L | ナデ | ナデ（横） | 横位の組紐状絡状体圧痕。 |
| 252 | 119-1-106 | 395 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 撚糸施文は横位、斜位で、底部先端まで及ぶ。<br>先端は特にすり減らない。 |
| 253 | 119-1-104 | 440 | 撚糸R | 不明 | ナデ | |
| 254 | 119-1-108 | 216 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 全体に摩滅。底部先端の撚糸施文は菱形状。 |
| 255 | 119-1-107 | 235 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 底部先端の撚糸施文は菱形状。底部先端すり減り。 |
| 256 | 119-3-154 | 184 | 撚糸R | ナデ | 不明 | 撚糸文は一部擦り消える。 |
| 257 | 119-1-109 | 119 | 撚糸R | 平滑なナデ | 不明 | 底部先端の撚糸施文は菱形状。先端は特にすり減らない。<br>内面は全体剥落。 |
| 258 | 119-1-116 | 143 | 撚糸R? | ナデ | 不明 | 底部先端の撚糸施文は菱形状。先端はややすり減る。 |
| 259 | 119-3-183 | 40 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 底部先端の撚糸施文は菱形状。先端は特にすり減らない。 |
| 260 | 119-3-156 | 164 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 撚糸は一部乱れる。 |
| 261 | 119-3-157 | 127 | 撚糸R | 不明 | 不明 | 全体に摩滅する。 |
| 262 | 119-3-167 | 201 | 撚糸R? | ナデ | ナデ | |
| 263 | — | 110 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 底部付近破片。横位（凹）の撚糸施文。 |
| 264 | — | 68 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 横位（凹）の撚糸施文。底部との破断面には指頭状・爪状の凹凸あり。<br>断面には粘土継ぎ足し痕が見える。 |
| 265 | 119-3-165 | 80 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 底部付近破片。器面の半分は剥落。<br>底部との破断面には指頭状・爪状の凹凸が多数あり。 |
| 266 | 119-3-158 | 67 | 撚糸R? | ナデ | ナデ | 底部との破断面には指頭状・爪状の凹凸が多数あり。 |
| 267 | 119-1-118 | 114 | 撚糸R | ナデ | 不明 | 横位・斜位・縦位の撚糸施文。撚糸は細い。 |
| 268 | 119-1-119 | 64 | 撚糸L | 平滑なナデ | ナデ | 撚糸施文は横位、斜位で、底部先端まで及ぶ。先端はややすり減る。 |
| 269 | — | 48 | 撚糸R? | ナデ？ | ナデ | 全体に摩滅 |
| 270 | 119-3-189 | 38 | 撚糸R | 不明 | 不明 | 縦位・斜位の撚糸施文。底部の肥厚の程度が弱い。 |
| 271 | — | 61 | 撚糸R | 不明 | ナデ | 全体に摩滅 |
| 272 | 119-1-105 | 667 | 撚糸R | 平滑なナデ | ナデ | 横位（凹）・斜位の撚糸施文。底部先端の撚糸施文は菱形状。<br>撚糸文→斜位の絡状体圧痕。先端はややすり減る。底部先端の内面は剥落。 |
| 273 | 119-3-163 | 64 | 撚糸R | ナデ | 不明 | 横位の撚糸文を切って、縦位の沈線が描かれる。 |
| 274 | — | 94 | 撚糸R | ナデ？ | ナデ | 底部付近破片。横位の撚糸文→縦位の沈線 |
| 275 | 119-3-168 | 123 | 撚糸R | ナデ | ナデ | 縦位の撚糸施文。施文は深い。破片上方には横位の撚糸施文も見える。 |
| 276 | 119-3-169 | 183 | 撚糸R | ナデ | 擦痕（放射状） | 縦位の撚糸施文。施文は深い。一条ごとの絡状体圧痕か。底部先端すり減り。 |




第 21 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（16）（当館蔵）

第６表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表（東山式）

| 番号 | 注記番号 | 重量(g) | 口縁下沈線 | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） |
|---|---|---|---|---|---|
| 277 | 119-1-095 | 404 | 段状 | ナデ | 擦痕（口縁部下2cm程は横・以下は縦） |
| 278 | 119-3-309 | 133 | 段状 | ケズリ状の擦痕（縦） | 不明 |
| 279 | 119-1-099 | 38 | 段状 | 擦痕（縦）→ナデ? | 擦痕（口縁部下2cm程は横・以下は縦・斜） |
| 280 | 119-1-098 | 40 | 段状 | 凹凸あり。 | 擦痕（横）。凹凸あり。 |
| 281 | 119-3-401 | 19 | 沈線 | 不明 | 不明。凹凸あり。 |
| 282 | 119-3-306 | 19 | 段状 | ケズリ→ナデ | ケズリ状の擦痕（横） |
| 283 | 119-3-308 | 31 | 描き足し状の沈線 | 不明 | 不明 |
| 284 | 119-3-400 | 17 | 段状 | ケズリ状の擦痕（縦） | 粗い擦痕（横） |
| 285 | 119-3-305 | 12 | 沈線 | ナデ | ナデ |
| 286 | 119-3-304 | 12 | 描き足し状の沈線 | ナデ | 不明瞭 |
| 287 | 119-1-097 | 54 | 凹線 | 擦痕（横・斜） | 擦痕（横・斜） |
| 288 | 119-1-096 | 53 | 描き足し状の凹線 | ナデ | ナデ |
| 289 | 119-3-303 | 26 | 描き足し状の沈線 | ナデ | ナデ |
| 290 | 119-1-100 | 35 | 描き足し状の凹線 | ナデ | 不明瞭 |
| 291 | 119-3-307 | 15 | 描き足し状の沈線 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 292 | 119-3-214 | 54 | 細沈線 | ナデ | ナデ |
| 293 | 119-3-367 | 31 | 細沈線 | ケズリ→ナデ | ケズリ状の擦痕（横） |
| 294 | 119-3-227 | 78 | 描き足し状の沈線 | 不明 | 不明 |
| 295 | 119-3-373 | 18 | 細沈線 | ナデ | 不明瞭 |
| 296 | 119-3-049 | 20 | 沈線 | ケズリ→ナデ | 不明瞭 |
| 297 | 119-3-312 | 100 | 描き足し状の段? | ミガキ | ナデ |

たような、平坦面が意識される明確な角頭状となるものは見られない。器形が復元できるものは少ないが、概ね砲弾形になるものと考えられる。器壁は大浦山式と比べ薄く、やや灰色がかった褐色を呈するものが多い。

287～290の沈線は凹線状となる。290の内面には緩い稜が作出されており、本資料が大浦山式a類である可能性も示している。ただ、277の口唇部も端部が外反することで内面に弱く稜が作出されており、290も同様のものと考えておきたい。292～297の沈線は細く鋭い。292や295は口唇部から沈線までの幅が極めて狭くなる。296は口縁部に細い沈線が巡り、その下方には縦位に撚糸文が施文される。条の間隔は広く回転施文か押捺によるものかは判然としない。東山式は通常胴部が無文となるため、厳密には本資料は含まれないと考えるが、近接型式にも類例がないため、とりあえず東山式に類似するものとして把握しておきたい。無文口縁部を沈線で区画し、それ以下が縦位の撚糸文となる点は稲荷原式の要素とも考えられるが、稲荷原式の口縁は肥厚し無文部も広い。さらに撚糸文の節は本資料に比し圧倒的に太い。これらのことを踏まえると本資料を稲荷原式とするのは難しい。297は口縁部がやや肥厚し外反する。他の東山式とはやや様相を異にしている。

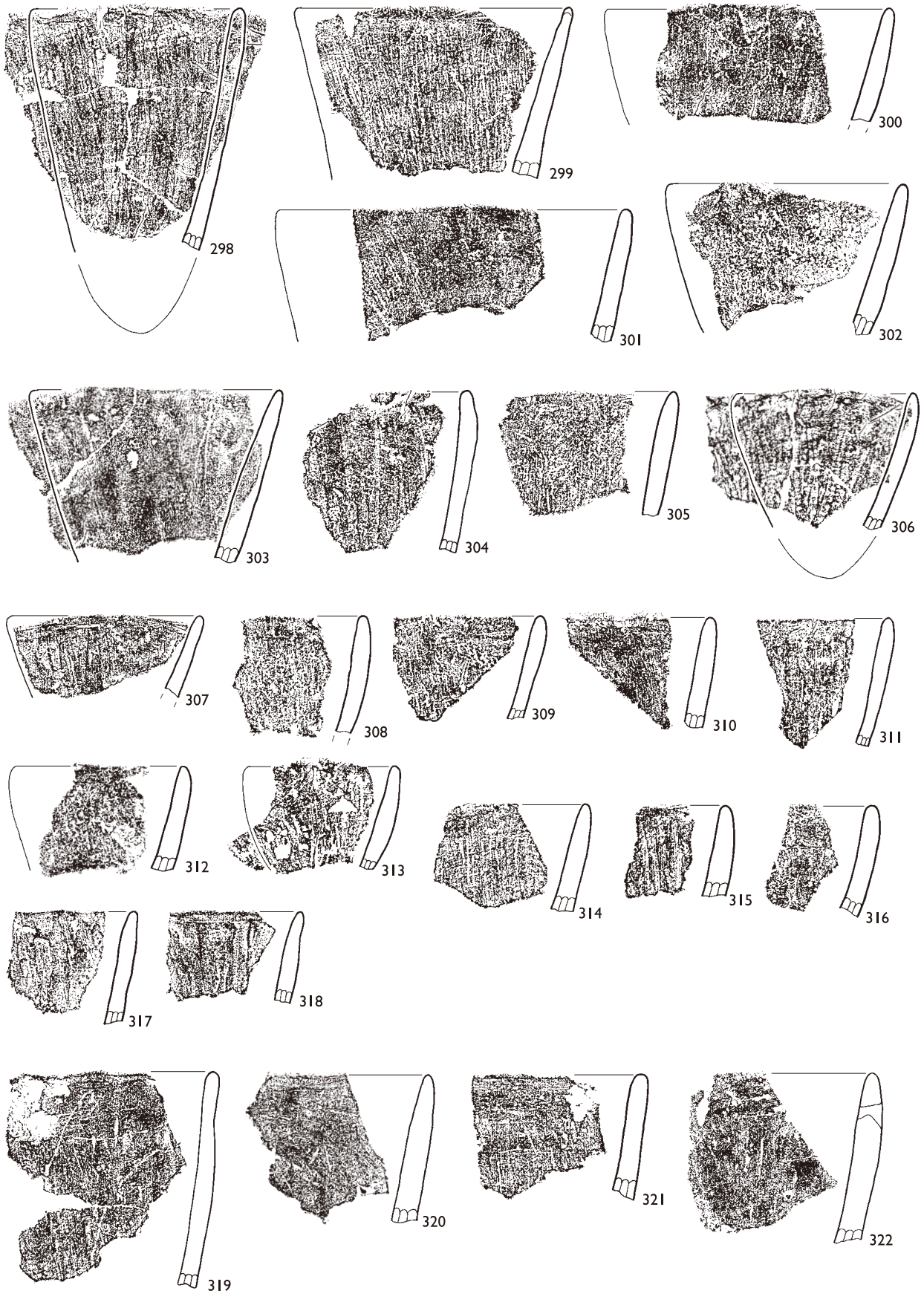
### （5）無文土器（第22～31図、第7表）

298～561は無文土器である。破片数は二八六点で、林氏資料の中で最も多い。撚糸文期の無文土器については宮崎氏がその全体の概要を整理している（宮崎一九八一）。また、野内氏が細かな観察に基づく分類案を示し（野内一九八四）、それを原田氏が発展させ「平坂式」として再整理している（原田一九八七）。ただ、石井氏も指摘するように、無文土器は撚糸文期を通じて一定量伴うとも考えられており（石井一九九一）、これらの無文土器をそのまま「平坂式」ということは難しい。また、無文の底部破片では東山式の底部との判別も困難であり、ここに示す土器群の中には東山式に属するものも含まれる可能性も想定しておく必要がある。

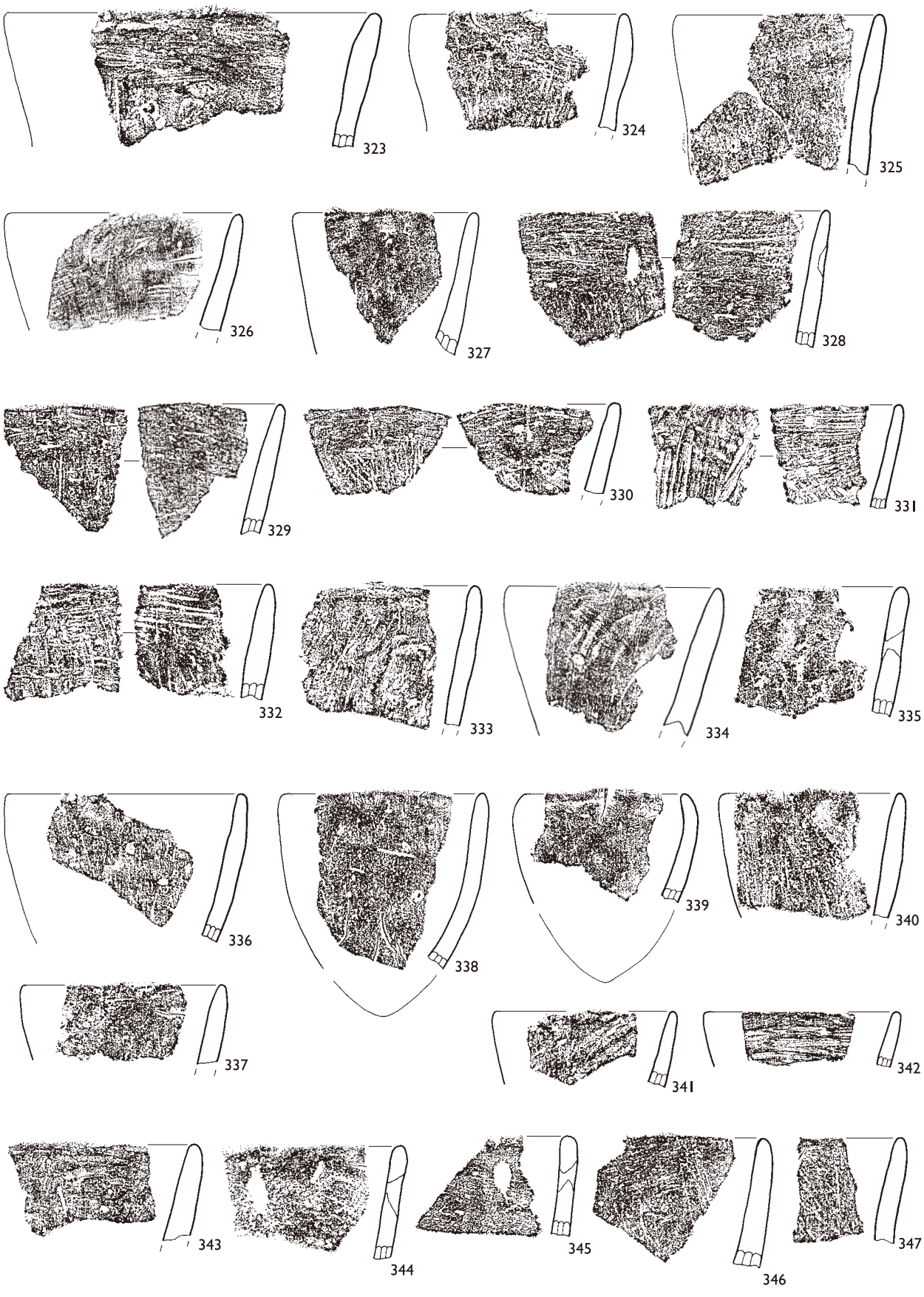
ここでは、主に口縁部断面形態、調整等から整理し記述する。

口縁部断面が丸棒状となるものは298～423、尖頭状となるものは424～472、角頭状となるものは473～484である。ほとんどが内湾あるいは直立する。

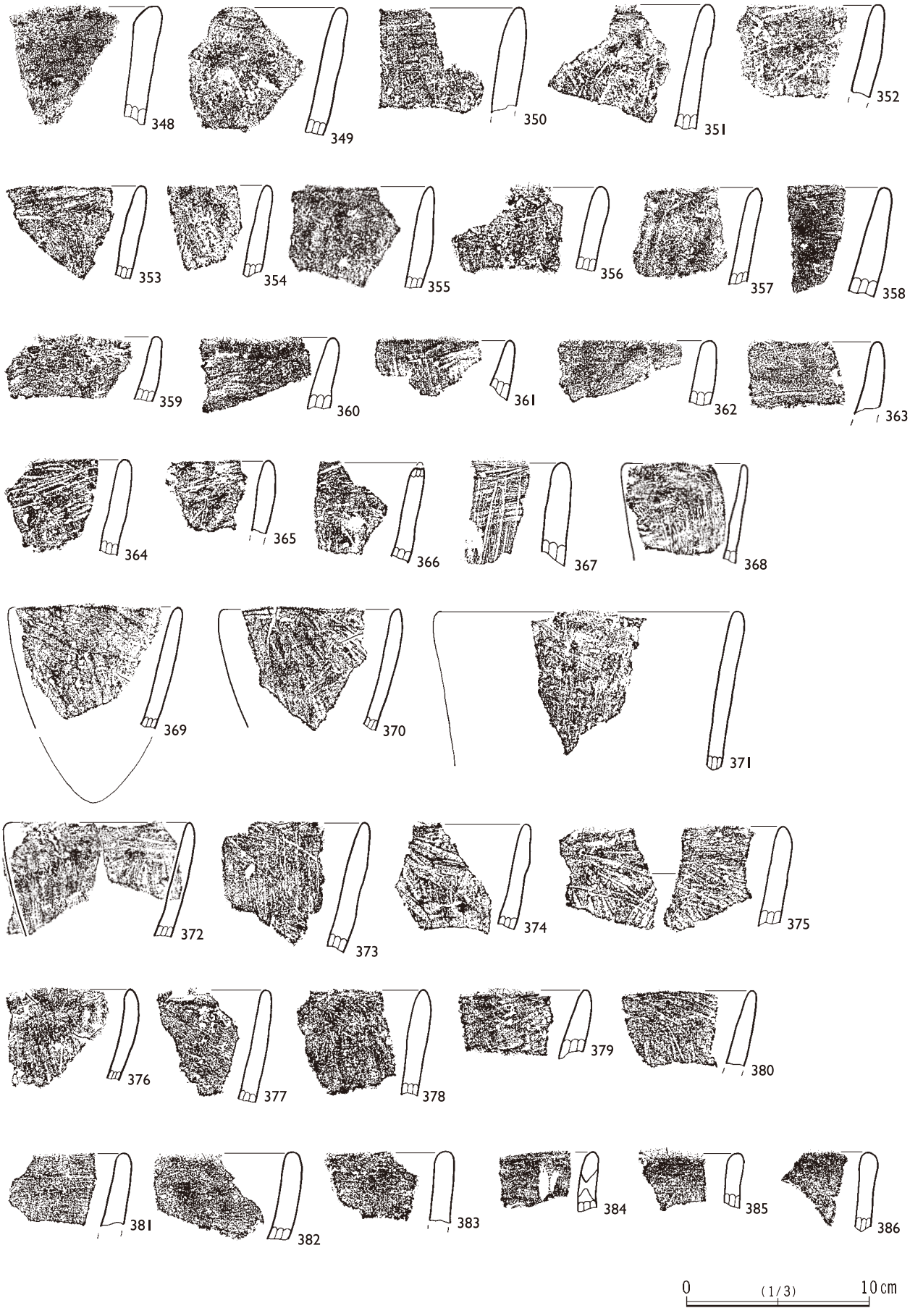
298～368は口縁部が丸棒状で、口縁部直下のみ横方向、以下は縦方向の擦痕が観察される。その中でも298～318は横方向擦痕の幅が僅かで、口縁部直下のみとなる。369～380は口縁部の擦痕が斜方向となる。擦痕が明瞭に残るものも多い。調整の切り合いを観察すると、多くが全面を縦方向に調整した後、口縁部を横あるいは斜方向に調整している。




第 22 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（17）（当館蔵）




第 23 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（18）（当館蔵）




第 24 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（19）（当館蔵）

内面に明瞭な調整痕をもつものも散見される（328、329、331など）。内面の調整具は外面と異なるようで、条痕状の擦痕となるものが多い。

381～386は、口縁部が横方向に撫でられるものである。386を除く五点の調整は、大浦山式にみられる平滑な撫で調整に似ており、これらが大浦山式に属する破片である可能性もある。386は口唇部がやや肥厚しており、稲荷台式に伴う可能性がある。

387～394はケズリ状の粗い擦痕が横方向に観察される。これらは主に関東地方北部に分布する天矢場式の範疇で捉えられる土器群である（中村二〇〇二）。特に387は口唇端から内面の磨き、黒色化がみられ、天矢場式の特徴をよく示している。

395～423の調整は不明瞭となる。423は胎土、色調、外反の様相等が他の土器群と異なっており、後期以降に下る可能性が高い[8]。

424～472は口縁部断面が尖頭状となる。そのうち443～448が外削ぎ状、467～472が内削ぎ状、449～466がその中間な形状を示す。調整は丸棒状口縁と同様の様相で、口縁部が横方向、以下が縦方向となる。内削ぎ状となるものには、内削ぎの下端が稜のようになるものがあるが（467、469など）、これらの作出は大浦山式土器b類にみられた内面の稜をもつ土器群（第16図）と類似し、両者の関係を示す可能性がある。455の口縁には僅かに刻み状の凹みがあり、補修刻みの可能性もある。

473～484は口縁部断面が角頭状となる。面取りの意識はあまり強くなく、角は緩い。473の口唇部には刻みが施される。

485～493は胴部破片である。いずれも縦方向の擦痕が顕著に認められる。487の上部には斜方向の擦痕が残る。485は補修孔が認められ、口縁部直下の破片であろう。

494～561は底部破片である。やや尖り気味の丸底となるものが多い。515、519、520は先端に平坦面が認められ、いわゆる「半平底」となる（原田一九八七）。大浦山式の底部では、底部先端の内面が極端に肥厚するものが特徴的に見られたが、無文土器の底部においても一部に同様の様相が観察された。また、底部先端が底部先端が擦り減るものが散見された。擦り減りが観察されたものは図中に矢印でその範囲を示した。

器面調整は口縁部、胴部と同様の様相を示し、粗い擦痕をもつもの、撫でられるもの、不明瞭なもの等がある。

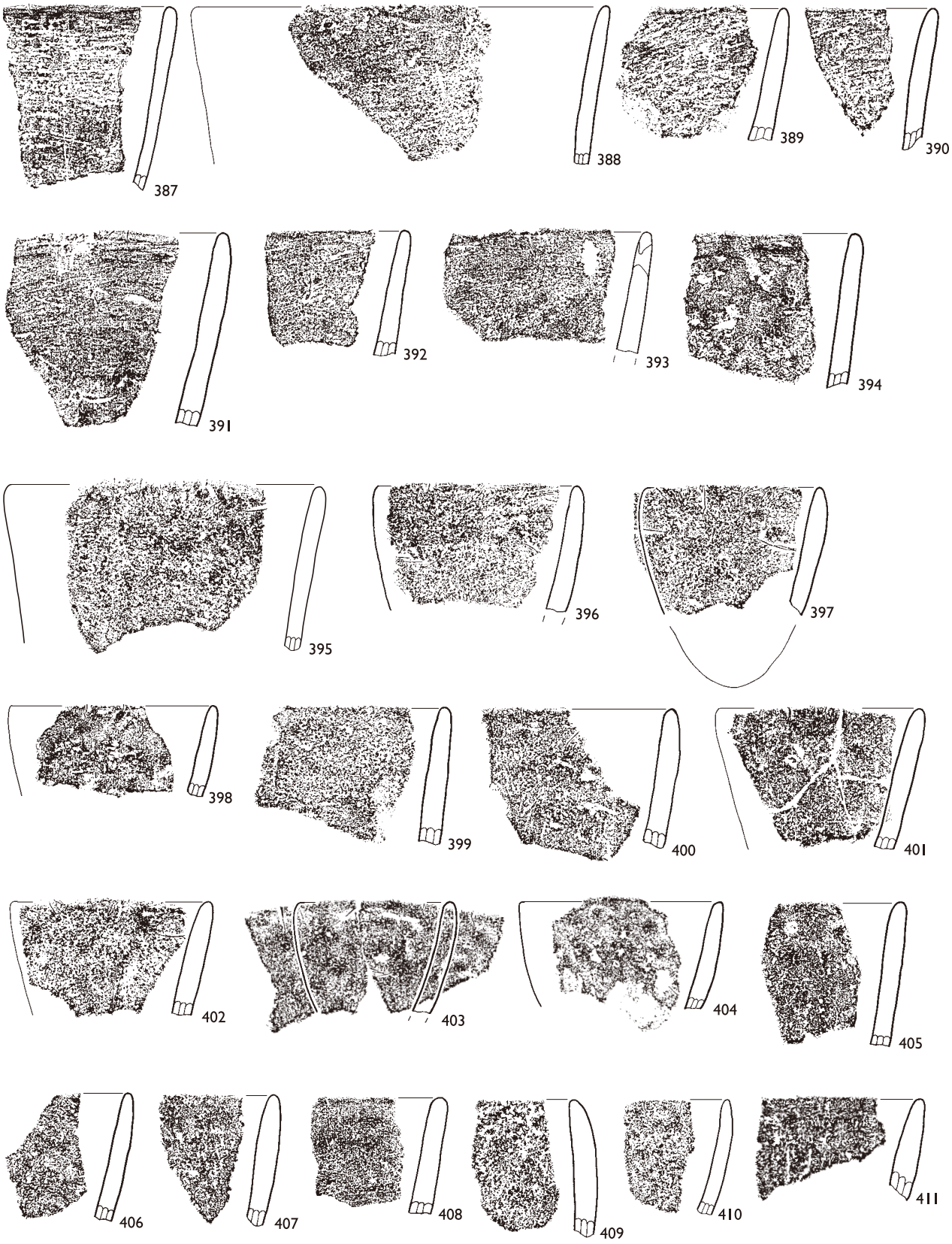
なお482には「南區上大岡十王堂免西側」との注記があるが「西側」の文字が確認できるのは林氏資料の中で本資料のみである。

**（6）早期後半の土器群（第32図、第8表）**

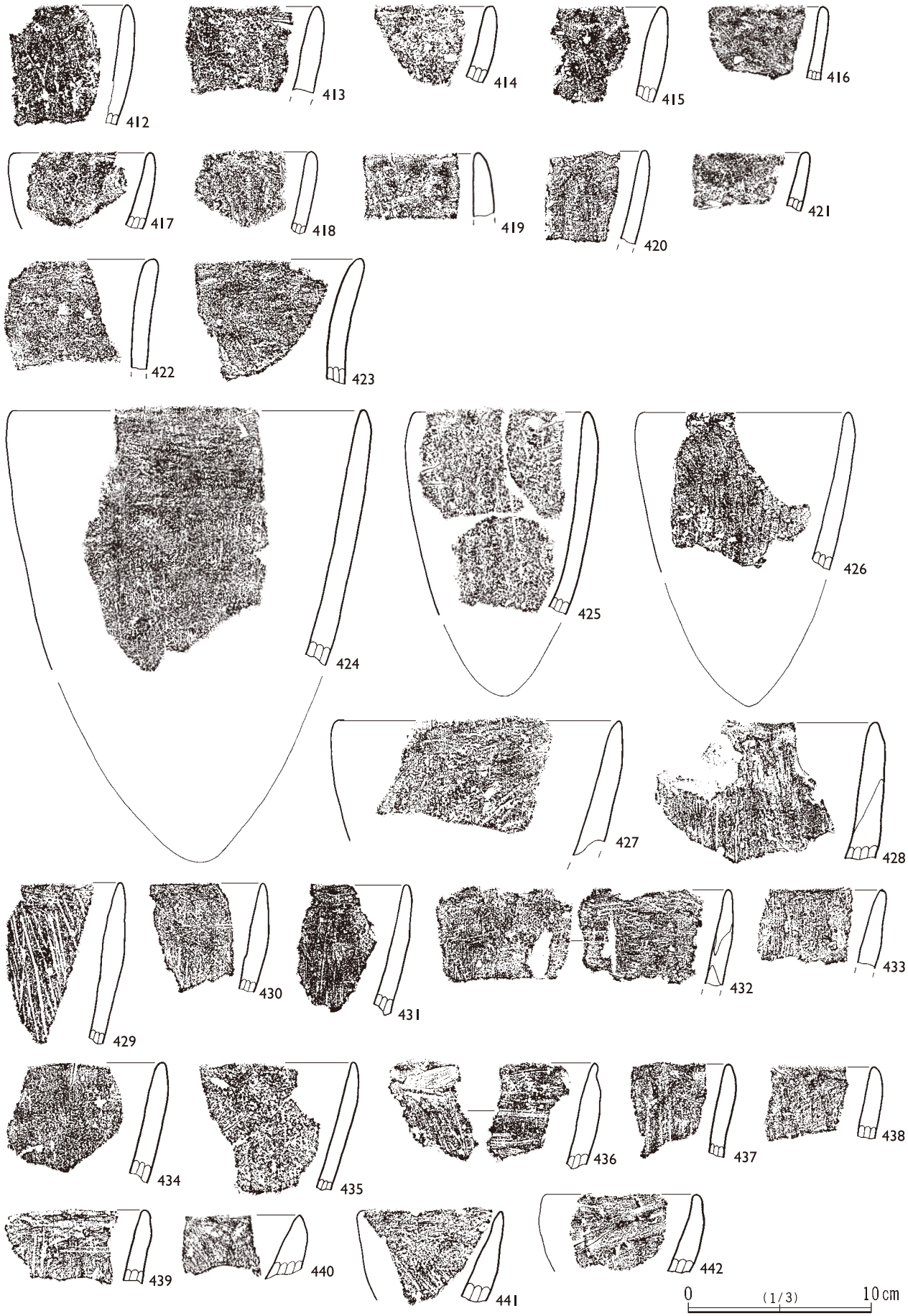
562～568は早期後半の所産と考えられる土器群である。いずれも無文の胴部から底部破片であり、口縁部破片は存在しない。

562、563の器面には全体に斜位の擦痕が顕著に認められる。内面にも粗い擦痕が横位に認められるが、あまり明瞭でない。胎土には砂粒を多く含み、全体にくすんだ赤褐色を呈する。562の底部は尖り気味の丸底となる。564～568の調整痕は不明瞭である。567は底面を欠くが、おそらく平底であろう。568はやや張り出し、突出した底部となる。

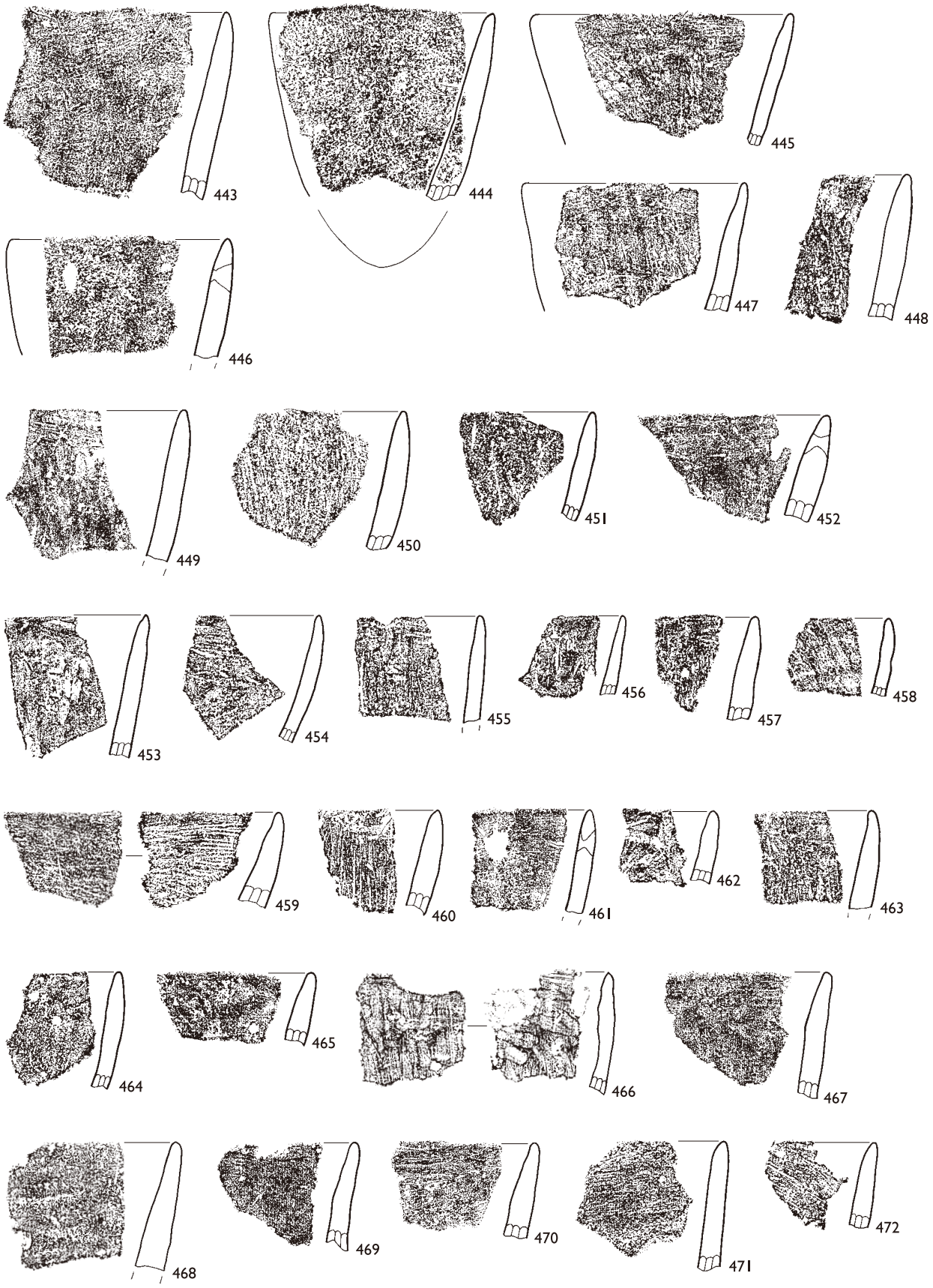
これらの明確な所属時期は不明だが、以上の要素から早期後半に属するものと考えられる。十王堂免遺跡から東へ六〇〇m程の位置には、当該時期を主体とする紅取（べにとり）遺跡が存在している（神奈川県立博物館編一九八〇）。紅取遺跡は、東海地方に由来を持つとされる入海式土器の出土で知られるが[9]、562、563の調整や胎土の特徴は紅取遺跡出土の入海式土器とよく似ており、両者の関係を窺わせる。



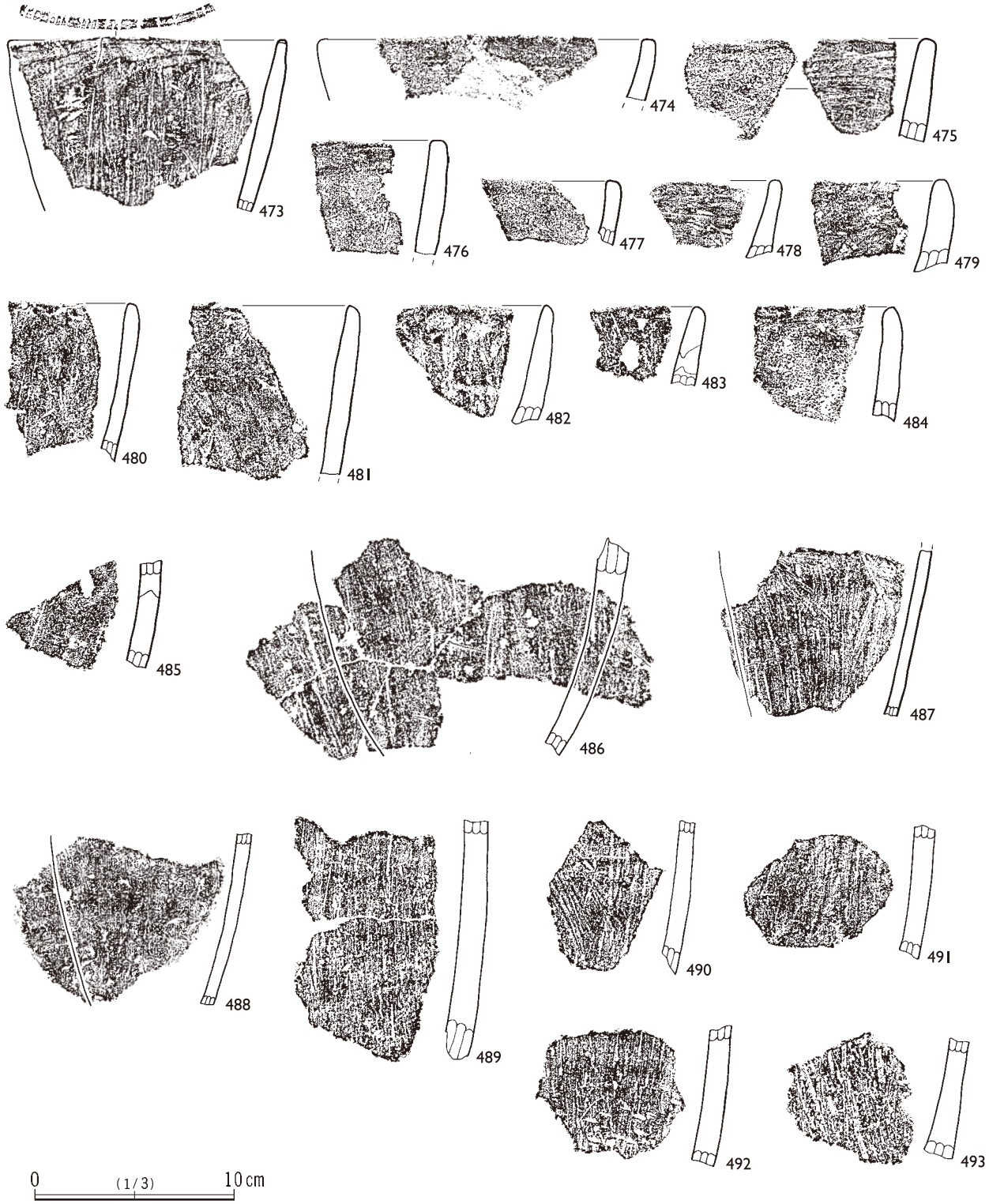

第 25 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（20）（当館蔵）



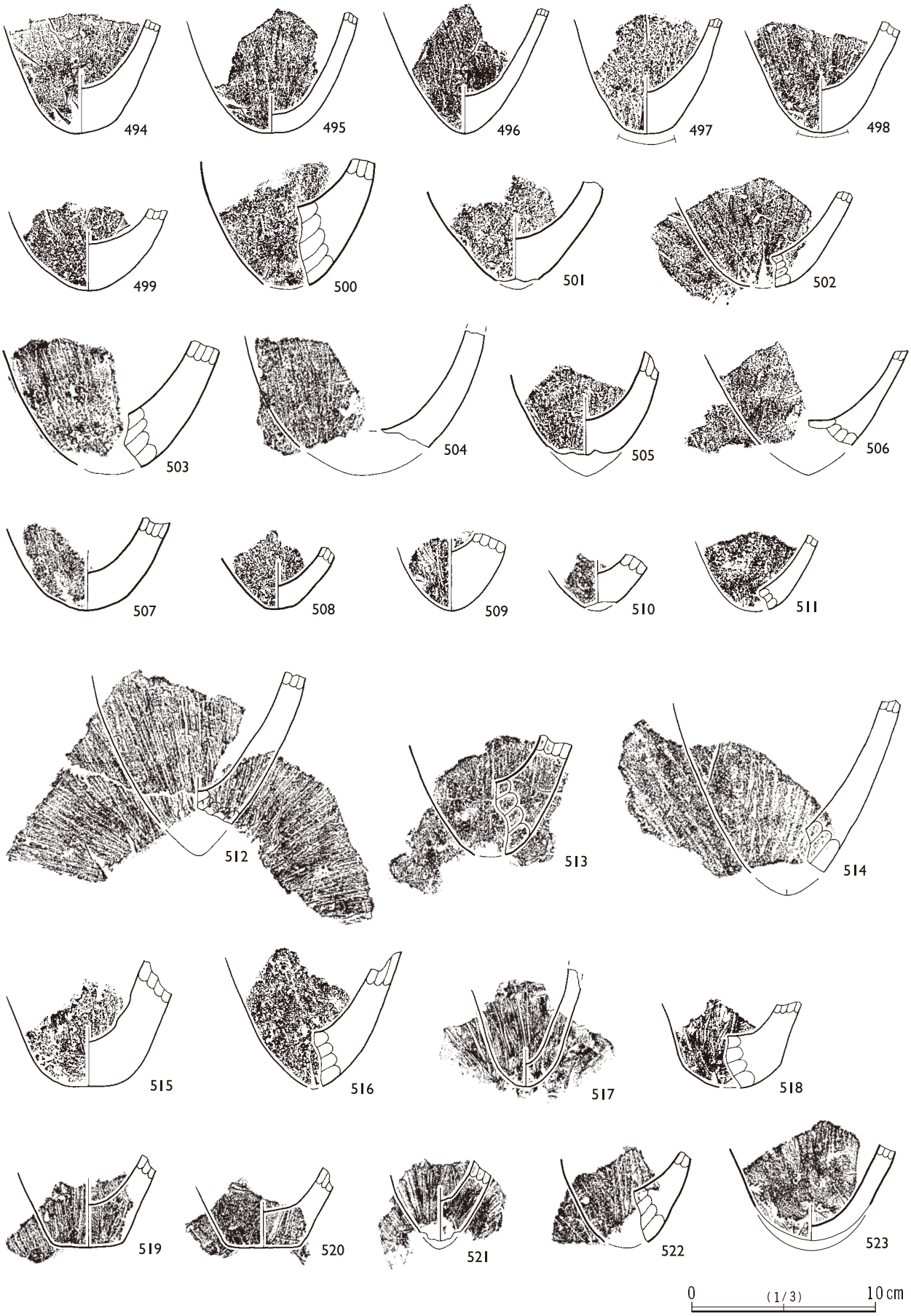

第 26 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（21）（当館蔵）



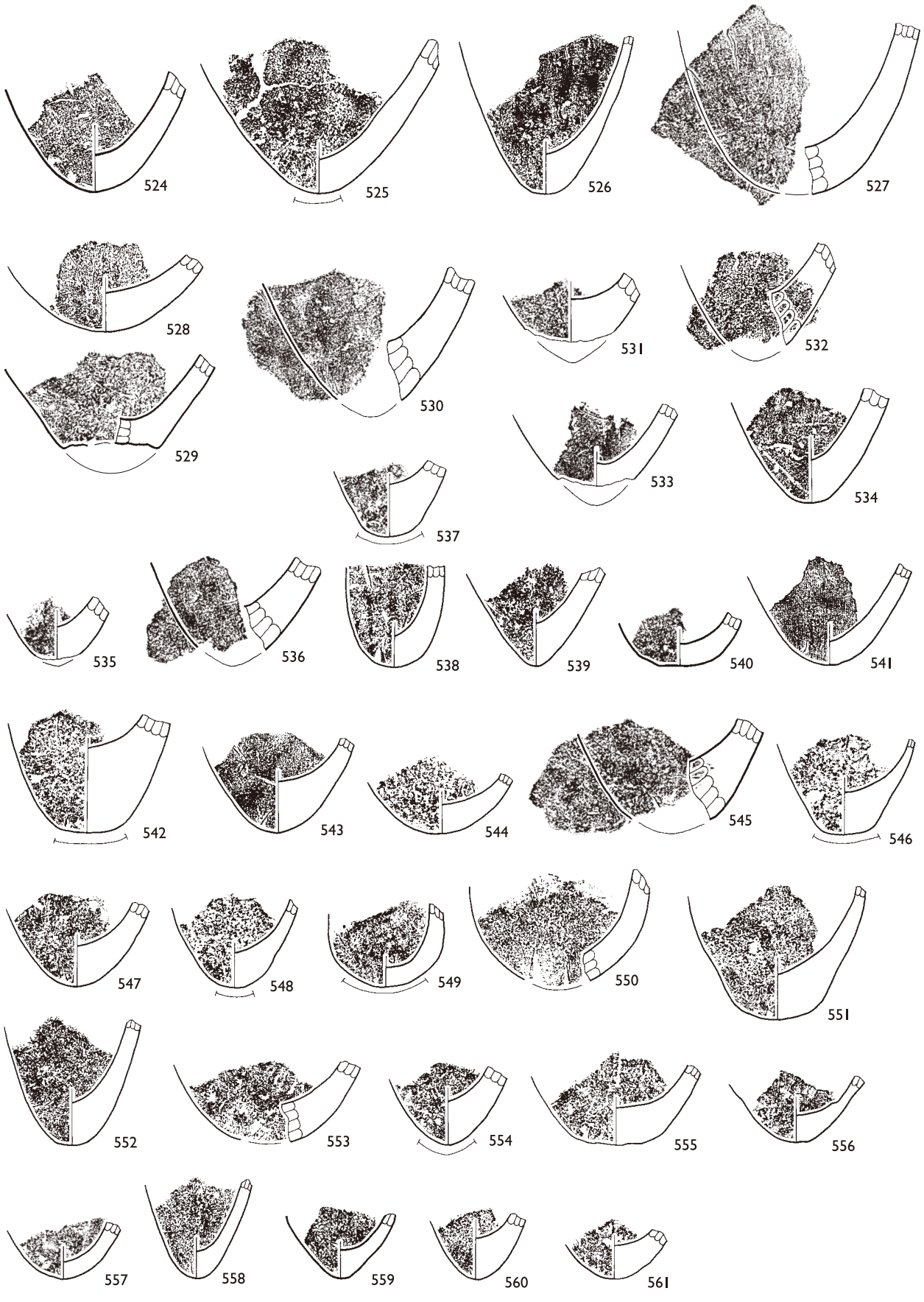

第 27 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（22）（当館蔵）



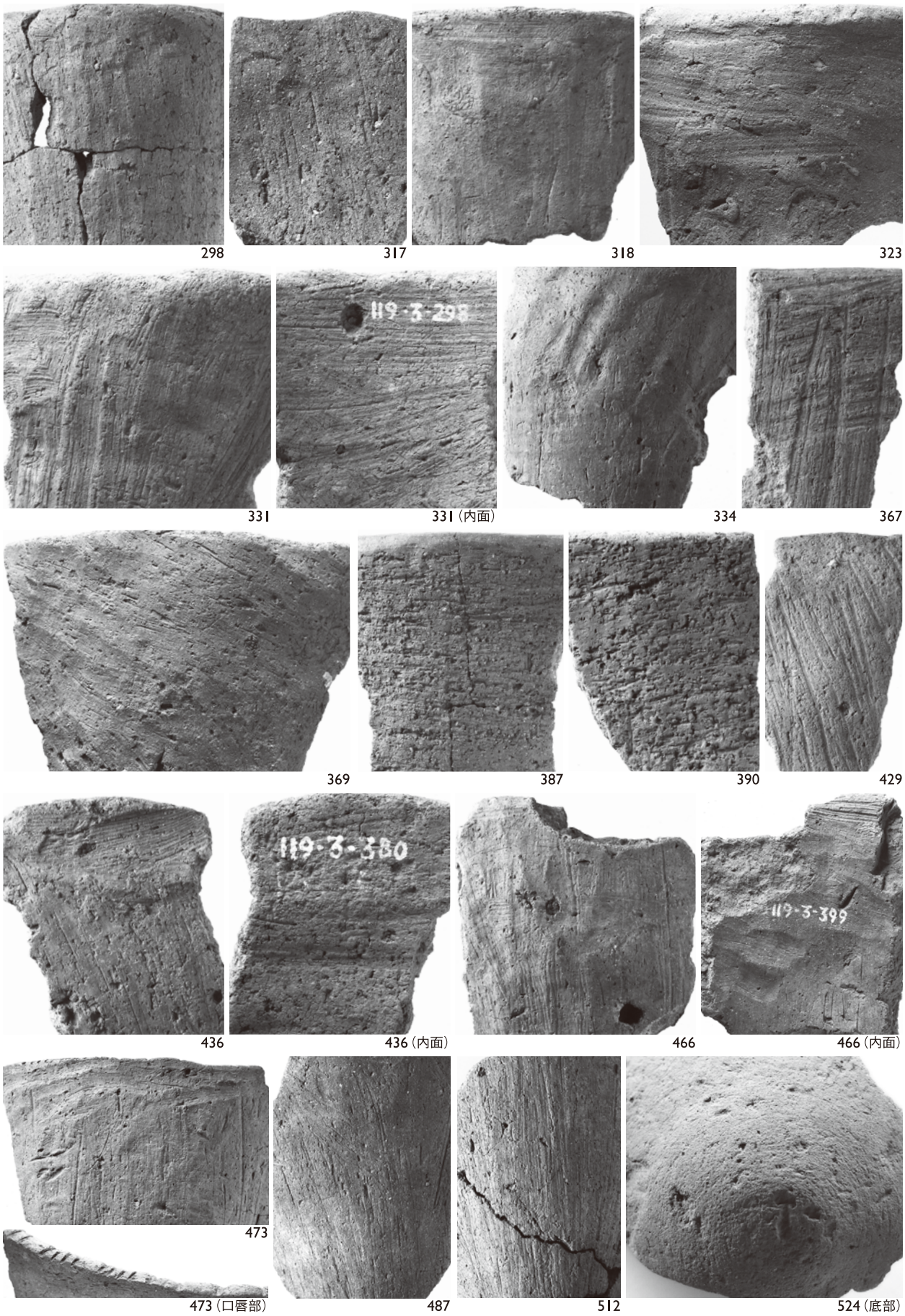

第 28 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（23）（当館蔵）




第 29 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（24）（当館蔵）




第 30 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（25）（当館蔵）




第 31 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（26）（当館蔵）

# 第７表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表（無文土器）

| 番号 | 注記番号 | 重量 | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） |
|---|---|---|---|---|
| 298 | 3-316 | 189 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 299 | 3-335 | 150 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 300 | 3-321 | 82 | 弱い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ナデ |
| 301 | 3-233 | 99 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 粗い擦痕（横） |
| 302 | 3-259 | 88 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 303 | 3-333 | 169 | 弱い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 304 | 3-278 | 79 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（横） |
| 305 | 3-264 | 62 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（横） |
| 306 | 3-325 | 72 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 不明瞭 |
| 307 | 3-235 | 37 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 308 | 3-296 | 39 | 弱い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 309 | 3-297 | 35 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 310 | 3-376 | 29 | 弱い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 不明瞭 |
| 311 | 3-332 | 31 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 不明瞭 |
| 312 | 3-364 | 42 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 不明瞭 |
| 313 | 3-256 | 38 | 粗い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 不明瞭 |
| 314 | 3-355 | 41 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 弱い擦痕（横） |
| 315 | 3-241 | 25 | 粗い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 粗い擦痕（縦） |
| 316 | 3-229 | 25 | 弱い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | 不明瞭 |
| 317 | 3-250 | 37 | ケズリ状の擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 318 | 3-252 | 30 | 弱い擦痕（縦・口縁直下のみ横） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 319 | 3-267 | 117 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 320 | 3-351 | 78 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 321 | 3-288 | 61 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 322 | 3-208 | 97 | 擦痕（口縁部は横、以下は斜） | 擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 323 | 3-314 | 120 | 条痕状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 324 | 3-263 | 59 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 325 | 3-277 | 88 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（縦） |
| 326 | 3-340 | 75 | 条痕状の擦痕（横）→ケズリ状の擦痕（縦） | ナデ（横）→ケズリ状の擦痕（縦） |
| 327 | 3-330 | 45 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ナデ |
| 328 | 3-270 | 70 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 条痕状の擦痕（横） |
| 329 | 3-249 | 50 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 330 | 3-284 | 43 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 331 | 3-298 | 33 | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 332 | 3-239 | 56 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 条痕状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 333 | 3-280 | 64 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） |
| 334 | 3-329 | 75 | ケズリ状擦痕（縦）→口縁部は弱い擦痕（横） | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（横） |
| 335 | 3-271 | 66 | 弱い擦痕（口縁部は横）、以下はナデ（縦） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 336 | 3-236 | 57 | ケズリ状擦痕（縦）→口縁部は弱い擦痕（横） | ケズリ状擦痕（縦）→口縁部は弱い擦痕（横） |
| 337 | 3-218 | 39 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 338 | 3-216 | 80 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 339 | 3-322 | 42 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ナデ |
| 340 | 3-248 | 65 | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 条痕状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 341 | 3-357 | 20 | 擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 342 | 3-228 | 16 | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 343 | 3-255 | 57 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 344 | 3-204 | 59 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 345 | 1-054 | 33 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ナデ |
| 346 | 3-273 | 74 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（斜） |
| 347 | 3-242 | 26 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（縦）→弱い擦痕（横） |
| 348 | 3-054 | 52 | 擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 349 | 3-289 | 51 | ナデ（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 350 | 3-234 | 53 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 351 | 3-251 | 37 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 352 | 3-292 | 40 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 353 | 3-212 | 26 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 354 | 3-203 | 19 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 355 | 3-237 | 42 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は斜） | 不明瞭 |
| 356 | 3-213 | 34 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 粗い擦痕（横） |
| 357 | 3-300 | 33 | ナデ（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 358 | 3-375 | 31 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 359 | 3-246 | 28 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 360 | 3-388 | 31 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 361 | 3-382 | 18 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 362 | 3-245 | 28 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 363 | 3-328 | 32 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 364 | 3-387 | 31 | 条痕状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ナデ（横） |
| 365 | 3-394 | 18 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 366 | 3-398 | 21 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 367 | 3-383 | 28 | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 粗い擦痕（横） |
| 368 | 3-260 | 20 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（斜） |
| 369 | 3-253 | 49 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（斜） |
| 370 | 3-266 | 39 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 371 | 3-226 | 59 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状擦痕 |
| 372a | 3-339 | 36 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 条痕状の擦痕（横） |
| 372b | 3-379 | 22 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 条痕状の擦痕（横） |
| 373 | 3-336 | 41 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 条痕状の擦痕（横） |
| 374 | 3-211 | 32 | 弱い擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 擦痕（斜・縦） |
| 375 | 3-293 | 35 | 粗い擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 376 | 3-371 | 26 | 弱い擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 377 | 3-389 | 27 | 弱い擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（斜）→弱い擦痕（横） |
| 378 | 3-358 | 38 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 379 | 3-362 | 22 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（斜） |
| 380 | 3-343 | 25 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 381 | 3-377 | 25 | 平滑なナデ（横） | 弱い擦痕（横） |
| 382 | 3-353 | 32 | 平滑なナデ（横） | 不明瞭 |
| 383 | 3-390 | 22 | 平滑なナデ（横） | 弱い擦痕（横） |
| 384 | 3-207 | 16 | 平滑なナデ（横） | 弱い擦痕（横） |
| 385 | 3-064 | 12 | 平滑なナデ（横） | ナデ |
| 386 | — | 12 | 不明瞭 | ナデ |

| 番号 | 注記番号 | 重量 | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） |
|---|---|---|---|---|
| 387 | 3-269 | 72 | ケズリ状擦痕（横）→ミガキ（口唇部から内面） | ミガキ（横・光沢あり） |
| 388 | 1-077 | 81 | ケズリ状の擦痕（横） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 389 | 3-281 | 72 | ケズリ状の擦痕（横） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 390 | 3-294 | 32 | ケズリ状の擦痕（横） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 391 | 3-274 | 133 | ケズリ状の擦痕（横） | 条痕状の弱い擦痕（横） |
| 392 | 3-282 | 46 | ケズリ状の擦痕（横） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 393 | 3-275 | 83 | ケズリ状の擦痕（横） | 弱い擦痕（横） |
| 394 | 3-268 | 78 | ケズリ状の擦痕（横）→ナデ | ケズリ状の擦痕（横） |
| 395 | 3-326 | 124 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 396 | 3-327 | 86 | ケズリ状擦痕？（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 397 | 3-205 | 56 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 398 | 3-232 | 38 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 399 | 1-076 | 87 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 400 | 3-262 | 80 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 401 | 3-363 | 73 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 402 | 3-319 | 61 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 403 | 3-317<br>3-318 | 97 | 弱い擦痕 | 不明瞭 |
| 404 | 3-247 | 49 | ナデ？ | ナデ |
| 405 | 3-345 | 47 | 弱い擦痕 | 不明瞭 |
| 406 | 3-385 | 25 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 407 | 3-354 | 34 | ナデ？ | ナデ |
| 408 | 3-087 | 49 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 409 | 3-349 | 46 | 弱い擦痕 | 不明瞭 |
| 410 | 3-393 | 22 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 411 | 3-215 | 40 | 不明瞭 | 弱い擦痕（横） |
| 412 | 3-295 | 30 | ナデ？ | 不明瞭 |
| 413 | 3-337 | 36 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 414 | 3-243 | 22 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 415 | 3-366 | 30 | 弱い擦痕 | 弱い擦痕（横） |
| 416 | 3-347 | 22 | ナデ？ | ナデ |
| 417 | 3-338 | 21 | 不明瞭 | ナデ |
| 418 | 3-369 | 22 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 419 | 3-344 | 28 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 420 | 3-323 | 22 | 不明瞭 | ケズリ状の擦痕（縦）→弱い擦痕（横） |
| 421 | 3-360 | 17 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 422 | 3-285 | 48 | 弱い擦痕？ | 弱い擦痕（横） |
| 423 | 3-265 | 57 | ナデ（横） | ナデ（横） |
| 424 | 3-225 | 216 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 425 | 3-315 | 112 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 426 | 3-279 | 64 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（横） |
| 427 | 3-221 | 98 | 平滑なナデ | ナデ |
| 428 | 3-334 | 98 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は縦、以下は縦） |
| 429 | 3-286 | 44 | 粗い擦痕（縦） | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 430 | 3-346 | 31 | ケズリ状の擦痕（口縁部は斜、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 431 | 3-350 | 32 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（横） |
| 432 | 3-283 | 52 | 弱い擦痕（横・縦） | 弱い擦痕（横） |
| 433 | 3-341 | 28 | ケズリ状の擦痕（縦） | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 434 | 3-342 | 46 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 435 | 3-287 | 42 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 436 | 3-380 | 26 | 口縁直下は刻取り状（横）、以下はケズリ状擦痕（斜） | 条痕状の擦痕（横） |
| 437 | 3-217 | 22 | ケズリ状の擦痕（縦） | 弱い擦痕（横） |
| 438 | 3-210 | 21 | ケズリ状の擦痕（縦） | 不明瞭 |
| 439 | 3-238 | 29 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 440 | 3-374 | 23 | ケズリ状の擦痕（斜） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 441 | 3-230 | 33 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） | 不明瞭 |
| 442 | 3-219 | 28 | 粗い擦痕（横） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 443 | 3-276 | 162 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 444 | 3-324 | 165 | 不明瞭 | 弱い擦痕（縦） |
| 445 | 3-223 | 56 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 条痕状の擦痕（横） |
| 446 | 3-254 | 66 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 447 | 3-320 | 63 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 448 | 3-202 | 39 | ケズリ状の擦痕（斜） | ケズリ状の擦痕（斜） |
| 449 | 3-331 | 63 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 450 | 3-258 | 68 | ケズリ状の擦痕（縦） | 不明瞭 |
| 451 | 3-395 | 29 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 452 | 3-206 | 57 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 453 | 3-231 | 47 | ナデ | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 454 | 3-244 | 26 | ケズリ状の擦痕（横） | 不明瞭 |
| 455 | 3-352 | 29 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 456 | 3-391 | 14 | 弱い擦痕（縦） | 弱い擦痕（横） |
| 457 | 3-026 | 21 | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 458 | 3-209 | 17 | ケズリ状の擦痕（斜） | 弱い擦痕（横） |
| 459 | 3-240 | 51 | ケズリ状の擦痕（横） | 条痕状の擦痕（横） |
| 460 | 3-381 | 28 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（横） |
| 461 | 3-370 | 33 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 462 | 3-378 | 18 | 不明瞭 | ケズリ状の擦痕（横） |
| 463 | 3-368 | 32 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 464 | 3-356 | 28 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 465 | 3-361 | 29 | ナデ | ナデ |
| 466 | 3-399 | 38 | 擦痕（横・縦） | 擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 467 | 1-081 | 59 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 468 | 3-257 | 77 | ナデ | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 469 | 3-094 | 33 | 弱い擦痕（横） | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は斜） |
| 470 | 1-092 | 41 | 粗い擦痕（横） | 条痕状の擦痕（横） |
| 471 | 3-080 | 49 | 弱い擦痕（横） | 不明瞭 |
| 472 | 3-386 | 18 | ケズリ状の擦痕（斜） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 473 | 3-313 | 110 | 粗い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 474 | 3-359<br>3-396 | 24<br>19 | ナデ | ナデ |

| 番号 | 注記番号 | 重量 | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） |
|---|---|---|---|---|
| 475 | 3-299 | 35 | 不明瞭 | 粗い擦痕（横） |
| 476 | 3-290 | 35 | ナデ | ケズリ状の擦痕（横） |
| 477 | 3-397 | 17 | ナデ | ナデ |
| 478 | 3-069 | 20 | 粗い擦痕（横） | 不明瞭 |
| 479 | 3-348 | 32 | ナデ | 弱い擦痕（横） |
| 480 | 3-261 | 38 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（横） |
| 481 | 3-272 | 68 | ケズリ状の擦痕（縦）→口縁部はナデ | 擦痕（横） |
| 482 | 3-220 | 38 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 483 | 3-037 | 19 | 擦痕（横・縦） | 擦痕（横） |
| 484 | 3-222 | 44 | 弱い擦痕（口縁部は横、以下は縦） | 不明瞭 |
| 胴部 | | | | |
| 485 | — | 29 | 弱い擦痕（縦） | 弱い擦痕（横） |
| 486 | 3-406<br>3-416 | 250 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 487 | 3-408 | 59 | ケズリ状の擦痕（上部は横、以下は縦） | ケズリ状の擦痕（口縁部は横、以下は縦） |
| 488 | 3-411 | 78 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 489 | 3-413 | 166 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦・斜・横） |
| 490 | 3-404 | 46 | ケズリ状の擦痕（縦・斜） | ナデ |
| 491 | — | 62 | ケズリ状の擦痕（縦） | ナデ |
| 492 | — | 56 | ケズリ状の擦痕（縦）・調整具痕跡明瞭 | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 493 | — | 59 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 底部 | | | | |
| 494 | 1-112 | 134 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（縦） | ナデ |
| 495 | 3-180 | 49 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 496 | 1-113 | 77 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（縦） | ナデ |
| 497 | 1-114 | 94 | ケズリ状の擦痕（縦） | 不明瞭 |
| 498 | 3-175 | 88 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（縦） | ナデ |
| 499 | 4-641 | 96 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（縦） | ナデ |
| 500 | — | 92 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 501 | — | 100 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | 不明瞭 |
| 502 | 3-418 | 56 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 503 | — | 90 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 504 | 3-405 | 65 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 505 | — | 58 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 506 | 3-410 | 42 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ（縦） | ナデ |
| 507 | — | 39 | ケズリ状の擦痕（縦）?→ナデ | 不明瞭 |
| 508 | 3-200 | 30 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 509 | 3-193 | 54 | 粗い擦痕（縦）→ナデ | 不明瞭 |
| 510 | 3-198 | 34 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 511 | — | 22 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 512 | 1-110 | 305 | ケズリ状の擦痕（縦）・調整具痕跡明瞭 | 粗い擦痕（縦） |
| 513 | 3-170 | 144 | ケズリ状の擦痕（縦） | 不明瞭 |
| 514 | 3-415 | 144 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 515 | — | 95 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 516 | — | 86 | ナデ？ | ナデ |
| 517 | 3-182 | 59 | 粗い擦痕（縦） | 粗い擦痕（横・縦） |
| 518 | — | 42 | 粗い擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 519 | 3-199 | 47 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 520 | 3-201 | 41 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 521 | 3-190 | 54 | 粗い擦痕（縦） | 粗い擦痕（横・縦） |
| 522 | — | 48 | 粗い擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 523 | 3-173 | 53 | 粗い擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 524 | 3-178 | 83 | ナデ | ナデ |
| 525 | 1-111 | 205 | 平滑なナデ | ナデ |
| 526 | 1-115 | 86 | 平滑なナデ | ナデ |
| 527 | 3-407 | 147 | ナデ？（縦） | ナデ？ |
| 528 | 3-179 | 96 | ナデ | ナデ |
| 529 | — | 102 | ナデ？ | ナデ？ |
| 530 | 3-414 | 112 | ナデ | 不明瞭 |
| 531 | 3-176 | 91 | ナデ | ナデ |
| 532 | 4-643 | 60 | ナデ | ナデ |
| 533 | 3-412 | 33 | ナデ | ナデ |
| 534 | — | 79 | ナデ | ナデ |
| 535 | 3-195 | 35 | ナデ | ナデ |
| 536 | — | 57 | 平滑なナデ | ナデ |
| 537 | 4-642 | 75 | ナデ？（縦） | 不明瞭 |
| 538 | 1-117 | 90 | ナデ？（縦） | ナデ？ |
| 539 | 3-184 | 50 | ナデ | 不明瞭 |
| 540 | — | 26 | ナデ？ | 不明瞭 |
| 541 | — | 33 | ミガキ（縦） | ナデ |
| 542 | 3-171 | 183 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 543 | 1-103 | 88 | ナデ | ナデ |
| 544 | 3-172 | 67 | ナデ？ | ナデ？ |
| 545 | — | 113 | ケズリ状の擦痕（縦）？ | ナデ |
| 546 | 3-181 | 83 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 547 | 3-174 | 80 | ナデ？ | 不明瞭 |
| 548 | 3-192 | 60 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 549 | 3-185 | 42 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 550 | — | 61 | 不明瞭 | ナデ |
| 551 | — | 58 | 不明瞭 | ナデ |
| 552 | 3-177 | 65 | ナデ | ナデ |
| 553 | 3-419 | 67 | ナデ | ナデ |
| 554 | — | 56 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 555 | 3-191 | 50 | ナデ | ナデ |
| 556 | 3-194 | 38 | ケズリ状の擦痕（縦）→ナデ | ナデ |
| 557 | 3-197 | 20 | ナデ | ナデ |
| 558 | 3-186 | 41 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 559 | 3-196 | 27 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 560 | 3-188 | 38 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 561 | — | 39 | ナデ | 不明瞭 |

重量の単位はg

### （7）所属時期不明の土器（第33図）

569～573は所属時期不明の土器である。胴部から底部の破片で、明確な文様は施されない。569には刺突状の痕跡が認められるが、偶発的所産の可能性もある。569、571～573の底部先端はいずれも乳房状に突出し、569、572では突出部の中央が僅かに凹む。569の底部から三㎝程上の位置には緩い段が認められる。器面に明確な調整痕は認められないが、全面が弱く撫でられ平滑である。内面は横方向の粗い擦痕が認められる。内外面ともに細かな繊維状、筋状の圧痕が多数観察される。色調は薄くくすんだ赤褐色を呈し、内面の大部分は黒色化している。

これらの所属時期について明確には指摘し得ないが、右に指摘した器形、底部形態、器面、胎土等の様相から、草創期隆線文土器の時期の可能性がある。ただ、先端の突出する底部は先の早期後半の土器（568）にも認められる。しかし、568の底部は先端の突出に合わせて内面も凹んでいるのに対し、569、571～573の底部内面にはそのような凹みは認められず、作出が異なる。また器面調整や胎土の様相は大きく異なる。現時点ではいずれとも決し難く、隆線文土器の時期の可能性を指摘しておくに留めておきたい。

## 三　林氏採集土器群について―考察―

### （1）器面の調整具痕について

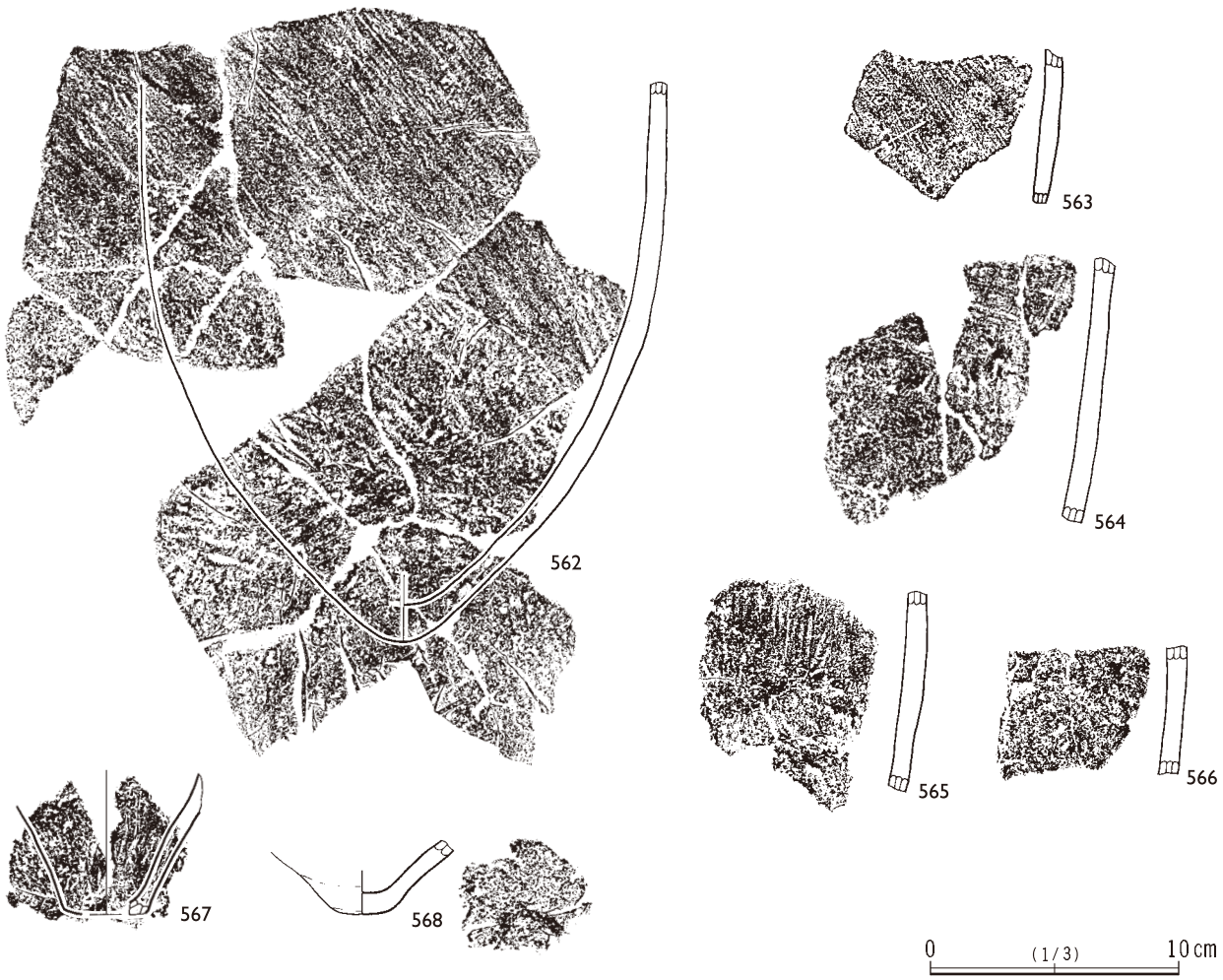
林氏資料のうち、数点の器面に調整具によると思われる痕跡が認められた（第34図）。163、226の内面には水平に調整痕が認められ、その端に調整具痕が観察される。調整具痕の幅は十二～十五㎜程度である。擦痕や粘土の様子を観察すると、調整具痕は調整具の一回一回の動きの終点に残されているようである。226は水平な調整痕の端にそのまま調整具痕が残されているが、163では終点の直前で僅かに上方に曲がっている。これらの痕跡は、内面調整時の腕の動きを反映しているものと考えられ、おそらく土器の内側に右手を入れ、腕を引く動作により調整を行なったことで生じたと推測される。163の調整具の動きの終点直前の湾曲は、その際の腕の動きによるものであろう。両者とも調整具痕の縦の位置は概ねまとまるが、特に226は揃っており、一回一回の調整のストロークが規則的に行なわれたことを示している。また細かな点では、163の調整具痕はいずれも右上がりになっているのに対し、226ではいずれも左上がりになっている。おそらく調整具の持ち方や手首の角度の違いによるものと考えられるが、163は口縁部付近、226は胴部という部位の違いに起因する可能性もある。

492の外面には縦位の擦痕とともに調整具痕が認められる。調整具痕の幅は六㎜程度である。163や226と同様に調整具の動きの終点に残されているようであり、上から下へ調整具が動いたことが分かる。また調整具痕の位置も概ね揃う。

これらのように調整具痕が顕著に残る例はあまり多くないが、土器製作時の腕、身体の動作を復元する上で重要な情報となろう。

### （2）補修孔について

岡本勇氏による大浦山遺跡調査報告で既に指摘されているように、大浦山式土器には縦長の切れ目状に施される補修孔が特徴的に認められる（岡本一九六〇）。これは大浦山式の他に「平坂式」や花輪台式にも認められるが（原田一九八七、一九九一）、他地域、他時期の土器には見られず、撚糸文期後半の特徴と言ってよい。また口縁部に楔状の刻みが施されることもあり、これも同様の目的のための処置と考えられている。林




第 32 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（27）（当館蔵）

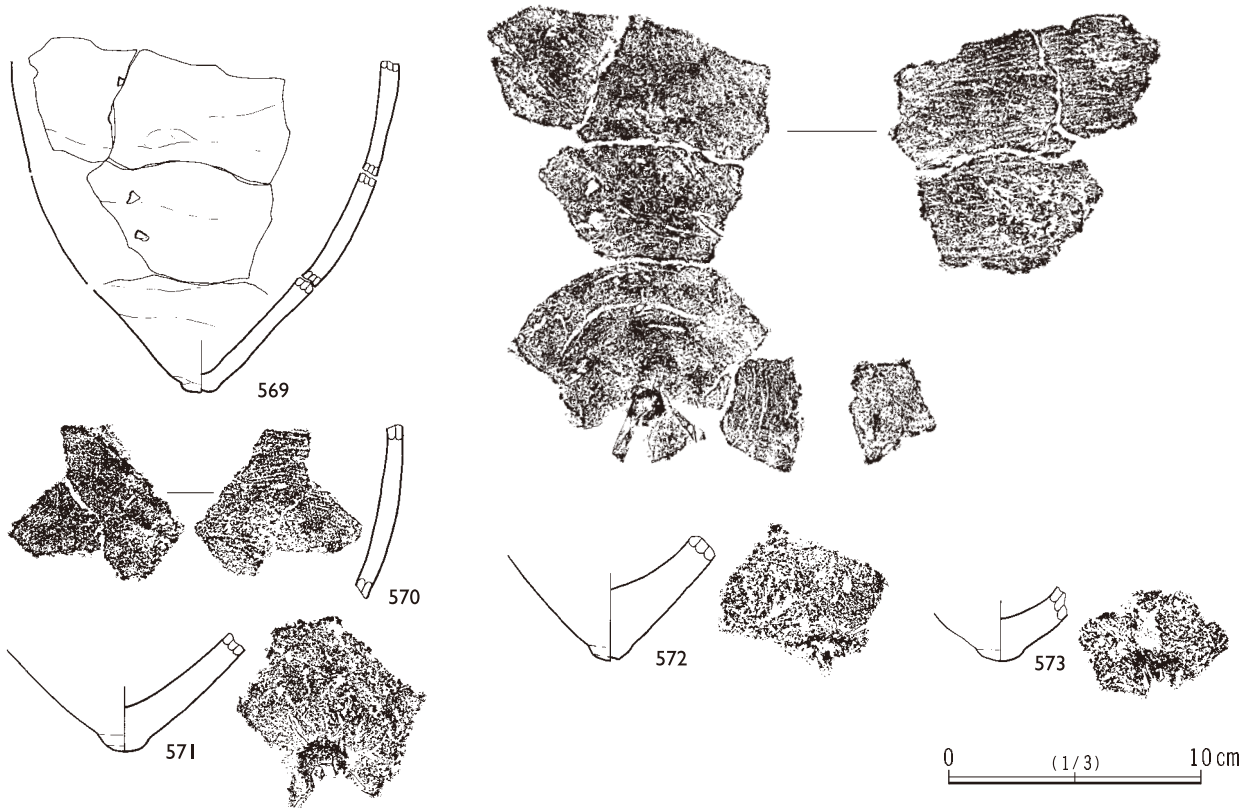
氏資料の中にも補修孔や刻みが施された土器が散見されたため、ここでまとめておきたい（第35図）。

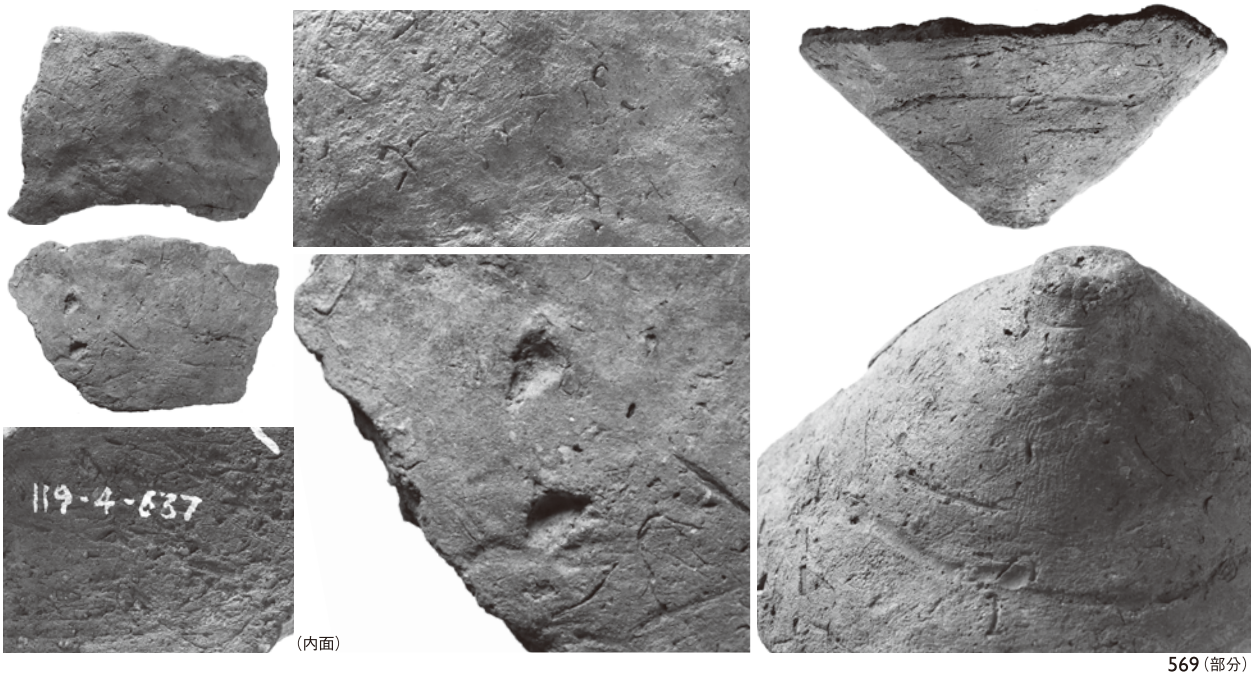
撚糸文期前半の夏島式、稲荷台式土器に認められる補修孔は円形である（15、52）。器壁の半分以上の厚さを外面からの穿孔による。孔の径は四～五㎜程度である。

大浦山式土器には縦長の切れ目状の補修孔が多く認められる（87、88、99、104、109など）。夏島式、稲荷台式や他時期の土器に見られる円形の補修孔は穿孔具の回転によって穿孔されているのに対し、縦長で切れ目状の補修孔は、小林達雄氏の指摘のように、道具の往復によって穿孔されていると考えられる（小林一九七七）。ただ、中には孔がほぼ円形で、回転による穿孔と考えられるものもある（100など）。また穿孔痕は縦長となっても孔そのものは概ね円形であることも多い。多くが外側からの穿孔が深く入り「片面穿孔」（原

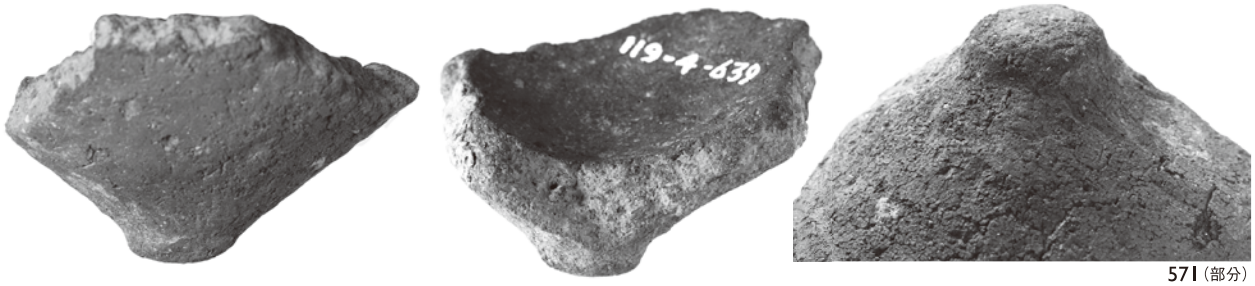
第 8 表　横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表
（早期後半・時期不明）山式）

| 番号 | 注記番号 | 重量(g) | 器面調整（外面） | 器面調整（内面） |
|---|---|---|---|---|
| 562 | 4-565<br>4-636 | 635 | 条痕状の擦痕（斜） | 条痕状の擦痕（横） |
| 563 | 3-402 | 37 | 条痕状の擦痕（斜） | ケズリ状の擦痕（横） |
| 564 | 4-638 | 63 | 条痕状の擦痕？（縦） | 不明瞭 |
| 565 | 4-638 | 57 | 条痕状の擦痕？（縦） | 不明瞭 |
| 566 | 4-638 | 25 | 条痕状の擦痕？（縦） | 不明瞭 |
| 567 | 4-645 | 20 | ケズリ状の擦痕（縦） | ケズリ状の擦痕（縦） |
| 568 | 4-646 | 18 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 569 | 4-637 | 126 | ナデ | 粗い擦痕（横） |
| 570 | — | 26 | ナデ | 粗い擦痕（横） |
| 571 | 4-639 | 51 | ナデ | ナデ？ |
| 572 | 4-640 | 45 | 不明瞭 | 不明瞭 |
| 573 | 4-644 | 21 | 不明瞭 | 不明瞭 |



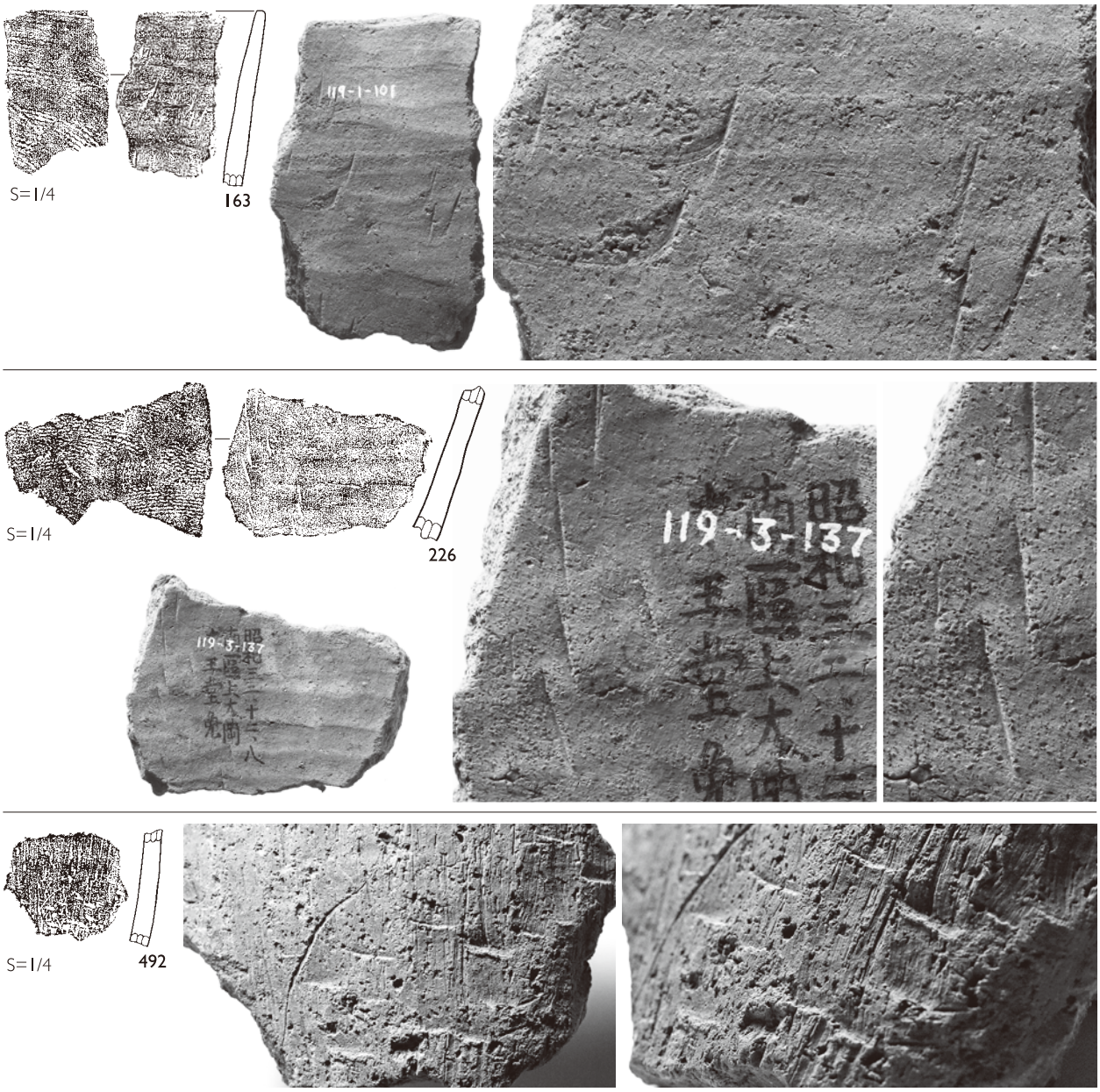




569（部分）




571（部分）

第 33 図　横浜市十王堂免遺跡採集土器（28）（当館蔵）



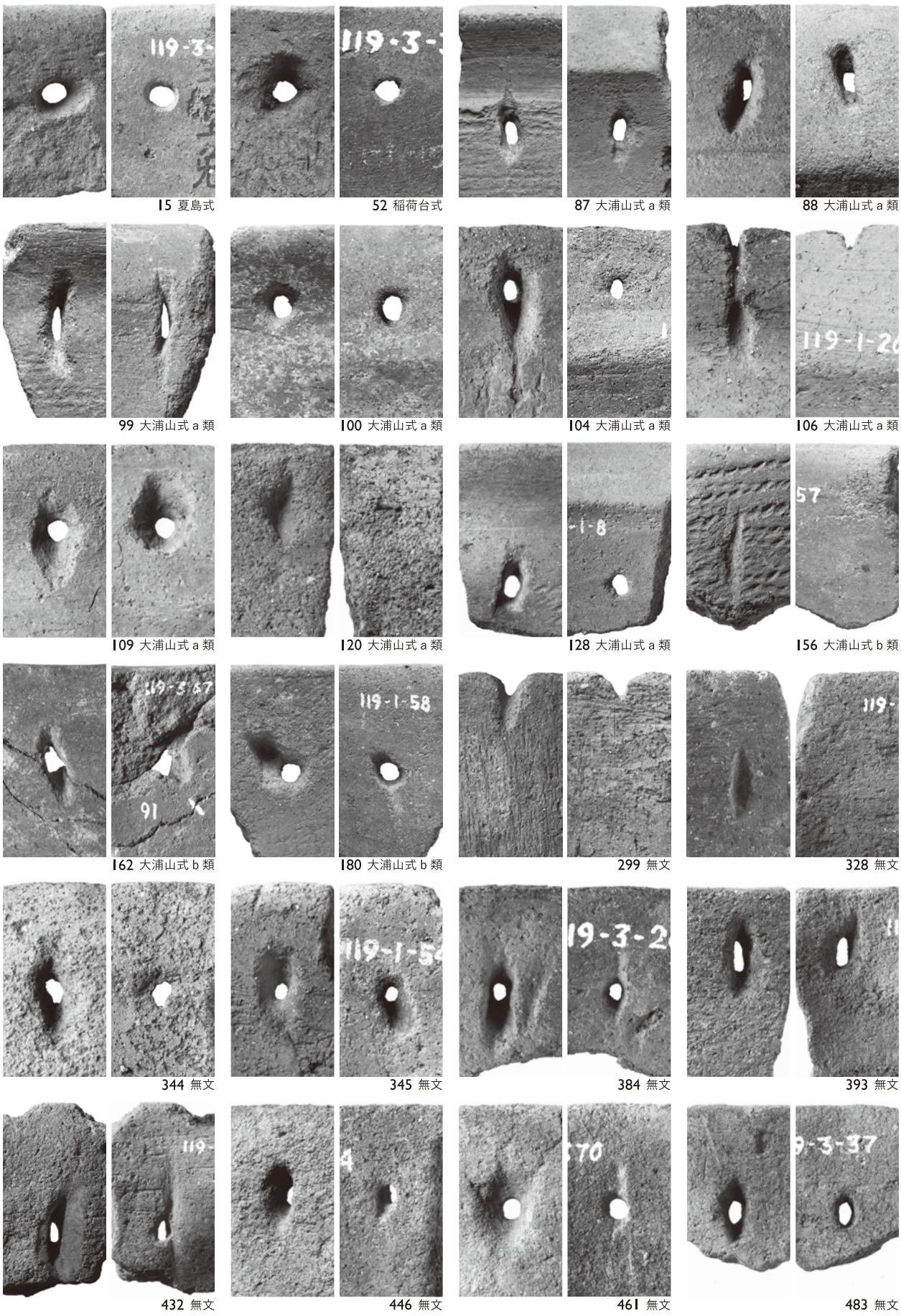

第 34 図　器面調整具の痕跡がみられる土器

田一九九一）のようになる。口唇部に補修刻みが作出されるものは補修孔が穿たれるものに比べ少ない（106、299）。大浦山式の補修孔には穿孔を途中で取りやめたと考えられるものも散見されるが（106、120、156など）、このようなやり方も他の時期にはあまり見られない。106は中途の補修孔に加え、口唇部に楔状の刻みが作出される。180では、穿孔を一度途中で取りやめた後、位置を僅かにずらして再度を行なったようである。孔は円形である。

これらの特徴は無文土器にも共通する。なお、384、432、461には、内面にも擦り切りの痕跡がある。

### （3）無文土器の口縁部変色について

本遺跡出土土器を観察する中で、口縁部が黒色化しているものが一定数存在していることに気付いた（第36図）。いずれも口唇部端から五～一〇㎜程度が黒色化しており、無文の土器に多く見られるが、大浦山式b類（146、208など）や東山式（289）の土器片にも少量認められる。断面を観察すると黒色化は内部には及んでおらず、おそらく使用に伴う痕跡と考えられるが、どのよ




15 夏島式　52 稲荷台式　87 大浦山式 a 類　88 大浦山式 a 類

99 大浦山式 a 類　100 大浦山式 a 類　104 大浦山式 a 類　106 大浦山式 a 類

109 大浦山式 a 類　120 大浦山式 a 類　128 大浦山式 a 類　156 大浦山式 b 類

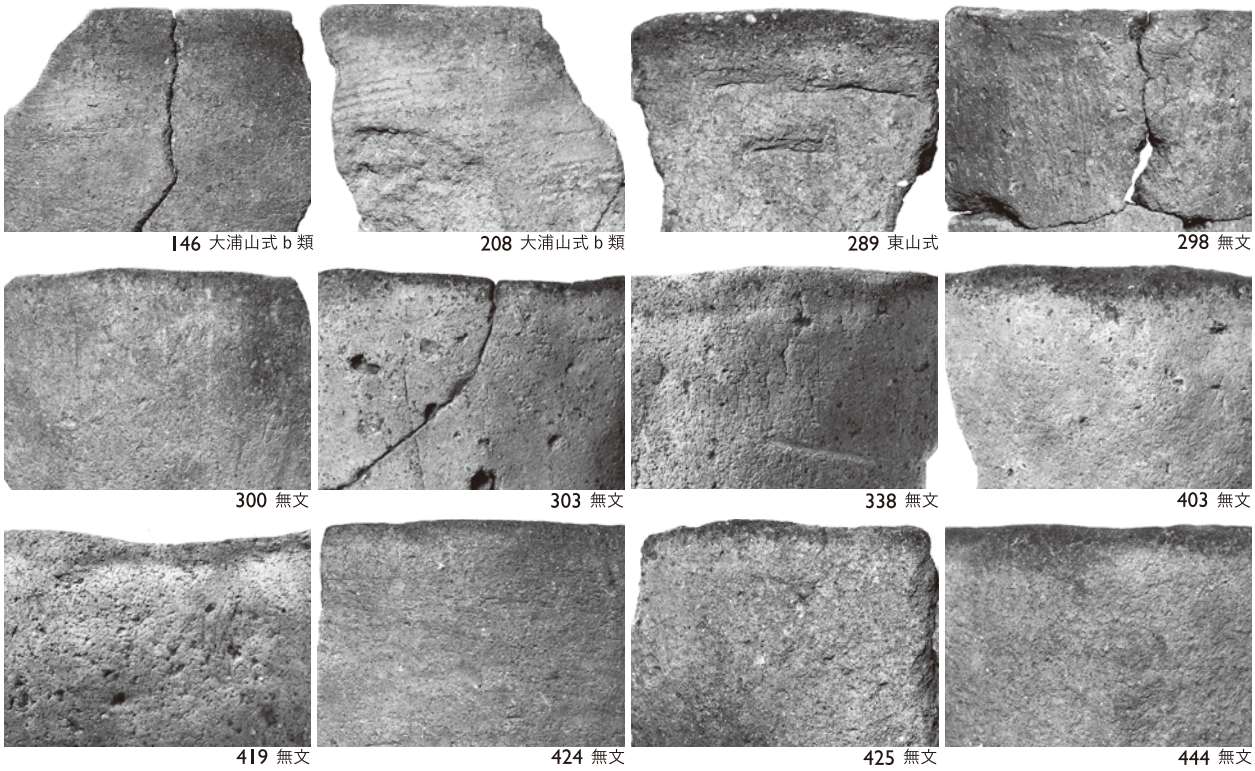
162 大浦山式 b 類　180 大浦山式 b 類　299 無文　328 無文

344 無文　345 無文　384 無文　393 無文

432 無文　446 無文　461 無文　483 無文

第 35 図　土器にみられる補修孔

左：外面　右：内面




第 36 図　口縁部が黒色化した土器群

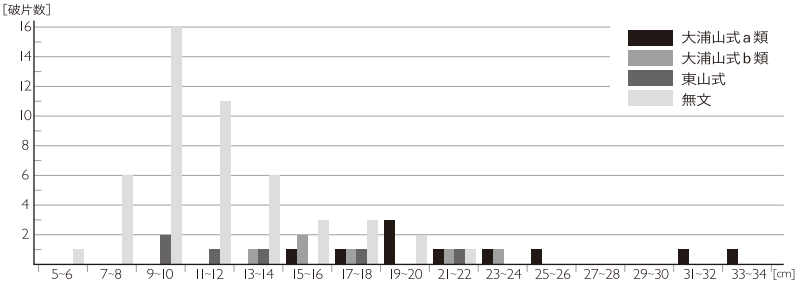
うな要因で生じたのかは現段階ではよく分からない。例えば土器に蓋をして煮沸することなどが想定されようか。実験的な分析も必要であろう。黒色化部分の下端が明確になるもの（403、303など）、漸位的なもの（146、208、289など）が認められる。

### （4）土器の大きさについて

分類ごとの土器群の大きさの傾向を把握するため、口径が復元可能な破片の口径を計測し比較した（第37図下段）。各土器群の口径分布は大浦山式 a 類が十五～三十四㎝、大浦山式 b 類が十三～二十四㎝、東山式が九～二十二㎝、無文土器は五～二十二㎝で、九～一〇㎝にピークが認められる。これらのことから大浦山式に比べ無文土器は明らかに小形となる傾向が指摘できる。東山式は母数が少ないが無文土器に近い傾向を示すようである。なお、夏島式、稲荷台式土器には口径が復元可能な個体は存在しなかった。

また、破片全体における口径復元可能な破片数の比率を算出したところ、大浦山式と無文土器、東山式との間には明確な差が認められた（第37図上段）。土器が割れ、生じる破片の大きさ

| | 撚糸文期前半 | 大浦山式 a 類 | 大浦山式 b 類 | 東山式 | 無文 |
|---|---|---|---|---|---|
| 口縁部破片数（A） | 51 | 59 | 77 | 21 | 176 |
| 口径復元可能破片数（B） | 0 | 10 | 6 | 6 | 49 |
| 口径復元可能比率（B/A） | 0％ | 16.9％ | 7.8％ | 28.6％ | 27.8％ |




第 37 図　十王堂免遺跡採集土器片から復元した口径サイズ

は元の土器の大きさに関わらず一定であると仮定した場合、理論上、元の土器が大きいほど一つの破片から口径を復元できる可能性は低くなり、元の土器が小さければ、一つの破片からでも口径が復元できる可能性は高くなる。算出した比率をそうした視点でみてみると、大浦山式は数値が低く、それに比べ無文土器および東山式は数値が高くなる。つまり大浦山式は東山式や無文土器と比較し、元の個体のサイズが大きい可能性が高く、先の口径サイズの傾向を追認する結果となった。

この傾向の違いの要因を即断することは出来ないが、一つの可能性として用途の違いが反映されていると考えることは許されよう。あるいは先に指摘した口縁部黒色化の現象が無文土器に多く認められることと関連するかも知れない。

無文土器の編年的位置づけは未だ共通の見解に至っていないが、大きさの違いが同時期における用途の違いを示していると想定するならば、無文土器の一部（特にサイズの小さいもの）は大浦山式と同時期に存在した可能性が高いということになる。今後、無文土器の編年を検討する際には、このような視点も有用となるかも知れない。

### （5）林氏資料の数量

林氏資料の破片数、重量の内訳を第38図に示した。大浦山式および無文土器が多数を占め、撚糸文期前半（夏島式、稲荷台式）、東山式は少ない。大浦山式a、b類の内訳は、破片数ではb類が、重量ではa類が多く、一つの破片の重さ（大きさ、厚さ）がa類の方が重いという傾向を示している[10]。周辺の撚糸文期後半の遺跡においては、押型文土器が出土する例も散見されるが（岡本一九五七・一九五九、守屋一九九五など）、林氏資料には確認できなかった。

実際に存在した土器の個体数を破片資料から復元することは容易ではないが、底部の破片数は最小個体数として有効である。林氏資料には大浦山式二十五点、無文土器六十七点の底部破片が含まれている。本稿で無文土器とした一群が、撚糸文期の複数時期の土器を含んでいるという前提は踏まえなければならないが、それであっても一遺跡からの出土としては、これまでに知られている当該期遺跡の中でも極めて多い部類に入ると言えよう。

## おわりに

十王堂免遺跡は、これまでもその名前こそ知られてはいたが、内容が公表される機会はほとんどなかった。本稿で中期以外のほぼ全ての土器片を紹介したが、土器の量だけからしても、本遺跡が当該期の遺跡として大規模なものであったことが推察され、おそらく、撚糸文期後半にあっては、複数の住居址からなる集落跡であったと想像される。なお、本

**重量**

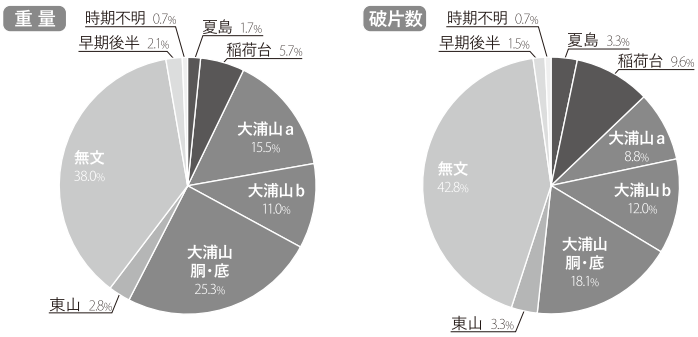
| | 夏島 | 稲荷台 | 大浦山a | 大浦山b | 大浦山 胴・底 | 東山 | 無文 | 早期後半 | 時期不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 合計 42,558g [4,854g] | 706 | 2,429 | 6,589 | 4,676 | 10,781 [3,842] | 1,209 | 16,168 [945] | 896 [41] | 295 [26] |

単位は g。[ ] は非掲載資料の重量（内数）。

**破片数**

| | 夏島 | 稲荷台 | 大浦山a | 大浦山b | 大浦山 胴・底 | 東山 | 無文 | 早期後半 | 時期不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 合計 669片 [86片] | 22 | 64 | 59 | 80 | 121 [64] | 22 | 286 [18] | 10 [3] | 5 [1] |

単位は片。[ ] は非掲載資料の破片数（内数）。




第 38 図　十王堂免遺跡採集土器群の重量・破片数の内訳

稿ではあまり触れられなかったが、今回報告した土器には、表面に貝塚から出土する土器にみられるような白色付着物のあるものが散見された。これは土器を包含していた土層付近に貝層のあったことを示している可能性がある。ただ、林氏や芹沢氏の記述にはそのような内容は見られなかった。今後、理化学的な分析等を行なうことで、より遺跡の状況を復元できる可能性もあろう。

また、遺跡の評価を行なうためには土器以外の資料についても分析も行なう必要がある。林氏の十王堂免遺跡採集資料には、スタンプ形石器や「礫斧」（原田一九八八）といった撚糸文期に特有の石器群が大量に含まれている。これらの整理も今後行なっていく予定である。

さらに、当館には、十王堂免遺跡周辺の林氏の採集資料も多く収蔵されており、その中には撚糸文期をはじめとする、本遺跡と近い時期のものも少なからず含まれている。それらの整理、分析を進めることで、本遺跡を含めた当該地域のより具体的な姿を描くことが可能となってこよう。今後はこれらの公表も順次進めていきたいと考えている。

**謝辞**

本稿をまとめるにあたり、石井寛氏、原田昌幸氏、建石徹氏、安藤広道氏、藤山龍造氏、小林謙一氏、戸田哲也氏、峰村篤氏、川口徳治朗氏、武田周一郎氏、大網信良氏、長佐古真也氏の各氏にご教示、ご助言をいただきました。

また図版の作成にあたっては髙山理美氏、橋本遼太氏、小澤政彦氏のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

**註**

（1）当館の所蔵する林氏旧蔵資料のうち、横浜市称名寺貝塚採集土器については既に報告を行なっている（千葉二〇一五）。またその一部を対象とした胎土分析、赤色顔料分析および同貝塚で林氏が採集した骨角器については本誌で報告を行なっている（建石・降幡・千葉報文および高橋・千葉報文参照）。

（2）林氏の手書き文章は、句読点が全て句点で表現されている。引用に際しては、文脈から適宜句点を読点に改めた。

（3）横浜市磯子区ウェブサイト内「磯子区歴史年表 昭和二十一年～昭和四十五年」による。（http://www.city.yokohama.lg.jp/isogo/isogo/nenpyo/nenpyo2.html、二〇一六年七月三〇日閲覧）

（4）本稿では林氏の言う「十王堂免」採集資料を対象とした。「平台」「森町赤穂原」等の注記をもつ資料は今後整理を行なう予定である。

（5）藤山龍造氏のご教示による。

（6）接合した破片が複数存在するため、この破片数と図版番号は一致しない。

（7）岡本勇氏は大浦山遺跡での報文で、大浦山式土器のうち撚糸文が施される一群（「第一型式」）について「器面は表裏ともによく磨かれており、とくに表面では多くのものにつやが感じられる。」としている（傍点は原典ママ、岡本一九六〇）。ただ、林氏資料の中には後期に属する土器は確認されていない。

（8）紅取遺跡の入海式土器も林氏の採集資料であり、当館に収蔵されている（神奈川県立博物館編一九七〇　図版3―4）。

（9）この傾向は型式の特性によるものではなく、廃棄や埋没といった遺跡における二次的な要因によるものであろう。

**引用文献**

石井　寛　一九九一「横浜市内の撚糸文終末期資料とその評価」『調査研究集録』第八冊　横浜市埋蔵文化財センター

岡本　勇　一九五七「相模平坂貝塚」『駿台史学』三　駿台史学会

岡本　勇　一九五九「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第三号　横須賀市博物館

岡本　勇　一九六〇「三浦市大浦山遺跡」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第四号　横須賀市博物館
神奈川県史編纂室編　一九七九『神奈川県史　資料編二〇　考古資料』
神奈川県立博物館編　一九七〇『神奈川県考古資料集成二　縄文式土器』神奈川県立博物館
神奈川県立博物館編　一九八〇『紅取遺跡』神奈川県立博物館発掘調査報告書第十二号　神奈川県立博物館
小林達雄　一九七七「縄文土器の世界」『日本原始美術大系　一　縄文土器』講談社
篠原　正　一九七七『金堀遺跡発掘調査概報』富里村史編纂委員会
杉原荘介・芹沢長介　一九五七『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告考古学第二冊　明治大学
芹沢長介　一九五七「神奈川県大丸遺跡の研究」『駿台史学』七号
芹沢長介　一九六二「神奈川県横浜市赤穂原遺跡」『日本考古学年報』十一　日本考古学協会
千葉　毅　二〇一五「神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料―林國治氏、小林小三郎氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料―」『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四十二号　神奈川県立歴史博物館
戸田哲也　一九八八「縄文土器の型式学的研究と編年（中篇）」『神奈川考古』第二十三号　神奈川考古同人会
戸田哲也　一九九五「撚糸文系土器終末期の一様相―片瀬山ａ・ｂ類土器を中心として―」『縄文時代』第六号　縄文時代文化研究会
中西克也・中野修秀　一九八五『東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡　滝・木浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書』菅谷古墳及び南外輪戸遺跡調査会
中村信博　二〇〇二『天矢場』茂木町教育委員会
林　國治　一九六七『西日本旅行メモ　あしあとの記』シマ文庫
林　國治　一九七七『昭和五十二年記　横浜の遺跡名表と石鏃採集数控え』（私家本）
横浜開港資料館所蔵　請求番号：林資料十二
林　國治　一九七九『昭和五十四年記　私の考古学付記』（私家本）横浜開港資料館所蔵　請求番号：林資料十八
原田昌幸　一九八六「撚糸文系土器終末期の諸問題　無文土器「東山式」の設定」『物質文化』四六号
原田昌幸　一九八七「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅱ）「平坂式」の再検討」『物質文化』四十八号
原田昌幸　一九八八「木工具としての撚糸文期の〈礫斧〉について」『竹篦』第五号　北総たけべらの会
原田昌幸　一九八九「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅲ）―「大浦山式土器」の検討―」『物質文化』五十二　物質文化研究会
原田昌幸　一九九一『撚糸文系土器様式』ニューサイエンス社
原田昌幸　二〇〇八「撚糸文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
宮崎朝雄　一九八一「撚糸文系土器群の終末と無文土器群」『土曜考古』第三号　土曜考古学研究会
宮畑北遺跡発掘調査団編　一九九四『片瀬山遺跡（宮畑北）発掘調査報告書』神奈川県企業庁水道局施設課
守屋豊人　一九九五「平坂貝塚出土土器の再検討―層位的出土状況の再確認を中心として―」『明治大学考古学博物館　館報』No.一〇　明治大学考古学博物館
野内秀明　一九八四「三浦半島における無文土器群の様相」『横須賀市人文博物館研究報告』二八
横浜市埋蔵文化財センター編　一九九〇『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XI　山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター